

# Dark Triad の統合モデルの提案とその妥当性の検討

下司 忠大

はじめに .....	3
<b>第一章 Dark Triad の 3 特性.....</b>	<b>5</b>
第 1 節 マキャベリアニズム .....	6
第 2 節 自己愛傾向 .....	10
第 3 節 サイコパシー傾向 .....	15
第 4 節 まとめ .....	19
<b>第二章 Dark Triad の概念的変遷.....</b>	<b>20</b>
第 1 節 等質性・異質性 .....	21
第 2 節 単一の構成概念としての Dark Triad .....	23
第 3 節 「Dark Triad 総合因子」への批判 .....	27
第 4 節 Dark Triad 概念の現在 .....	30
第 5 節 まとめ .....	32
<b>第三章 Dark Triad の研究動向 .....</b>	<b>33</b>
第 1 節 尺度 .....	34
第 2 節 パーソナリティ .....	36
第 3 節 社会情緒的機能 .....	39
第 4 節 対人行動 .....	41
第 5 節 反社会的行動 .....	45
第 6 節 内的適応性 .....	48
第 7 節 まとめ .....	49
<b>第四章 Dark Triad の統合モデルの提案 .....</b>	<b>51</b>
第 1 節 非共感性・冷淡さ .....	56
第 2 節 サイコパシー傾向 .....	57
第 3 節 マキャベリアニズム .....	62
第 4 節 まとめ .....	67

<b>第五章</b>	<b>問題点，全体の目的</b> .....	<b>68</b>
第1節	本研究の問題意識 .....	69
第2節	全体の目的 .....	78
<b>第六章</b>	<b>Dark Triad の測定尺度の開発</b> .....	<b>80</b>
第1節	研究 1: SD3-J の因子構造の検討 .....	81
第2節	研究 2: SD3-J の信頼性・妥当性の検討 .....	88
第3節	総合考察 .....	97
<b>第七章</b>	<b>Dark Triad と対人方略</b> .....	<b>99</b>
第1節	研究 3: Dark Triad と他者操作方略の関連 .....	100
第2節	研究 4: Dark Triad と対人葛藤方略 .....	107
第3節	総合考察 .....	114
<b>第八章</b>	<b>Dark Triad と反社会性</b> .....	<b>116</b>
第1節	研究 5: Dark Triad と外顕性・関係性攻撃の関連 .....	117
第2節	研究 6: Dark Triad とゴミのポイ捨て行動との関連 .....	123
第3節	総合考察 .....	132
<b>第九章</b>	<b>Dark Triad と社会適応性</b> .....	<b>134</b>
第1節	研究 7: Dark Triad とライフスキルの関連 .....	135
第2節	研究 8: Dark Triad とコーピングスタイルとの関連 .....	142
第3節	総合考察 .....	152
<b>第十章</b>	<b>総括的討論</b> .....	<b>154</b>
第1節	Dark Triad の統合モデルの妥当性 .....	155
第2節	Dark Triad の統合モデルの意義 .....	157
第3節	本研究の限界と今後の展望 .....	163
	<b>引用文献</b> .....	<b>165</b>

## はじめに

「冷たい人」「冷淡な人」と形容されるような人物は、私たちの社会で様々な様相を呈する。例えば、自分の優れた面を誇示しようとして他者を平気で蔑んだり利用したりする人、周囲を巧みに操ったりコントロールしたりすることで将来的に自分の利益を最大化するような人、目先の利益のためにありとあらゆる手段を使って利他的に行動するような人、などが挙げられる。このような人物像で表されるパーソナリティ特性は、パーソナリティ心理学の分野ではそれぞれ「自己愛傾向」、「マキャベリアニズム」、「サイコパシー傾向」という概念のもとで研究されてきた。現在では、これらの3特性はいずれも”Dark”な特徴を有することから、Dark Triadと総称され (Paulhus & Williams, 2002), Dark Triadに焦点をあてた研究が蓄積されてきている。

現在のところ、Dark Triadの3特性にはそれぞれ適応的な側面と不適応的な側面の相対する特徴があることが示されている一方で (e.g., Back, 2018; 増井・浦, 2018), その両側面を統合するようなモデルが提案されていないという問題を指摘することができる。ただし、自己愛傾向のモデル化においてはその適応的な側面と不適応的な側面を単一の潜在的な動機づけ次元を想定することで統合するようなモデルが提案されており、その妥当性が確認されている (Back, 2018)。マキャベリアニズムやサイコパシー傾向にも適応的な側面と不適応的な側面があることを踏まえれば、このようなアイディアは自己愛傾向だけでなく、Dark Triad全体にまで拡張できる可能性がある。

そこで本稿では、Dark Triadの3特性それぞれの適応的な側面および不適応的な側面の相対する特徴を統合するようなモデルを提案し、その妥当性を検討することを目的とする。本稿ではまず、第一章においてDark Triadと呼ばれるマキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向の3つの概念を個々に研究した知見をまとめ、それぞれの特性の起源、下位側面、適応・不適応性について記述する。第二章では、それぞれ個々に研究が進められてきた3特性がどのような経緯で総称されてきたのかという点や、そこで生じた

概念的問題について論じる。第三章では Dark Triad の研究動向について概観し、Dark Triad の各特性の共通点と相違点について実証的な観点から整理する。第四章では、従来の Dark Triad モデルの問題点を指摘し、新たな Dark Triad の統合モデルを提案する。第五章ではその Dark Triad の統合モデルの妥当性を検討する上で必要な先行研究の問題点を指摘し、問題設定を行う。第六章から第九章ではそれぞれ Dark Triad の統合モデルが妥当なモデルであるとするば予測される関連が実際に確認されるかどうかを検討した結果を報告し、考察を行う。第十章では、本稿で提案された Dark Triad の統合モデルの意義や本研究の限界点および今後の展望について論じる。

# 第一章 Dark Triad の 3 特性

“Dark Triad” という用語は Paulhus & Williams (2002) によって提案されたものであり、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向の 3 特性を総称したものである。Paulhus & Williams (2002) はこれらの特性がいずれも互いに類似した概念であり、いずれも”Dark”な特徴を有する概念であるためにこれらの特性をまとめて呼称した。Dark Triad がどのような概念として扱われ、これまでにどのような研究がなされてきたのかを述べるまでに、本章ではまずこれら 3 特性の概念的起源や測定および概念化について論じる。

### 第 1 節 マキャベリアニズム

マキャベリアニズムとは、Cristie & Geis (1970) によって起草・概念化された、15-16 世紀の政治思想家であったマキャベリ (Niccolo Machiavelli) の政治思想を基としたパーソナリティ特性であり、自分の利益のために他者を操作する傾向性を指す概念である。Cristie & Geis (1970) は元々、政治的なリーダーとしてフォロワーを巧みに扱うような人物に関心を抱き、そのような人物の個人的特徴を概念化しようとした。その中で、どのような人物が他者を上手く操れるのかについて特徴をリストアップしたところ、(1) 対人関係において感情が欠落していること、(2) 世間一般の道徳観を重要視しないこと、(3) 精神病理的な特徴を示さないこと、(4) 自分の信念・信条を持たないこと、の 4 つを挙げている (Cristie & Geis, 1970)。Cristie & Geis (1970) はこの 4 つの特徴にあてはまる歴史上の人物を検討した結果、マキャベリが最も当てはまる人物であるとして、マキャベリの著した『君主論』 (Lisio, G, 1990 池田訳 2018) および『ディスコルシ』 (Bertelli, S, 1960 永井訳 2015) の記述を抜粋して尺度項目とし、マキャベリアニズム尺度を作成した (Mach-I, II, III, IV, V)。その中でも、信頼性と妥当性が比較的高く、現在でも幅広く用いられているのが Mach-IV (Cristie & Geis, 1970) である。

マキャベリアニズムの下位側面については戦略 (Tactics) と世界観 (Views) が見出されることが Mach-IV の項目を対象とした因子分析の結果か

ら示されている (Fehr, Samsom, & Paulhus, 1992)。「戦略」はマキャベリアニズムが自分の利益を高めるために行う戦略的な側面を表したものであり、Mach-IV (Cristie & Geis, 1970; 中村他, 2012) の項目では、例えば「人を扱うコツは、相手が喜びそうなことをいってやることである」や、「人に何かしてもらいように頼むとき、もっと説得力のあるほかの理由を言うよりも、それが必要な本当の理由を言うのが一番である」といった項目が挙げられる。「世界観」はマキャベリアニズムのシニカルな世界観を表したものであり、Mach-IV (Cristie & Geis, 1970; 中村他, 2012) の項目では、例えば「人には皆、邪悪な性質があり、機会があればそれが現れるものだと考えるのが一番無難だ」や、「人はたいてい、財産を失ったことより、父親が亡くなったことのほうを簡単に忘れてしまう」といった項目が挙げられる。このようにマキャベリアニズムは、全体として他者に対するシニシズムや他者を巧みに操作する傾向性を表したパーソナリティ概念であると言える。

マキャベリアニズムの概念を確立した Cristie & Geis (1970) 以降、マキャベリアニズムが高い者の特徴は何か、というテーマについて、数多く研究がなされてきた。Jones & Paulhus (2009) は、これまでのマキャベリアニズムの研究を広範にレビューし、マキャベリアニズムが高い者は富、名声、権力に強く動機づけられていることや、高い IQ や認知的能力を持っているわけではないこと、また、他者から良く評価されること、他者の状況に左右されやすいものであることを認識していること、合理的な世界観を有することなどが論じられている。また、マキャベリアニズムが高い者の腹黒さ (malevolence) について、マキャベリアニズムが高い者は自分の都合の良いように他人の印象を操作したり、巧みに自己開示をしたり、弱いフリをすることで他人を出し抜いたりすることや、非倫理的な行動および反社会的行動を行う傾向にあることなどが論じられている (Jones & Paulhus, 2009)。

マキャベリアニズムの下位側面については、それぞれ側面によって異なる関連のパターンが示されている。そのような知見として、Monaghan, Bizumic,



& Sellbom. (2018) では、マキャベリアニズムの戦略と世界観の法則定立的ネットワークが広範に検討され、両次元が協調性や正直さ-謙虚さ (Honesty-Humility) と負の関連を示す一方で、戦略の次元は勤勉性や共感性と負の関連を示し、世界観の次元が情動性と負の、不信感や非行と正の関連を示すことが報告されている。また、Monaghan, Bizumic, & Sellbom (2016) では、戦略の次元は様々な精神病理的特徴 (抑うつ, 恐怖, 不安, 衝動性, 外在化, 思考不全) とほとんど関連は示されなかったが、世界観の次元は全ての精神病理的特徴と正の関連を示した。以上の結果から、マキャベリアニズムの下位側面である戦略は、世界観に比べると適応的な概念であると考えられる。

これまでのマキャベリアニズムの知見は、代表的な尺度として Mach-IV を用いて数多く蓄積されてきた。しかし、Mach-IV の構成概念妥当性については批判もなされており、Jones & Paulhus (2009) はマキャベリアニズムの概念を再考した上で、Mach-IV ではその概念内容を十分に測定しきれていないことを指摘している。Jones & Paulhus (2009) は元々のマキャベリの思想から Cristie & Geis (1970) に至るまで、マキャベリアニズムが高い者は敵意的で衝動的であるというよりもむしろ冷静で戦略的な形で描かれていたにも関わらず、Mach-IV は衝動性と正の相関が示されてきた (e.g., Marušić, Bratko, & Zarevski, 1995) ことを指摘している。この点については、マキャベリの著作から項目を作成したことにより構成概念の内容に偏りが生じたことが考えられる。そこで Jones & Paulhus (2009) は別の歴史的人物の著作を取り上げ、マキャベリアニズムの操作的定義の中に含めるべきであることを指摘した。その人物が紀元前 500 年頃の中国の思想家である孫武であり、孫武はその著書『孫子』(中華書局, 1961 金谷訳 2012) において、マキャベリと同様に政治的な成功を収める上での戦略的な思想を描いている。Jones & Paulhus (2009) は、孫武の『孫氏』(中華書局, 1961 金谷訳 2012) に描かれているような政治・軍事的な成功を収める上での冷静な準備や戦略がマキャベリアニズムの概念に含まれるべきであるということを指摘している。

Jones & Paulhus (2010a) は以上の孫武の思想とマキャベリの思想が同等のものであることを指摘し、その両方の思想を統合したものがマキャベリアニズムであると指摘した。Jones & Paulhus (2010a) ではマキャベリや孫武の記述に基づき、マキャベリアニズムの概念には上述したような特徴に加えて次の 6 つの特徴があることを指摘している。第 1 に長期的目標 (long-term goals) であり、マキャベリも孫武も、長期的な勝利を得るためには合理的で、慎重で、気が長く、自覚的で、冷淡でなければならないことを記述している。第 2 に、計画と準備 (planning and preparation) であり、マキャベリは目標を達成する上での準備の必要性を説いている。第 3 に、衝動制御 (impulsive control) であり、マキャベリも孫武も衝動を抑えて慎重に行動することが勝利への鍵であることを指摘している。第 4 に状況的適応 (situational adaptation) であり、マキャベリも孫武も状況に応じて様々な顔を使い分けることの重要性を説いている。第 5 に関係構築 (alliance building) であり、孫武は同じ目標を掲げる他者と同盟を組み、戦利品を分け合うことが重要であることを指摘している。第 6 に評判 (reputation) であり、マキャベリも孫武も支配的かつ説得的なメッセージによって他者からの支援を受けたり、恐れさせたりすることの重要性を説いている。

このような点を踏まえ、Rauthmann & Will (2011) はマキャベリアニズムの各次元を包括するような概念化を試みている。具体的には、マキャベリアニズムの感情、行動、認知、欲求・動機づけについて、各次元を詳細にまとめている。感情的側面については、情動的な分離と良心の低さで構成されており、マキャベリアニズムが高い者の情動的浅薄さや冷淡さが表現されている (Rauthmann & Will, 2011)。行動的側面については他者操作と具体的な戦略、搾取、行動的な分離、敵対性、自己利益行動、柔軟な戦略、反社会的行動まで、マキャベリアニズムが高い者の自己中心的な行動や狡猾さが表されている (Rauthmann & Will, 2011)。認知については、否定的世界観、否定的人間観、戦略、自我中心性で構成され、マキャベリアニズムが高い者のシニカルな視

点や認知的智略が反映されている (Rauthmann & Will, 2011)。欲求・動機づけについては、自己中心性、作動志向、衝動統制で構成されており、マキャベリアニズムが高い者の長期的かつ物質的な利益に対する目標設定が表されている (Rauthmann & Will, 2011)。

以上のようにマキャベリアニズムは伝統的には戦略と世界観の二次元で表現されており、その二次元の全体に孫武の思想が加えられたものとして概念化されてきた。Rauthmann & Will (2011) は二次元性を考慮していないが、戦略と世界観の二次元を維持した上で孫武の思想が加えられるとすれば、戦略には長期的な志向や衝動統制が加えられると考えられ、世界観には敵対性や自己中心性が加えられるであろう。このような点を考慮すれば、全体としてマキャベリアニズムは適応的な側面と不適応的な側面の複合的な特性として理解できる。

## 第 2 節 自己愛傾向

自己愛傾向は、元々は自分の姿に酔いしれて恋焦がれてしまったナルキッソスのギリシャ神話に基づいて、精神分析理論において論じられてきた心的機能の 1 つであり (川崎, 2011; Levy, Ellison, & Reynoso, 2011), 実証的な研究においても自己に対して誇大で尊大な行動をとる傾向性を表す一般的なパーソナリティ特性として確立した概念である (川崎, 2011; Levy, et al., 2011)。初期のパーソナリティ特性として自己愛傾向を捉えた代表的な論者が Wälder (1925) であり、そこでは横柄さ、優越感、称賛欲求、共感性のなさを背景とした自己顕示欲などの特徴が描かれていた (Levy et al., 2011)。それから自己愛に関するいくつかの理論的展開が広まり、アメリカ精神医学会 (American Psychiatric Association: APA) の診断・統計マニュアル第 3 版 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 3<sup>rd</sup> edition; DSM-III) において「自己愛性パーソナリティ障害」の診断体系が築きあげられた。この診断体系は DSM の版が重なっても基本的には同じような基準が組み立てられており

(川崎, 2011), 現行の DSM-V においては, 自己愛性パーソナリティ障害は「誇大性 (空想または行動における), 賛美されたい欲求, 共感の欠如の広範な様式」として定義されている (APA, 2013)。

このような DSM の診断基準を基にして, 一般的なパーソナリティ特性としての自己愛を測定する尺度 (Narcissistic Personality Inventory; NPI) を作成したのが Raskin & Hall (1979) である。Raskin & Hall (1979) は DSM-III の診断基準を基に自己愛傾向を表す 223 項目を作成し, 54 項目からなる NPI を構成した。その後, Raskin & Terry (1988) によって, 主成分分析に基づいて尺度構成が行われ, 現在でも代表的に用いられる NPI-40 が構成されている。この NPI は様々な研究で広く用いられ, 自己愛傾向の概念化が試みられていった。現在では, この NPI を用いた研究に基づき, 自己愛傾向を「誇大性を維持するシステム」とする見方が優勢である (Jones & Paulhus, 2010a; 川崎, 2011; 中山, 2008; Paulhus, 2014; Paulhus & Williams, 2002)。

自己愛傾向の下位側面については, 近年の研究では 3 因子構造が支持されており, 指導性・権力, 誇大的な自己顕示, 特権意識・搾取性の構造が支持されている (Ackerman et al., 2011)。指導性・権力は人の上に立って人を従えることを好む傾向性を表し, 誇大的な顕示は自身の誇大な側面を他者に顕示することへの欲求を表す。特権意識・搾取性は他者に比べて自分が特別であるという感覚を表したものである。NPI-40 (Fukushima & Hosoe, 2011; Raskin & Terry, 1988) における項目例としては, 指導性・権力では「自分は生まれながらのリーダーである」や「リーダーになることを好む」, 誇大的な自己顕示では「公の場に出たとき, 自分がどんなふうに見えるか人が注目しないと腹が立つ」や, 「注目の的になるのが好きである」, 特権意識・搾取性は「自分に当然払われるべき敬意を強く要求したい」や「私は権力への強い意志を持っている」といった項目がある。自己愛傾向の下位側面のうち, 指導性・権力や誇大な顕示は社会適応的な側面を, 特権意識・搾取性は社会不適応的な側面を表していることが示されている (Ackerman et al., 2011)。

このように 1 つの概念に適応的な側面と不適応的な側面の両方が混在している問題について、Back et al. (2013) は自己愛傾向を自己愛的賞賛 (Narcissistic Admiration) と自己愛的敵対 (Narcissistic Rivalry) の 2 次元で捉えることを提案している。この 2 次元のモデルを Figure 1-1 に示す。このモデルは自己愛的賞賛・対抗の概念 (Narcissistic Admiration and Rivalry Concept; NARC) と呼ばれ、以下の 3 点を目的として提案された (Back et al., 2018)。第 1 の目的は、自己愛傾向の誇大的な側面についてエージェンティックな側面 (i.e., 力や支配性) と敵対的な側面 (i.e., 怒りや攻撃性) を包括して構成する自己制御過程を表すことである。第 2 の目的は、その両方の自己制御過程の動機づけ基盤を区別して描き出すことである。第 3 の目的は、適応・不適応のそれぞれの社会的アウトカムを説明することである。

Back et al. (2013) に基づき、このモデルの要点を以下に述べる。このモデルでは、自己愛的な社会戦略を「潜在的な動機づけダイナミクス」(underlying motivational dynamics), 「行動的ダイナミクス」(behavioral dynamics), 「社会関係的帰結」(social interaction outcomes) の 3 つのプロセスで表現している。自己愛的な社会戦略は潜在的な動機づけダイナミクスにより始まる。自己愛傾向が高い者には「誇大な自己の維持」(maintenance of grandiose self) という動機づけが根本にあることが想定されており、さらにこの動機づけは誇大な自己を積極的に獲得していこうとする「積極的な自己高揚」(assertive self-enhancement) と、誇大な自己を脅かそうとする敵に防衛的に対処しようとする「敵対的な自己防衛」(antagonistic self-protection) に分けられる。そして、これらの動機づけを充足させるために、行動的ダイナミクスが活性化される。

行動的ダイナミクスは認知、感情、行動の 3 側面が相互作用するモデルであり、積極的な自己高揚には「自己愛的賞賛」(narcissistic admiration) が、敵対的な自己防衛には「自己愛的敵対」(narcissistic rivalry) が対応している。自己愛的賞賛においては、感情的側面には自分が偉大で特別な人間でありたいという「特別感希求」(striving for uniqueness) が、認知的側面には自分の

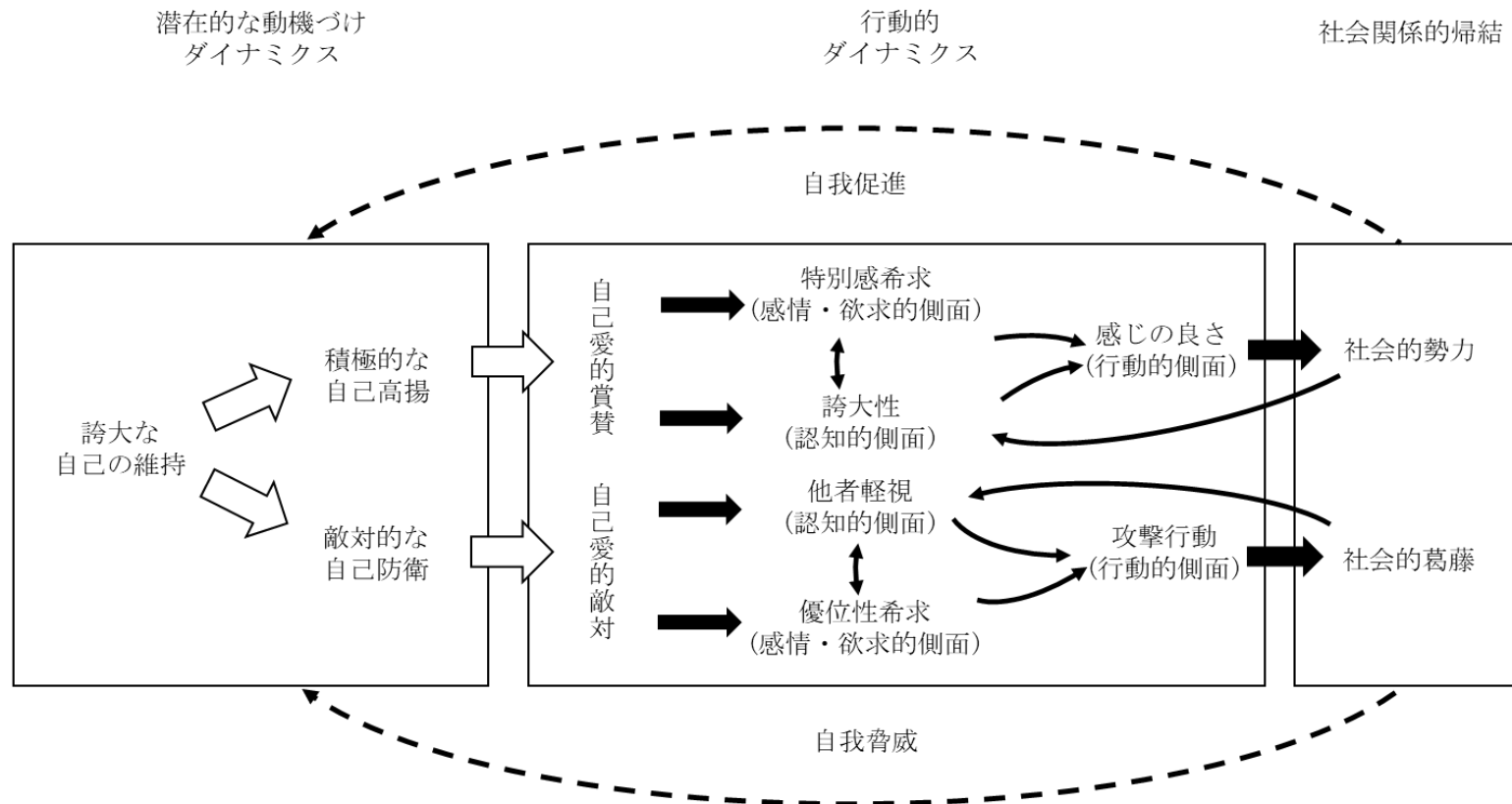


Figure 1-1. NARC の概念図 (Back et al., 2013 を参考に作成)

ことを偉大で特別な人間であると認識する「誇大妄想」(grandiose fantasies)が布置されている。そして、これらの感情的側面と認知的側面は相互に作用しあいながら、他者に自信をもって接したり、自分を印象づけたりするような「感じの良さ」(charmingness)という行動的側面を生起させる。自己愛的敵対においては、感情的側面には他者よりも優位な立場でありたいという「優位性希求」(striving for supremacy)が、認知的側面には他者の能力や価値を軽視する「他者軽視」(devaluation)が位置づけられている。これらの両側面は互いに相互作用しあい、他者を自分の思い通りに服従させるような「攻撃性」(aggressiveness)という行動的側面を生起させる。

感じの良さおよび攻撃性は、それぞれ適応的・不適応的な社会関係的帰結を生じさせることが想定される。感じの良さはリーダーとしての選ばれやすさや魅力、社会的関心の得やすさなどの「社会的勢力」(social potency)を高め、適応的なアウトカムに結び付くことが考えられる。攻撃性は社会的拒絶や排斥、不人気、批判などの「社会的葛藤」(social conflict)を高め、不適応的なアウトカムに結び付くことが考えられる。

これらの社会関係的帰結は行動的ダイナミクスの認知的側面および潜在的動機づけダイナミクスにフィードバックされる。行動的ダイナミクスにおいては、社会的勢力はポジティブなアウトカムであるために誇大妄想を高める方向に働き、社会葛藤はネガティブなアウトカムであるために他者軽視を高める方向に働く。また、潜在的動機づけダイナミクスについては、社会的勢力は誇大な自己を高めるものであるために、元の積極的な自己高揚をさらに動機づける(自我促進: ego boost)ように働く。社会的葛藤は誇大な自己を脅かすものであり、元の敵対的な自己防衛をさらに動機づける(自我脅威: ego threat)ように働く。このようにして自己愛傾向の社会的戦略がフィードバックループとして維持されることがこのモデルでは想定される。

NARC は従来の自己愛傾向の主流のモデルであった拡張エージェンシーモデル (Campbell & Foster, 2007) を含み、拡張するものであり、その妥当性に

については尺度の作成および構成妥当性の検討や、モデルから想定される関連が実際に得られるかどうかを検討した研究によって示されている (Back, 2018)。Back et al. (2013) は Narcissistic Admiration and Rivalry Questionnaire (NARQ) を作成し、NARQ の因子構造、信頼性、妥当性の検討を行った。その結果、因子構造に関しては、NARQ が自己愛的賞賛と自己愛的敵対の 2 次元構造であることを確認しており、また、その両者の因子間相関が理論通り .30-.50 であることが示された (Back et al., 2013; Leckelt et al., 2018)。また、信頼性については内的一貫性および再検査信頼性の観点から確認されており、いずれの指標も十分な値が示された (Back et al., 2013)。妥当性については NARQ の法則定立ネットワークが検討され、様々な心理学的構成概念や行動指標との間に NARC を支持する相関パターンが示された (Back et al., 2013)。以上のように、自己愛傾向は誇大な自己イメージの維持を中心として、自己愛的賞賛と自己愛的敵対によって相反する社会的アウトカムを導くような概念であることが、現在では支持されている。

### 第 3 節 サイコパシー傾向

サイコパシー傾向とは、冷淡かつ社会逸脱的に行動する傾向性を表した概念であり、サイコパシー (psychopathy) と呼ばれるパーソナリティ障害から移行した概念である<sup>1</sup>。現在のサイコパシーの概念は Cleckley (1941/1976) の臨床的知見に基づいて概念化された精神障害に近いものであり (Patrick, 2018), Cleckley (1941/1976) は 16 の心理・行動的特徴をサイコパシーの臨床的プロフィールとして提示している。その 16 の特徴とは、1. 表面的な魅力および良い”知性”, 2. 妄想および非合理的な志向の兆候の無さ, 3. “神経質”や心理神経的症状の無さ, 4. 信頼感の欠如, 5. 不誠実さ, 6. 悲しみや恥感

---

<sup>1</sup> 本稿では便宜上、臨床的なパーソナリティ障害としての冷淡さや衝動性の障害を単にサイコパシーと呼称し、一般的なパーソナリティ特性としてはサイコパシー”傾向”と呼称する。



情の欠如, 7. 不適切に動機づけられた反社会的行動, 8. 愚かな判断および経験による学習の失敗, 9. 病理的な自己中心性および愛情の欠如, 10. 一般的な情動反応の乏しさ, 11. 具体的な見通しが立てられない, 12. 一般的な対人反応の乏しさ, 13. アルコール摂取または時々摂取なしでの奇抜で不愉快な行動, 14. 自殺の行われなさ, 15. 不完全な性生活, 16. 人生プランの失敗である。Cleckley (1941/1976) よりも前の時代には社会的に逸脱した行動に対してはその背景に精神病理的な症状 (e.g., 統合失調症, 両極性障害) があることが前提であったが, Cleckley (1941/1976) は, それに対して上述したような精神病理的な症状のない社会的に逸脱した臨床事例を報告したのである。

その後, Cleckley (1941/1976) の臨床事例を基に臨床・司法場面において使用可能な診断基準を作成したのが Hare (1980) である。Hare (1980) は, 当時サイコパシーの測定尺度が乱立しており, 知見の統一が困難であった状況を鑑み, 22 項目で構成される診断基準を開発した (Hare, Neumann, & Mokros, 2018)。この項目は半構造化面接によりサイコパシーを測定する基準であり, 後にサイコパシーチェックリスト (Psychopathy Checklist; PCL) と呼称された (Hare et al., 2018)。そして PCL はその得点化が改訂され, PCL-R (Hare et al., 1990) となり, 現在でも様々な国で臨床場面や司法場面など幅広くサイコパシーを測定する代表的な尺度として用いられている (Hare et al., 2018)。

PCL の因子構造は 2 因子構造であることが報告されており (Harpur, Hakstian, & Hare, 1988; Harpur, Hare, & Hakstian, 1989), 第 1 因子が利己的, 冷淡さ, 他人を利用することへの無情さを表したものであり, 第 2 因子が不安定で反社会的な生活スタイルや社会逸脱性を表したものである (Hare et al., 2018)。この 2 因子構造は多くの臨床的指摘 (e.g., Karpman, 1941, 1948) と整合的であり, 第 1 因子は一次性サイコパシー (primary psychopathy), 第 2 因子は二次性サイコパシー (secondary psychopathy) とも呼ばれる (Hicks & Drislane, 2018)。一次性サイコパシーは対人・情動的な側面における障害を表したものであり, 「真の」サイコパシーを表したものであるとされるが, 二次

性サイコパシーは社会逸脱的な側面における障害を表したものであり、派生的なサイコパシーを表したものとされる (Hicks & Drislane, 2018)。

このようなパーソナリティ障害としてのサイコパシーは、その反社会性や社会的逸脱性による著しい社会不適応から心理的に苦痛を生じたり、犯罪により刑務所に収監されたりすることをも含意するものである (Benning, Venables, & Hall, 2018)。その一方で、Cleckley (1988) は、サイコパシーは反社会性や社会逸脱性により著しく社会不適応に陥ったり、罪を犯して刑務所に収監されたりするような人物に限定してその人物の心理的特徴を表したのではなく、そのような心理的特徴が一般社会における人々の中にもみられることを指摘している。実際に、自己報告式のサイコパシー尺度と一般的特性としてのパーソナリティ全体の要約的記述である Big Five (i.e., 外向性, 協調性, 神経症傾向, 勤勉性, 開放性) との間には主に神経症傾向, 協調性, 勤勉性の次元で関連が示されている (Lynam, Miller, & Derefinko, 2018)。このような知見は、サイコパシーの概念を一般的なパーソナリティ特性の極端な例として理解できる可能性を示唆するものである (Benning et al., 2018)。

パーソナリティ障害の概念であるサイコパシーを一般社会の人々に適用するためにはサイコパシーの概念をどのように捉えればいいのか。このような一般人口に膾炙するサイコパシー概念は「サクセスフル・サイコパシー (successful psychopathy)」と伝統的に呼称されてきた (Benning et al., 2018)。Benning et al. (2018) は、サクセスフル・サイコパシーについては、次の3つの観点から概念化可能であることを論じている。第1に「準臨床的なサイコパシー (subclinical psychopathy)」であり、サイコパシーの概念が臨床的な診断を受けるような水準に比べて低い水準にとどまっているような状態を表した概念である (Benning et al., 2018)。第2に「調整されたサイコパシー (moderated psychopathy)」であり、衝動性や社会的逸脱性が、年齢や知能、才能などの変数に調整されて反社会的行動ではなく社会的に正当な目標追求 (e.g., 経営, スポーツ etc) に用いられているような状態を表した概念である

(Benning et al., 2018)。第 3 に「多重過程化されたサイコパシー (multiprocess psychopathy)」であり、サイコパシーの概念が単一の概念ではなく多次元的な特性であることを含意し、適応的な側面と不適応的な側面が複合した概念として位置づけられることを表した概念である (Benning et al., 2018)。

これら 3 つの観点は相互に排他的ではなく、むしろ、これらの観点が複合的に関わり合っていることが想定される (Benning et al., 2018)。第 3 の観点である「多重過程化されたサイコパシー」について Benning et al. (2018) は、サイコパシーの多重過程モデルに関する先行知見 (e.g., Vaidyanathan, Hall, Patrick, & Bernat, 2011) をまとめ、サイコパシーの側面を適応的な機能と不適応的な機能とで分割するサイコパシーの 2 過程モデルを提案している。ここで、適応的な機能は弱い防衛 (恐怖) 反応 (weak defensive 'fear' reactivity) を表し、不適応的な機能は欠陥のある認知-実行機能 (impaired cognitive-executive functioning) を表す (Benning et al., 2018)。サクセスフル・サイコパシーは、著しい社会的不適応に陥らないほどに相対的に適応的な機能が高く、不適応的な機能が低い概念を指していると考えられる。具体的には、「自信があり、自己主張が強く、説得的で、他者の感情に関心がない[筆者訳]」(Benning et al., 2018) ような概念を表していると考えられる。ただし、一般サンプルの自己報告式のサイコパシー得点と衝動性との間には正の相関が確かめられていることから (Jones & Paulhus, 2011)、サクセスフル・サイコパシーに欠陥のある認知-実行機能が全く含まれないわけではないとも考えられる。

以上、述べてきたように、サクセスフル・サイコパシー (= サイコパシー傾向) の概念化の問題は、パーソナリティ障害であるサイコパシーを一般的な特性として捉える際の問題として捉えられてきた。そして現在では、サイコパシー傾向は比較的適応的な機能 (i.e., 恐怖機能の欠陥) と不適応的な機能 (i.e., 認知-実行機能の欠陥) の複合的特性として捉えられている。

#### 第 4 節 まとめ

第一章では、Dark Triad として総称されるマキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向の 3 特性について、起源、概念化の問題、そして適応・不適応性について論じてきた。そして、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向が適応的な側面と不適応的な側面の両面を有する概念であることが論じられ、第 2 節の自己愛傾向を論じる中では、適応的な側面と不適応的な側面を統合する NARC のモデルが論じられた。

全体として、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向は他者を巧みに利用・操作したり、自己主張的に他者に良い印象を与えたりするような側面において適応的な側面がある一方で、他者に対するシニカルな態度、反社会性、搾取的な行動において不適応的な側面があることが示されてきた。このような知見はマキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向のそれぞれを個別に検討した結果、得られた知見である。しかしその後の研究では、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向は互いに類似した概念であることから、これら 3 特性の等質性・異質性に注目が集まり、まとめて研究がなされていった。その議論については次章以降にて詳細に論じる。

## 第二章 Dark Triad の概念的変遷

第一章ではマキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向がそれぞれ出自の異なる概念であり、また、いずれも適応的な側面と不適応的な側面を有する概念であることが確認された。これら 3 特性はそれぞれ類似した概念であるために、以下に述べるようにそれらの等質性・異質性が問題となっていっていった。そして、その等質性・異質性を検討する中で”Dark Triad”と総称され、さらに Dark Triad が単一の構成概念なのか、それとも多次元的な構成概念なのかについての概念的論争が生じた。本章では、このような Dark Triad の概念的変遷について論じる。

### 第 1 節 等質性・異質性

“Dark Triad”の研究は Paulhus & Williams (2002) に端を発する。Paulhus & Williams (2002) はマキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向の各特性がいずれも自己喧伝的で、情動的に浅薄で、二枚舌的な特徴をもち、攻撃的であるというように社会的に邪悪な (socially malevolent) 特徴を有することから、これらを”Dark”な特性として総称した。Paulhus & Williams (2002) の主な関心は、Dark Triad の 3 特性が等質 (equivalent) な特性なのか、それとも異質 (different) な特性なのか、という問題にあった。当時の研究状況においては、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向はそれぞれ出自が異なる概念にもかかわらず、互いに内容が類似する概念であることが示されていた (e.g., McHosky, 1995; McHosky, Worzel, & Szyarto, 1998)。たしかに、Dark Triad は互いに正の相関関係にある (Paulhus & Williams, 2002)。

このような背景から、Paulhus & Williams (2002) はこれらの類似する概念の共通点と相違点を明らかにするために、Dark Triad と Big Five、認知的能力、自己高揚傾向との関連をそれぞれ検討した。その結果、Big Five との関連においては、Dark Triad はいずれも協調性の低さと関連を示すという共通点が見られながらも、協調性以外の Big Five 特性との関連においては異なる関連を示した。認知的能力や自己高揚傾向との関連においては、自己愛傾向

が全体の知能指数の高さと関連を示した一方で、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向は非言語的な知能指数と比較した際の言語的な知能指数の高さと関連を示した。また、自己愛傾向とサイコパシー傾向は自己高揚傾向を示し、マキャベリアニズムは関連を示さなかった。Paulhus & Williams (2002) はこれらの関連の解釈については積極的に行ってはいないものの、Dark Triad が異質な特性であると結論づけている (Paulhus & Williams, 2002)。

その後の研究においても Dark Triad が等質な特性であるのか、異質な特性であるのかについては検討が行われてきたが、一貫した結果は得られていない。Dark Triad が異質な特性であることを支持する知見は Lee & Ashton (2005) によって報告された。Lee & Ashton (2005) は Dark Triad と Big Five との関連性に加えて HEXACO との関連も検討し、自己愛傾向のみが外向性の高さと関連を示し、H 因子のファセットである公正さや誠実さの低さと比較的弱い関連を示した。Dark Triad が等質な特性であることを支持する知見は Jakobwitz & Egan (2006) によって報告されている。Jakobwitz & Egan (2006) は Dark Triad と Big Five の特性群に対して主成分分析を行った結果、Dark Triad と協調性で構成される第 1 主成分を見出し、結論としてマキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向の 3 特性は「本質的に単一の構成概念」(essentially unitary construct) であると結論づけている。ただし、Jakobwitz & Egan (2006) の結果では、Dark Triad の中でもマキャベリアニズムとサイコパシー傾向が神経症傾向の高さと関連し、サイコパシー傾向と自己愛傾向が勤勉性の低さと関連するという違いもみられていた。この点を踏まえれば、Jacobwitz & Egan (2006) による主成分分析の結果は、Dark Triad が単一の構成概念であることを示しているとは言い難いと考えられる。

これらの研究の後、Dark Triad の異質性については行動遺伝学的な観点からも支持された。Vernon, Villani, Vickers, & Harris (2008) は双生児法を用いて Dark Triad の相加的遺伝の効果、共有環境の効果、非共有環境の効果を分離し、検討を行った。その結果、Dark Triad の中でも自己愛傾向とサイコパ

シー傾向には相加的遺伝の効果と非共有環境の効果が示された一方で、マキャベリアニズムは相加的遺伝の効果と非共有環境の効果に加え、共有環境の効果があることが示された。この結果は、マキャベリアニズムが Dark Triad の他の 2 変数と比べて異なる特性であることを支持するものである。

## 第 2 節 単一の構成概念としての Dark Triad

このような初期の Dark Triad の等質性・異質性に関する議論が行われて以降、Dark Triad に関する研究は「進化理論」を背景に大きく展開していく。Darwin (1859) の進化理論の枠組みでは、現在のヒトの表現型はヒトという種の膨大な過去の歴史の中で自然選択されて残ったものであり、自然選択は一般に以下の 4 つの条件が満たされた際に生じる (Del Giudice, 2018)。第 1 に、資源が限られているために、制約のない繁殖が不可能であること。第 2 に、形態的、身体的、行動的形質、すなわち、表現型において個人に差がみられること。第 3 に、少なくともいくつかの表現型が繁殖に有利な個人の能力と関連し、それ以外の表現型に比べて次世代により多くの子孫を残すこと。第 4 に、表現型が遺伝の影響を受ける、すなわち、ある程度子孫に受け継がれること。以上の条件が満たされているような場合、ヒトの遺伝子に変異 (mutation) が生じ、いくつかの表現型に個人差が生じた時、繁殖に有利な表現型は次世代に引き継がれてその人口に膾炙し、世代が繰り返すにつれてその表現型は徐々に一般的な形質になっていくことが想定される (Del Giudice, 2018)。繁殖の成功割合は「適応度」(fitness) と呼ばれ、適応度を高める形質は「適応的」(adaptive)、適応度を低める形質は「不適応的」(maladaptive) と呼ばれる (Del Giudice, 2018)。このような適応度に応じた表現型の次世代への伝達プロセスが「進化」(evolution) と呼ばれる。

以上の進化理論の枠組みでは表現型は適応度の高いものに収束し、個人差は無くなっていくことが想定される。しかしその一方で、未だヒトの表現型には多様な個人差がある。このようなヒトの個人差自体の進化についても、



進化理論の立場からはいくつかの仮説が提案されてきた (平石, 2010)。パーソナリティの個人差の進化については、「中立仮説」(e.g., Tooby & Cosmides, 1990) のようにパーソナリティはヒトの適応度に何の影響も及ぼさないという仮説がある一方で、集団内でパーソナリティの個人差の割合が一定であることで成員の適応度が最大になることを想定し、それによって個人差が自然選択されていく「頻度依存淘汰」(e.g., Mealey, 1995) や、あるパーソナリティの傾向が高い者にとって適応度の高い環境がある一方で、低い者にとっても適応度の高い環境があることを想定する「環境多様性仮説」(e.g., Nettle, 2007) などがある。

Dark Triad が進化的背景を持った特性であることを示唆する知見は、行動遺伝学的手法によって報告されてきた。前述のように Vernon et al. (2008) は双生児法を用いて Dark Triad の遺伝率を推定しており、その遺伝率はそれぞれマキャベリアニズムで 31% (95%CI [.00-.76]), 自己愛傾向で 59% (95%CI [.12-.71]), サイコパシー傾向で 64% (95%CI [.16-.80]) であることを示した。Dark Triad に遺伝の影響を認めることは、Dark Triad が進化的な基盤を有する概念であることを示唆する。ただし、マキャベリアニズムは一貫しない結果も得られていることを付言しておく (Veselka, Schemer, & Vernon, 2011)。

Dark Triad を進化理論の枠組みで捉えた端緒となる研究が Jonason, Li, Webster & Schmitt (2009) である。Jonason et al. (2009) は、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向の先行研究を概観し、これらの特性がいずれも自己利益的で搾取的な傾向性を有することから、短期的な配偶において適応的である可能性を指摘し、Dark Triad と短期的な配偶指標との関連を検討した。Jonason et al. (2009) は配偶場面においては Dark Triad が一様に搾取的な行動傾向にあることを論じ、確認的因子分析の結果、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向の各特性に対して単一因子 (搾取的な社交スタイル) を仮定できることを示した。そうして得られた Dark Triad 総合因子 (i.e., 搾取的な社交スタイル) を用いて検討を行ったところ、Dark Triad 総合

因子がソシオセクシャリティの高さ、セックスパートナーの多さ、短期的配偶への希求の高さ、短期的配偶の高さと関連を示した (Jonason et al., 2009)。このような結果から Jonason et al. (2009) は、Dark Triad が短期的な配偶において進化的に適応的であることを論じるとともに、Dark Triad の 3 特性が心理的機能および対人的機能においては差異がある可能性を保留しつつ、配偶場面においては、同じか、類似した社会戦略を表した特性であることを論じている。そしてその後、Jonason et al. (2009) の研究を初めとして、Dark Triad の配偶戦略の多様性や、その適応度を探る試みが数多く行われていった (e.g., Jonason & Buss, 2012; Jonason & Kavanagh, 2010; Jonason, Li, & Buss, 2010; Jonason, Luevano, & Adams, 2012; Jonason, Valentine, Li, & Harbeson, 2011)。

Dark Triad が短期的な配偶において適応度が高いために世代を超えて維持されてきたという Jonason, Li, Webster et al. (2009) の主張はその後、より大きな進化理論的枠組みである「生活史理論」の中で論じられていくようになる (Jonason, Koenig, & Tost, 2010; Jonason & Tost, 2010; Jonason, Webster, Schmitt, Li, & Crysel, 2012)。生活史理論は有機体における生物学的エネルギーの資源配分の差を説明する理論である。有機体の有限な資源は身体努力 (somatic effort) および繁殖努力 (reproductive effort) に分配され、繁殖努力は配偶努力 (mating effort) と養育努力 (parental effort) で構成される (Figueredo et al., 2005)。どのように資源配分をすればその有機体にとって進化的な適応度を最大にするのかは幼少期に曝される環境によって異なり、不安定で予測不可能な環境下においては繁殖努力および配偶努力に資源を分配する方が適応度が高く、安定して予測可能な環境下では身体努力と養育努力に資源を分配する方が適応度が高い (Figueredo et al., 2005)。なぜなら、不安定で予測不可能な環境下においては自身の生存率が下がるため、配偶に資源を投資することが子孫を残す確率を最も高めるのに対し、安定して予測可能な環境下では自身の生存率が高いため、身体の成長や子孫の養育に資源を投資することが子孫を残す確率を最も高めるからである。前者は「早い生活史

戦略」(fast life history strategy) と呼ばれ、後者は「遅い生活史戦略」(slow life history strategy) と呼ばれる (Ellis, Figueredo, Brumbach, & Schlomer, 2009)。これらの戦略は資源配分だけでなく、それらの適応度を高めるようにして行動傾向などの他の表現型も協同して生活史戦略を構成する (Ellis et al., 2009)。例えば、遅い生活史戦略には、親の子に対する投資だけでなく、長期的に計画を立てるような傾向やリスク回避、非血縁者に対する社会的投資なども含まれる (Ellis et al., 2009; Figueredo et al., 2005)。

生活史理論は、元々は種間の繁殖や生存期間の差を説明するために導入された理論である (Rushton, 1985)。例えばウサギは性的成熟が早く、多産で、養育をほとんどしないために幼児の死亡率が高く、短命であるが、その一方でアジアゾウは長く養育行動をし、幼少期の養育投資が多いために大きく健康的な子孫を残し、長寿である (Figueredo et al., 2006)。しかし、生活史理論は種内の繁殖および生存期間の個体差を説明する理論としても有用であることが指摘されている (Figueredo et al., 2006; Rushton, 1985)。有機体の個体差について、特にヒトの個人差には、遺伝および環境の寄与がありながらも、幼少期に曝された環境に応じて水路づけ (canalization) される発達の可塑性があることが示されている (Del Giudice, Ellis, Shirtcliff, 2011)。これを支持する知見として、例えば、Ellis (2004) はその広範なレビューにおいて父親がいない女兒はその友人に比べて 12 歳までに初潮を経験する傾向にあることや、父親がいない女兒の初潮年齢は父親がいない年数と相関関係にあることを指摘している (Figueredo, 2006)。このようにヒトにおいても、幼少期の環境の安定性や予測可能性が生活史戦略を方向付けることが考えられる。

Dark Triad はこのようなヒトの個人差を説明する生活史理論の枠組みの中で、早い生活史戦略の 1 つとして位置づけられる可能性がある。このような観点を支持する知見として、Jonason, Koenig, & Tost (2010) は Dark Triad 総合因子と遅い生活史戦略を測定する Mini-K (Figueredo et al., 2005) との相関を検討した結果、Dark Triad 総合因子が遅い生活史戦略の低さ (i.e., 早い生

活史戦略の高さ)と関連することを示した。また、Jonason & Tost (2010) は Dark Triad 総合因子とセルフ・コントロール、未来結果志向、注意欠陥との関連を検討した結果、Dark Triad 総合因子は一貫してセルフ・コントロール、未来結果志向の低さと関連し、注意欠陥の高さと関連した。これらの結果は総じて、Dark Triad 総合因子が早い生活史戦略の高さと関連することを支持するものであった。

### 第3節 「Dark Triad 総合因子」への批判

以上述べてきたように Dark Triad の初期の研究では Dark Triad がそれぞれ異質な特性であることを支持していたものの、その後の理論的展開により、生活史理論を理論的背景とした Dark Triad の等質性に注目が集まっていった (Furnham, Richards, & Paulhus, 2013)。これにより、数多くの研究で Dark Triad の3特性の総合得点を算出して「Dark Triad 総合因子」とし、生活史理論の Dark Triad 総合因子に対する適用可能性を示唆する知見が蓄積されていった (e.g., Crysel, Crosier, & Webster, 2013; Jonason et al., 2011; Jonason, Kaufmann, Webster, & Geher, 2013; Jonason, Li, & Czarna, 2013; Jonason & Schmitt, 2012; Kavanagh, Signal, & Taylor, 2013)。Dark Triad 総合因子を早い生活史戦略の1つとしてみなす考え方は、Dark Triad がそれぞれ等しい概念内容を有し、3つの特性が単一の構成概念であることを支持するものである。

Dark Triad の3特性がいずれも等質であり、単一の構成概念であるとみなす考え方に対して、Jones & Paulhus (2010a) は Dark Triad の3特性には重要な差異があることを論じ、そのような考え方を批判した。Jones & Paulhus (2010a) の議論では、Dark Triad は2つの調整変数によって分類される。第1の調整変数が時間的志向性 (temporal orientation) であり、この次元においてはマキャベリアニズムと自己愛傾向、サイコパシー傾向との間に差異がある (Jones & Paulhus, 2010a)。Jones & Paulhus (2010a) は先行研究を踏まえ、マキャベリアニズムが長期的な志向性を有する一方で、自己愛傾向やサイコパシ

一傾向は短期的な志向性を有することを指摘している。第2の調整変数が自我同一性希求 (identity need) であり、この次元においては自己愛傾向とマキャベリアニズム、サイコパシー傾向との間に差異がある (Jones & Paulhus, 2010a)。Jones & Paulhus (2010a) は先行研究を概観し、自己愛傾向は誇大な自己イメージを自我同一性における目標とする傾向性である一方で、マキャベリアニズムやサイコパシー傾向はより機能的な成果 (e.g., セックス, 金, 地位) を自我同一性における目標とする傾向性であることを指摘している (Jones & Paulhus, 2011a)。第三章において詳述するが、Dark Triad にはそれぞれこのような差異があるとする考え方は、数多くの研究によって支持されている (e.g., Jones & Olderbak, 2014; Jones & Paulhus, 2011; Jones & Paulhus, 2010b; Jones & Paulhus, 2017)。

Dark Triad が単一の構成概念ではなく多次元的な構成概念であることを踏まえれば、Dark Triad がそれぞれ等しく早い生活史戦略を反映した特性であるという考え方自体に対しても疑問が生じる。実際に、Dark Triad の3特性と早い生活史戦略との関連を示した研究 (Gladden, Figueredo, & Jakobs, 2009; Jonason et al., 2010; Jonason & Tost, 2010) の結果は、必ずしも一致していない (McDonald, Donnellan, & Navarrete, 2012)。McDonald et al. (2012) はこのような背景から Dark Triad と生活史戦略指標に対して因子分析を行い、Dark Triad が等しく生活史戦略に統合されるかどうかを検討した。その結果、Dark Triad の各特性における下位側面によって、早い生活史戦略を反映したものか、遅い生活史戦略を反映したものかが異なっていた。その後の研究知見においても、Dark Triad の各特性の下位側面によって異なる生活史戦略を反映していることが支持されている (e.g., Lyons & Hughes, 2015)。

Dark Triad が単一の構成概念でないとしても Dark Triad 総合因子を多次元的な概念として算出すること自体は可能であり、目的によっては Dark Triad 総合因子を算出することが有効である可能性はある (Jonason & Middleton, 2015)。しかし、このような Dark Triad 総合因子の算出自体にも批判がなされ

ている (Furnham, Richards, Rangel, & Jones, 2014)。Jones & Figueredo (2013) や Furnham et al. (2014) は、前述の Jones & Paulhus (2011) の指摘に基づき、マキャベリアニズムが戦略性や衝動抑制、欠陥の無い実行機能に特徴づけられる概念である一方で、サイコパシー傾向が不規則な行動、衝動抑制の欠如、実行機能の弱さに特徴づけられることを指摘し、それぞれが相反する概念特徴を有することを指摘している。このような相反性を考慮すれば、「Dark Triad の 3 特性がいずれも高い人」というものを想定することはほとんど不可能である (Furnham et al., 2014; Jones & Figueredo, 2013)。

Dark Triad の 3 特性が全て高い人を想定することが不可能だとしても、それぞれに共通する因子を取り出して用いることは可能であり、その共通因子を新たな構成概念として位置づけることはできるかもしれない (Jonason & Middleton, 2015)。しかし、このような考え方に対しても批判がなされている (Jones & Figueredo, 2013)。Jones & Figueredo (2013) は Dark Triad の共通因子の分散のほとんどが一次性サイコパシーによって説明される可能性を論じ、これを検討している。その結果、Dark Triad の共通因子の分散は一次性サイコパシーによって 93% が説明された (Jones & Figueredo, 2013)。このような結果に基づき、Jones & Figueredo (2013) は Dark Triad の共通因子を研究することは一次性サイコパシーを研究することと同義であることを指摘した。

以上のように、Dark Triad の 3 特性を総合するという考え方には批判がなされており、それらの批判が正しければ、Dark Triad を単一の構成概念として捉えたり、Dark Triad を合計して 1 つの構成概念としたりすることに学術的な新規性を見出すことは難しい。しかしこれらの批判は Dark Triad の扱いにおける批判であり、決して Dark Triad の進化的基盤を探る試みを否定するものではない。Jonason & Middleton (2015) が指摘するように Dark Triad の研究は記述的なものが大半を占めているため、Dark Triad という現象の背後にあるメカニズムについてはさらに理論を構築していく必要があるだろう。

## 第4節 Dark Triad 概念の現在

以上の議論を踏まえ、現在では Dark Triad は、少なくとも理論的には「オーバーラップしつつも、それぞれ独自の特徴を有する特性のまとまり」としてコンセンサスを得ている (Furnham et al., 2013; Jonason & Middleton, 2015; Jones & Paulhus, 2010a; Paulhus, 2014)。このような概念上の議論は Dark Triad を取り扱う上で重要な問題である。Dark Triad がオーバーラップしつつも独自の特徴があるということは、例えば自己愛傾向が指標 X と正の関連を示したとき、その自己愛傾向と指標 X の関連は、自己愛傾向に共変動するサイコパシー傾向によるものかもしれないということを示唆している。例えば、自己愛傾向は非機能的衝動性の高さと同様に相関する一方で、Dark Triad の他の 2 特性 (i.e., マキャベリアニズムとサイコパシー傾向) を統制した場合にはほとんど関連を示さないことが報告されている (Jones & Paulhus, 2011)。この場合、もし自己愛傾向と非機能的衝動性の高さとの関連だけを確認したならば、(実際にはサイコパシー傾向の概念範囲にあるにもかかわらず) 自己愛傾向の概念範囲の中に非機能的衝動性が含まれると誤って解釈するかもしれない。このように Dark Triad の各特性の 1 つだけに着目して他の指標との関連を検討した場合には、各特性の概念範囲が誤って拡張されてしまう可能性がある。Furnham et al. (2013) や Paulhus (2014) はこのような Dark Triad の拡張を「概念浸食」(concept creep; Haslam, 2016) と呼び、その危険性を指摘している。

ただし、先の例では、自己愛傾向がマキャベリアニズムとサイコパシー傾向を統制した際に非機能的衝動性と関連を示さなかったのは、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向の共通部分が統制されたためであるとも考えられ、非機能的衝動性自体は Dark Triad のそれぞれに必要な特性である可能性は捨てきれない。このように他の 2 変数を統制することで何が統制され、何が残るのか、という問題は結果の解釈をする上で重要であり、その概念間で何が共通して何が残るのかという理論的背景を確立することの重要性が指摘されている (Lynam, Hoyle, & Newman, 2006)。

Dark Triad の共通点について、Paulhus (2014) は「冷淡さ」(callousness) が共通していることを理論的に指摘している。たしかに、マキャベリアニズムには「非道徳性」(amorality; Cristie & Geis, 1970) の側面があることが指摘されており、自己愛傾向にも「非共感性」(unempathy; APA, 2013) の側面は含まれている。また、サイコパシー傾向の情動的欠陥は「冷淡さ」として理解できる (Williams, Paulhus, & Hare, 2007)。このように Dark Triad の 3 特性は、それぞれ起源は異なるが、冷淡さという共通した側面を有している。しかし、冷淡さという概念の多義性 (Decety & Ickes, 2009 岡田, 2016 訳) や、他の概念との結びつき (e.g., 他者操作; Williams et al., 2007) を考慮すれば、冷淡さが Dark Triad の共通部分の分散を全て説明するのか、それとも冷淡さのいくつかの側面が Dark Triad の共通部分の分散を説明するのか、冷淡さに関連する特性と複合的に説明するのか、については実証的な検討が必要である。

そのような点を実証的に検討した知見として、Book, Visser, & Volk (2015) は Dark Triad の共通部分の分散を説明する変数として従来取り上げられてきた概念を 5 つリストアップし、正準相関分析によって検討を行っている。その 5 つの概念とは、Big Five モデル、冷淡さ、早い生活史戦略、HEXACO モデル、一次性サイコパシー、である。Book et al. (2015) は正準相関分析を行った結果、HEXACO モデルが Dark Triad の共通部分の分散を最も説明することを示した。特に、HEXACO モデルの中でも正直さ-謙虚さの低さが Dark Triad の共通分散のほとんどを説明していた (Book et al., 2015)。正直さ-謙虚さの低さの概念範囲には、冷淡さや他者への関心の欠如が含まれているため、この結果は Jones & Figueredo (2013) の結果と相反するものではないと考えられる (Book et al., 2015)。また、この結果は前述したように Dark Triad 総合因子が何か新たな構成概念であるとする考え方に対する批判的根拠としても捉えられ得る (Book et al., 2015)。



### 第 5 節 まとめ

以上述べてきたように、Dark Triad の概念は等質なものと異質なものとという問いを検討していく中で取り上げられ、現在では「オーバーラップしつつも独自の特徴を有する概念」として捉えられるようになってきた。また、Dark Triad の共通点については「冷淡さ」が有力な概念として挙げられ、相違点については時間的志向性と自我同一性希求によって説明される可能性が指摘された。時間的志向性という観点からはマキャベリアニズム、サイコパシー傾向が弁別され、自我同一性希求という観点からは、自己愛傾向が他の 2 特性と弁別される。次章ではさらに、Dark Triad の実証的知見を整理するとともに、このような Dark Triad 概念の妥当性について論じる。

### 第三章 Dark Triad の研究動向

第二章において Dark Triad は現在では「オーバーラップしつつも独自の特徴を有する概念」として捉えられる概念であることが確認された。そして、Dark Triad の共通点としては冷淡さが位置づけられることが示され、相違点は時間的志向性と自我同一性希求の 2 つの調整変数によって整理されることが指摘された。それでは、このような理論的想定は他の概念や指標との関連においても見出されるであろうか。本章では Dark Triad の尺度作成も含めその研究動向を概観し、Dark Triad の共通点や相違点について考察を深めたい。

### 第 1 節 尺度

先に述べたように Dark Triad にはオーバーラップがあるため、Dark Triad の概念を理解したり応用したりする上で 1 つの研究において Dark Triad の 3 特性を同時に調査し、検討する必要がある。Dark Triad の各特性を測定する尺度として代表的な尺度は、マキャベリアニズムを測定する尺度としては Mach-IV (Cristie & Geis 1970)、自己愛傾向の尺度としては NPI (Raskin & Hall, 1979)、サイコパシー傾向の尺度としては Self-Report Psychopathy-III (SRP-III; Williams et al., 2007) が挙げられる (Furnham et al., 2013; Jonason & Webster, 2010)。これらの尺度は十分な信頼性と妥当性が確認されており、Dark Triad を測定する上で黄金律 (gold standard) の尺度とされている。しかし、これらの測定項目を合計するとその項目の数は 124 項目にも及ぶ。Dark Triad だけでこれだけの項目数を占めると、1 つの調査に入れる項目数が限られてしまうという問題点が生じる (Jonason & Webster, 2010; Jones & Paulhus, 2014)。

このような背景から、少数の項目で Dark Triad の 3 特性を測定する尺度が 2 つ作成された。第 1 に Dark Triad Dirty Dozen (DTDD: Jonason & Webster, 2010) であり、第 2 に Short Dark Triad (SD3: Jones & Paulhus, 2014) である。DTDD は、Dark Triad の 3 特性を各 4 項目、全 12 項目で構成される尺度であり、数多くの研究によって理論的に整合的な因子構造および十分な信頼性・妥当性が確認されている (Carter, Campbell, Muncer, & Carter, 2015; Jonason et

al., 2013; Jonason & Luévano, 2013; Jonason & McCain, 2012; Jonason & Webster, 2010; Webster & Jonason, 2013)。

しかしその一方で、DTDD の構成概念妥当性が不十分であることを示す知見も数多く報告されている (Kajonius, Persson, Rosenberg, & Garcia, 2016; Lee et al., 2013; Maples, Lamkin, & Miller, 2014; Miller et al., 2012; Rauthmann, 2013)。具体的には、Miller et al. (2012) は DTDD のサイコパシー傾向と他のサイコパシー尺度との関連を検討し、DTDD のサイコパシー傾向には対人的敵意や行動抑制の側面が測定されていないことを示した。また Rauthmann (2013) は DTDD のマキャベリアニズムと Mach-IV との関連が、DTDD のサイコパシー傾向と Mach-IV との関連よりも低いことから、DTDD のマキャベリアニズムの妥当性が低いことを指摘している。さらに Dark Triad における自己愛傾向は過敏型というよりも誇大型の自己愛を表したものであるが、DTDD の自己愛傾向は誇大型自己愛とともに過敏型自己愛も測定していることが示されている (Maples et al., 2014)。これらの知見により、現在では DTDD が使われることは比較的少なくなった (例えば、論文データベース「EBSCOhost」を用いて、2017 年から現在までに指定した上で”dark triad” or “Machiavellianism” and “narcissism” and “psychopathy”でタイトル検索を行ったところ、全 163 件中、DTDD を使用した研究は 24 篇であった)。

SD3 は Dark Triad の 3 特性を各 9 項目、全 27 項目で測定する尺度であり、理論的に整合的な因子構造と十分な信頼性・妥当性が確認されている (Jones & Paulhus, 2014; Lee et al., 2013)。SD3 は Dark Triad の各特性の概念範囲を十分かつ的確に捉えるように項目を収集し、作成された尺度である (Jones & Paulhus, 2014)<sup>2</sup>。DTDD の問題点との比較では、まず、SD3 のサイコパシー傾向は衝動性との関連において DTDD のサイコパシー傾向よりも高い相関を示

---

<sup>2</sup> この項目収集時には Mach-IV の問題点に注意して構成された (Jones & Paulhus, 2014)。具体的には、計画性を表す項目なども含めて収集された。

している (Maples et al., 2014)。また、SD3 のマキャベリアニズムと Mach-IV との相関は、SD3 のサイコパシー傾向と Mach-IV との相関よりも高いことが示されている (Jones & Paulhus, 2014)。更に、SD3 は過敏型の自己愛傾向を測定する尺度との間にほとんど無相関を示している (Maples et al., 2014)。全体としても、SD3 は DTDD よりも対応する標準尺度との相関が高いことが示されている (Jones & Paulhus, 2014; Maples et al., 2014)。これらの知見により、現在では SD3 を用いた研究が DTDD に比べて多くなっている (例えば、DTDD と同じようにして検討したところ、SD3 を使用した研究は 68 篇であった)。

## 第 2 節 パーソナリティ

### Big Five・HEXACO

前述したように Dark Triad と Big Five・HEXACO の関連は Dark Triad の等質性・異質性を評価する中で行われてきた。その後も Dark Triad と Big Five・HEXACO との関連を検討した研究知見は複数報告されてきており、それらをまとめてメタ分析を行った知見がいくつか報告されている (Muris, Merckelbach, Otgaar, & Meijer, 2017; O'Boyle, Forsyth, Banks, Story, & White, 2015; Vize, Lynam, Collison, & Miller, 2018)。これらはそれぞれデータ収集過程が異なり、O'Boyle et al. (2015) は Dark Triad の各特性と Big Five の各特性がそれぞれ 1 つでも取り上げられた研究を対象とし、Vize et al. (2016) や Muris et al. (2017) は Dark Triad および Big Five の各特性が全て取り上げられた研究を対象とした。また、Vize et al. (2016) と Muris et al. (2017) はほとんど同時期に行われたものであるが、Muris et al. (2017) はさらに Dark Triad と HEXACO との関連についてもメタ分析に含めていた。

これらの結果は一貫したものであり、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向は協調性と中程度の負の相関、勤勉性と弱い負の相関を示し、自己愛傾向は外向性と中程度の正の相関、開放性と弱い正の相関、協調性と弱い負の

相関を示していた (Muris et al., 2017; O'Boyle et al., 2015; Vize, Lynam et al., 2018)。また、HEXACO モデルの低い正直さ-謙虚さ次元との関連では、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向が強い正の相関を示し、自己愛傾向が中程度の正の相関を示した (Muris et al., 2017)。以上の結果は、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向が、自己愛傾向に比べて互いに類似した概念であることを示唆している (O'Boyle et al., 2015)。ただし、これらの検討では Dark Triad が互いに統制されていないという問題点を指摘することができる。

そこで Vize, Collison, Miller & Lynam (2018) は Dark Triad を互いに統制した上で Dark Triad と Big Five との間にどのような関連があるのかを、メタ分析を用いて検討した。その結果、Dark Triad を互いに統制する前の Dark Triad と Big Five との関連は先行研究 (Muris et al., 2017; O'Boyle et al., 2015; Vize, Lynam et al., 2018) を支持していた一方で、統制後の関連は異なった関連を示した (Vize, Collison et al., 2018)。すなわち、マキャベリアニズムは外向性および勤勉性と弱い負の相関、協調性と中程度の負の相関を示し、自己愛傾向は外向性と中程度の正の相関、開放性と弱い正の相関、勤勉性と弱い正の相関、協調性と弱い負の相関を示した (Vize, Collison et al., 2018)。また、サイコパシー傾向は協調性と中程度の負の相関、勤勉性と弱い負の相関を示した (Vize, Collison et al., 2018)。このような結果のうち、マキャベリアニズムの勤勉性の低さはマキャベリアニズムが戦略的・計画的な特性であるとする理論的指摘 (Jones & Paulhus, 2010a) と合致していない (Vize, Collison et al., 2018)。ただし、SD3 のマキャベリアニズムに限定すると、理論的想定と合致してマキャベリアニズムと勤勉性との間にほとんど無相関を示したことも報告された (Vize, Collison et al., 2018)。

### 対人円環

対人特性の全体を支配性 (e.g., 人の上に立つ, リーダーシップ) と親密性 (e.g., 温和, 穏やか) の直交する 2 次元で捉え (縦軸を支配性, 横軸を親密性

として布置), 対人特性をその 2 次元の円環状にした対人円環モデル (Leary, 1957) は, 対人特性を包括的に理解するパーソナリティモデルであり, Dark Triad の位置づけを見出す上で重要なモデルである (Jones & Paulhus, 2010a)。Jones & Paulhus (2010a) は, 先行研究の理論的指摘に基づき Dark Triad が対人円環モデルの第 2 象限 (i.e., 高支配性 + 低親密性) に位置づけられることを指摘しており, それは実証的な知見においても支持されている (Rauthmann & Kolar, 2013; Southard, Noser, Pollock, Mercer, & Zeigler-Hill, 2015)。

対人円環モデルとの関連性を検討する際に Dark Triad を互いに統制した場合には, Jones & Paulhus (2010a) が理論的に指摘したように Dark Triad の各特性によって違いがみられるのであろうか。このような問題に対して Rauthmann & Kolar (2013) や Dowgwillo & Pincus (2017) は Dark Triad を互いに統制した上で Dark Triad と対人円環モデルとの関連性について検討を行っている。Rauthmann & Kolar (2013) は Dark Triad の各特性と対人円環モデルの各特性との関連性を検討し, Dowgwillo & Pincus (2017) は対人円環モデルやその派生的な円環モデルを複数用いて, かつ, 対人円環モデルの位置づけを総合的に評価する手法を用いて検討を行っている。これらの結果は比較的一貫したものであり, Rauthmann & Kolar (2013) はマキャベリアニズムが第 3 象限 (低支配性 + 低親密性), 自己愛傾向が第 1 象限 (高支配性 + 高親密性), サイコパシー傾向が第 2 象限 (高支配性 + 低親密性) に位置づけられることを示した。また, Dowgwillo & Pincus (2017) はマキャベリアニズムが親密性次元の低さに, 自己愛傾向が支配性次元の高さに, サイコパシー傾向が親密性次元の低さと支配性次元の高さにそれぞれ特徴づけられることを示した。

Rauthmann & Kolar (2013) はこのような結果を以下のように解釈している。マキャベリアニズムが高い者は, 長期的な戦略において他者を操作するような, 冷静で情の薄い戦略家であるとされてきたが (Jones & Paulhus, 2010a), このような戦略家は, 支配性と親和性の両方を用いて自身の利益を獲得することが考えられるために, 第 3 象限に位置した可能性が考えられる

(Rauthmann & Kolar, 2013)。また、自己愛傾向が高い者は支配的である一方で魅力的な面も併せ持つ (Back, Schmuckle & Egloff, 2010)。そのために、第1象限に位置づけられた可能性がある (Rauthmann & Kolar, 2013)。サイコパシー傾向は、Dark Triad の中でも最も悪意に満ちており、個人や社会に破壊的な影響をもたらす特性である (Rauthmann & Kolar, 2012)。そのために、第2象限に位置したことが考えられる (Rauthmann & Kolar, 2013)。

### 第3節 社会情緒的機能

#### 共感性

共感性の低さは Dark Triad と共通して関連する特性であることが示されてきた (e.g., Andrew, Cooke, & Muncer, 2008; Watson & Morris, 1991; Williams et al., 2007)。しかし、これらの検討では共感性が情動的共感性と認知的共感性に分けて検討されていなかった (Wai & Tiliopoulos, 2012)。Wai & Tiliopoulos (2012) は情動的共感性が利他的行動に関連する共感性である一方で (Eisenberg & Miller, 1987; Penner, Dovidio, Piliavin, & Schroeder, 2005)、認知的共感性が他者操作的パーソナリティの背後にある可能性 (McIlwain, 2003) を指摘し、情動的共感性と認知的共感性とを分けて Dark Triad と共感性の低さとの関連を検討することの重要性を指摘している。

このような背景から Wai & Tiliopoulos (2012) は Dark Triad と情動的共感性、認知的共感性との関連を検討しており、Dark Triad が情動的共感性の低さと関連する一方で、認知的共感性の低さとの関連はほとんどないことを示した。また、Dark Triad を互いに統制した時には、一次性サイコパシーのみが情動的共感性の低さと関連したことを示した。これらの結果に基づき、Wai & Tiliopoulos (2012) は Dark Triad が高い者は認知的共感性を維持しつつもその情動的共感性の低さによって他者を操作している可能性を指摘した。



このように Wai & Tiliopoulos (2012) は Dark Triad と共感性の関連はその下位次元によって異なることを示した一方で、共感性の他の次元については検討されていない。しかし、共感性は情動的共感性と認知的共感性の他にも、より多次元的な特性であるとみなされることもあり、Davis (1980, 1983) に基づけば、共感性は共感性想像性 (i.e., 物語のキャラクターと自分を重ね合わせる傾向性)、共感的配慮 (i.e., 他者に向けた温かさ、慈愛に関する感情)、個人的苦痛 (i.e., 他者のネガティブな経験を観察した時の不安や不快な感情)、視点取得 (i.e., 自発的に他者の視点や観点から物事を見ようとする) に分類される (Jonason & Kroll, 2015)。Giammarco & Vernon (2014) や Jonason & Kroll (2015) は、Dark Triad においてどの次元の共感性が低いのかを検討することの重要性を指摘し、これを検討している。その結果は比較的一貫しており、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向が特に共感的配慮の低さと関連していた (Giammarco & Vernon, 2014; Jonason & Kroll, 2015)。このような関連は、Dark Triad を互いに統制しても不変であった (Jonason & Kroll, 2015)。

### 自己制御

Dark Triad と自己制御との関連は、前述したように Dark Triad を早い生活史戦略の 1 つとして捉える中で検討されてきた (Crysel et al., 2013; Jonason & Tost, 2010)。Dark Triad がいずれも等しく早い生活史戦略の 1 つとして捉えられるのであれば、Dark Triad の 3 特性は共通して自己制御の低さをそれぞれに必要な不可欠な要素として有すると考えられる。

しかし、前述したように Dark Triad はいずれも早い生活史戦略の心理指標と関連するわけではなく、また、Dark Triad を互いに統制した時にはその関連性の違いはさらに顕著になることがいくつか報告されている (e.g., Jones & Paulhus, 2011)。前述した Dark Triad と Big Five との関連についてメタ分析を行った Vize et al. (2018) は、Dark Triad と自己制御との関連についてもメタ分析を行っており、Dark Triad を互いに統制する前は Dark Triad はいずれ

も衝動性と弱～中程度の正の相関を示したが、統制した後はサイコパシー傾向のみが衝動性と弱い正の相関を示したことを報告している。

Dark Triad の個々の研究においては、各特性と衝動性との関連は検討されてきた。しかし衝動性は、外向性の高さに関連するような機能的衝動性と、勤勉性の低さに関連するような非機能的衝動性とに分けられる (Dickman, 1990)。また、外向性の高さは Dark Triad の自己愛傾向と関連し、勤勉性の低さはサイコパシー傾向と関連することは前述の通りである。以上の関連性を踏まえ、Jones & Paulhus (2010) は Dark Triad と機能的衝動性および非機能的衝動性との関連を検討した。その結果、マキャベリアニズムは衝動性とほとんど関連を示さず、自己愛傾向は機能的衝動性の高さと、サイコパシー傾向は非機能的衝動性の高さとそれぞれ関連を示した (Jones & Paulhus, 2011)。これらの結果は、自己愛傾向やサイコパシー傾向の衝動性次元における適応性がそれぞれ異なることを示唆するものであった (Jones & Paulhus, 2011)。

#### 第 4 節 対人行動

##### 他者操作

Dark Triad の 3 特性はいずれも対人的な操作に関連する特性である (Furnham et al., 2013; Jones & Figueredo, 2013)。特に他者操作については、マキャベリアニズムやサイコパシー傾向は作動的な利益を得るための手段として、自己愛傾向については誇大性を獲得するための手段として、Dark Triad の中核に位置付けられる概念である。実際に、Jones & Figueredo (2013) は Dark Triad の共通因子を「他者操作」によって説明することができることを示している。このように Dark Triad の中核に他者操作を置く観点からは、一見、Dark Triad は他者操作について等質な特性であるように思われる。

しかし、Dark Triad の各特性は他の 2 変数を統制した上でも他者操作方略との間に関連を示すことが明らかになっており (e.g., Jonason & Webster,

2012), それぞれ異なる他者操作方略とも関連を示すことも示唆される (Furnham et al., 2013)。例えば Jonason & Webster (2012) は, Dark Triad を互いに統制した上で, Dark Triad と他者操作方略との関連を検討した。その結果, マキャベリアニズムは強硬手段, お世辞, 誘惑と正の関連を, 自己愛傾向は取り入り, 互惠的手段, 自己非難, 他者との比較と正の関連を示し, サイコパシー傾向は無理強いと正の関連を示していた。Jonason, Slomsky, & Partyka (2012) は Dark Triad と職場における同僚への他者操作方略との関連を検討した。他者操作方略としてはソフトな方略 (操作対象の人物がその行動をすることに納得させるような方略) とハードな方略 (操作対象の人物に強制的にその行動をさせるような方略) の 2 つの方略が対象となった。その結果, Dark Triad を互いに統制した時, マキャベリアニズムはソフトな方略と, ハードな方略の両方略と正の関連を示した。その一方で, 自己愛傾向はソフトな方略のみと正の関連を示し, サイコパシー傾向はハードな方略のみと正の関連を示した (Jonason et al., 2012)。以上の先行研究をまとめると, マキャベリアニズムは強制的かつ支配的に他者を操作する側面と, お世辞や誘惑を使って他者をソフトに操作する傾向と正に関連する概念であり, サイコパシー傾向は強制的・圧制的に他者を操作する傾向と, そして自己愛傾向が他者をソフトに操作するような傾向性と正に関連することが示されてきた。

#### 対人葛藤

Dark Triad の非共感的な特徴や自己制御の低さおよび他者操作的な特徴を踏まえると, Dark Triad が高い者は他者との間に対人葛藤 (interpersonal conflict) が生じやすいと考えられる。対人葛藤とは, 「個人の行動, 感情, 思考の過程が, 他者によって妨害されている状態」 (加藤, 2003; Kerry, 1987) を指す。実際に, Dark Triad と葛藤経験との関連を検討した Horan, Guinn & Banghart (2015) では, Dark Triad 得点が高いほど, 恋愛相手との葛藤経験が多く, その葛藤が敵意的で激しいことが示されている。

Dark Triad の各特性が高い者は短期的な配偶を好む傾向にあるが (Jonason & Webster, 2009), Dark Triad の利己的な特徴を踏まえれば, 自分にとって他者が自身の利益になり得る可能性がある場合には相手と葛藤状況になったとしても交際を維持することが考えられる。実際に, Jonason, Li, & Buss (2010) は Dark Triad とパートナー関係維持行動との関連を検討し, 正の相関を示している。特に, Dark Triad の各特性が高い者は, 自身の誇大性を維持したり, 暴力的な手段で関係を維持したりすることが示された (Jonason et al., 2010)。以上の先行研究を踏まえると, Dark Triad の各特性が高い者は身近な人と対人葛藤が生じやすいが, その他者が自分にとってまだ利益がある場合には, 関係を続けようとする考えられる。

#### 攻撃性

Dark Triad が共通して攻撃性と関連することは Dark Triad 研究の初期の頃から指摘されていた (Paulhus & Williams, 2002)。しかし, 個々の研究では Dark Triad の各特性の独自の関連を導出することができない。そこで, Jones & Neria (2015) は構造方程式モデリングを用いて, Dark Triad の共通因子から攻撃性 (i.e., 身体的攻撃, 言語的攻撃, 短気, 敵意) の共通因子へパスを引き, Dark Triad の各特性から攻撃性の各特性へパスを引くモデルを検討している。その結果, Dark Triad の共通因子が攻撃性の共通因子と正の関連を示したほか, サイコパシー傾向と身体的攻撃との間に正の関連, マキャベリアニズムと敵意との間に正の関連, 自己愛傾向と敵意の間に負の関連が示された。この結果から, サイコパシー傾向が特に身体的攻撃と関連する特性であり, 自己愛傾向やマキャベリアニズムが高い者の攻撃行動は状況に依存して引き起こされることが示唆される (Jones & Neria, 2015)。

そのような状況依存的な攻撃行動に関して, Jones & Paulhus (2010) は理論的に Dark Triad の中でも自己愛傾向が自我脅威場面において攻撃行動を行う特性であり, サイコパシー傾向が身体脅威場面において攻撃行動を行う特性

であることを指摘し、これを検討している。実験室実験による結果、Dark Triad の他の 2 特性を統制した時、自我脅威場面では自己愛傾向が高い者の方がより攻撃行動の多さと関連し、身体脅威場面においてはサイコパシー傾向が高い者の方がより攻撃行動の多さと関連することが示された (Jones & Paulhus, 2010b)。この結果から、自己愛傾向とサイコパシー傾向では、その攻撃行動の背景や理由が異なることが示唆された (Jones & Paulhus, 2010b)。なお、マキャベリアニズムに関しては、いずれの場面においても攻撃行動との関連は示されなかった。

これらの攻撃行動はいずれも直接的な攻撃行動を指しているが、その一方で、噂を流したり、グループから仲間外れにしたりすることで攻撃を受けた人の友人関係や親密な関係を破壊するような間接的な攻撃行動も存在する (Björkqvist, Lagerspetz, & Kaukiainen, 1992)。以下では、前者の攻撃行動を外顕性攻撃 (*overt aggression*)、後者の攻撃行動を関係性攻撃 (*relational aggression*) と呼称する (磯部・菱沼, 2007)。外顕性攻撃と関係性攻撃では評判や人気などの社会適応的機能との関連が異なることが示されている (e.g, Rose, Swenson, & Waller, 2004)。これらの攻撃行動との関連に関して、Baughman, Dearing, Giammarco, & Vernon (2012) は、Dark Triad といじめ行動との関連を検討し、Dark Triad の各特性がいずれも外顕的ないじめ行動、および関係的ないじめ行動をする傾向にあることを示した。Dark Triad の他の 2 特性を統制した際の外顕性攻撃と関係性攻撃の関連を検討した知見としては Klimstra, Sijtsema, Henrichs, & Cima (2014) があり、Dark Triad の他の 2 特性を統制した時、マキャベリアニズムが関係性攻撃と正の関連、サイコパシー傾向が外顕性攻撃と正の関連、自己愛傾向が関係性攻撃と正の関連を示した。このような関連は、Dark Triad と外顕性攻撃は中核となる冷淡さによって説明される部分も多いが、関係性攻撃については、マキャベリアニズムや自己愛傾向によって独自の寄与があることを示唆するものである。

## 第 5 節 反社会的行動

## 教育場面

教育場面においては、カンニングや剽窃行為などの不正行為 (scholastic cheating) と Dark Triad との関連を検討した研究がある。Nathanson, Paulhus, & Williams (2006) は実際の試験中の不正行為がどのような変数によって説明されるのかを検討するために、様々なデモグラフィック項目や Dark Triad を含むパーソナリティ特性を用いて検討を行っている。その結果、サイコパシー傾向が不正行為をすることと関連することが示され、また、それは認知能力を統制した上でも示された。以上の結果について Nathanson et al. (2006) は、サイコパシー傾向は不正行為が発覚した際のリスクを顧みないことや、スリル希求的な傾向によって不正行為をする可能性を示唆している。この点についてはその後、Williams, Nathanson, & Paulhus, (2010) がサイコパシー傾向と不正行為との関連性が何によって媒介されるのかにまで検討を行っている。その結果、サイコパシー傾向が高い者は学業達成の目標のために不正を行っていることや、「みんなやっているから」、「できるから」といったように道徳的な抑制の効かなさによって不正行為を行っており、罰に対する恐怖の無さによっては媒介されないことが示された。

Dark Triad は青年期における問題行動との関連も検討されている。Klimstra, Sijtsma, Henrichs, & Cima (2014) は Dark Triad と青年期における攻撃性との関連を検討し、Dark Triad がいずれも直接的攻撃の高さや間接的攻撃の高さと関連することを示した。また、Dark Triad を互いに統制した時にはマキャベリアニズムが間接的攻撃の高さと、サイコパシー傾向が直接的攻撃の高さと、自己愛傾向が間接的攻撃の高さとそれぞれ関連することを示した。Klimstra et al. (2014) はこれらの結果について、マキャベリアニズムや自己愛傾向は比較的自身の評判を気にしたうえで攻撃行動をすることや、サイコパシー傾向がその後の結果を気にせずに攻撃行動をすることを示唆している。

## インターネット

Dark Triad はインターネットにおける様々な反社会的行動との関連が検討されてきた。Moor & Anderson (2019) のレビュー論文に基づいて列挙すれば、Dark Triad は、ネット荒らし (trolling), 無作法なコメント (uncivil comment), ネット攻撃 (cyber-aggression), 勤務中のネット使用 (cyber-loafing), 不適切な画像の押し付け (sending unsolicited explicit images), ”セクスト”(性的表現を記したテキスト) の一方的な押し付け (non-consensual dissemination of “sexts”), ネットいじめ (cyber-bullying), 問題のあるソーシャルメディア利用 (problematic social media use), 問題のあるオンラインゲーム利用 (problematic online gaming), 問題のあるインターネット利用 (problematic internet use), インターネット使用障害 (internet use disorder), 非臨床的なソーシャルメディア依存 (non-clinical social media addiction), ネットストーキング (cyberstalking), テクノロジーを利用した性的暴行 (technology facilitated sexual violence), テクノロジーを利用した浮気 (technology facilitated infidelity) との関連が検討されてきた。

Moor & Anderson (2019) に倣って以上の研究報告をまとめると、以下のようになる。なお、以下の研究報告で記述される関連は全て Dark Triad を互いに統制した後の関連性である。まず、マキャベリアニズムはネット荒らし、不適切な画像の押し付け、問題のあるソーシャルメディア利用の高さを予測することが示されてきた (Buckels, Trapnell, & Paulhus, 2014; Kircaburun, Jonason, & Griffiths, 2018; March & Wagstaff, 2017)。これらの結果は、マキャベリアニズムの他者操作や他者搾取的な傾向性と整合的である (Moor & Anderson, 2019)。自己愛傾向に関してはインターネットにおける問題行動とはほとんど関連を示さないか、示したとしても弱い関連を示した (Moor & Anderson, 2019)。自己愛傾向は誇大な自己イメージを維持する傾向性であり、以上のような他者を操作して性的な満足感が得られるようなインターネット

上の行動とは関連を示さなかったことが考えられる。サイコパシー傾向はネット荒らし、ネット攻撃、ネットいじめ、テクノロジーを利用した性的暴行の高さを予測することが示されてきた (Bogolyubova, Panicheva, Tikhonov, Ivanov, & Ledovaya, 2018; Buckels et al., 2014; Buckels, Trapnell, Andjelovic, & Paulhus, 2018; Craker & March, 2016; Gibb & Devereux, 2014; Kircaburun, Jonason, & Griffiths, 2018; Lopes & Yu, 2017; Lowe-Calverley & Grieve, 2017; March, Grieve, Marrington, & Jonason, 2017; Pabian, Backer, & Vandebosch, 2015; Seigfried-Spellar & Lankford, 2018; van Geel, Goemans, & Vedder, 2017)。この結果は、サイコパシー傾向が Dark Triad の中でも最も反社会的な傾向性であるという知見 (Rauthmann & Kolar, 2012) を支持するものである。

#### 職務場面

Dark Triad は職務場面においてどのような行動やアウトカムを説明するのであろうか。Dark Triad との関連の中でも特に注目されてきたのが職業達成 (job performance) と非生産的な職務行動 (counterproductive work behavior) である (O'Boyle, Forsyth, Banks, & McDaniel, 2012)。O'Boyle et al. (2012) はメタ分析を行い、Dark Triad とこれらの指標との関連を検討した。その結果、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向は職業達成と弱い負の相関を示し、Dark Triad はいずれも非生産的職務行動との間に弱～中程度の正の相関を示した。なお、このメタ分析の中で Dark Triad を互いに統制した時には、サイコパシー傾向のみが職業達成と弱い負の相関を示し、マキャベリアニズムと自己愛傾向は非生産的職務行動と弱～中程度の正の相関、サイコパシー傾向と弱い負の相関を示した (O'Boyle et al., 2012)。サイコパシー傾向と非生産的職務行動との負の関連は O'Boyle et al. (2012) の仮説とは異なる結果であったが、自己愛傾向やマキャベリアニズムのネガティブな側面が統制されたことで、サイコパシー傾向と非生産的職務行動との負の関連が見出されたのだと解釈されている。



この他に、職場における重要な行動として組織市民行動も Dark Triad との関連性が検討されている (Szabó, Czibor, Restás, & Bereczkei, 2018)。組織市民行動とは「報酬システムによって直接的もしくは明らかに認識されるのではなく、全体的に組織の効果的な機能を促進するような任意の個人の行動[著者訳]」を指す概念である (Organ, 1988, p.4)。Szabó et al. (2018) の検討の結果、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向は組織市民行動の少なさと関連を示したが、デモグラフィック変数や HEXACO, そして Dark Triad を互いに統制した時には、マキャベリアニズムが組織市民行動の多さと、サイコパシー傾向が組織市民行動の少なさと関連を示した。これらの結果は、マキャベリアニズムの戦略的な行動として組織市民行動が行われ、サイコパシー傾向は短期的な報酬を求めるためにこのような行動を行わないことを示唆するものであった (Szabó et al., 2018)。

#### 第 6 節 内的適応性

精神的健康との関連においては、Dark Triad の中でもとりわけ自己愛傾向が精神的健康の高さと関連することが示されてきた。Dark Triad の各特性と精神的健康との関連を示した知見では、自己愛傾向のみがポジティブな精神的健康と正に関連することが示されている (Aghababaei & Błachnio, 2015; Jonason, Baughman, Carter, & Parker, 2015)。また、このような自己愛傾向のポジティブな精神的健康との関連性は、柔軟なストレスコーピングスタイルによって媒介されることが示されている (Ng, Cheung, & Tam, 2014)。

自己愛傾向の精神的健康の高さは、その柔軟なコーピングスタイルに由来するものだけでなく、社会適応に基づくものである可能性もある。Dark Triad の中でも自己愛傾向の好ましさの評定は、マキャベリアニズムやサイコパシー傾向に比べて高いことが示されている (Rauthmann & Kolar, 2012)。また、Dark Triad の中でも自己愛傾向は、マキャベリアニズムやサイコパシー傾向に比べて異性から魅力的だと評定される傾向にあることが示されている

(Rauthmann & Kolar, 2013)。このような知見は、Dark Triad の中でも自己愛傾向は対人場面において好ましい行動特徴を示す可能性を示唆するものである。

また、コーピングスタイルに関して、個人のコーピングスタイルはストレス状況に対する個人の主観的評価の個人差と関連がみられることから (Aneshensel, Rutter, & Lachenbruch, 1991; Watson, David, & Suls, 1999)、コーピングスタイルは自己愛傾向に限らず他の多くのパーソナリティ特性に関わることが示唆される (Birkás, Boróka, Gács, & Csathó, 2016)。このような観点のもとで Birkás et al. (2016) は、自己愛傾向だけでなく Dark Triad の各特性とコーピングスタイルとの関連を検討している。その結果、Dark Triad の他の 2 特性を統制した時、全体として自己愛傾向が問題焦点型対処 (課題解決に焦点をあてたコーピング) および情動焦点型対処 (ネガティブな情動の解消に焦点をあてたコーピング) と正の関連を示し、マキャベリアニズムやサイコパシー傾向は問題焦点型対処と負の関連、情動焦点型対処と正の関連を示すことが報告されている。

#### 第 7 節 まとめ

本章では Dark Triad の研究動向についてまとめ、第 1 節では Dark Triad を測定する簡便な尺度が作成されてきたことを論じ、第 2 節ではパーソナリティ、第 3 節では社会情緒的機能、第 4 節では対人行動、第 5 節では社会的行動、第 6 節では内的適応性に関する先行研究を論じてきた。第 2 節以降の議論から、Dark Triad には様々な水準で共通点・相違点があることが示された。以下では、共通点・相違点という観点から Dark Triad の研究動向をまとめる。

#### Dark Triad の共通点

第三章で詳述したように、Dark Triad の共通点としては冷淡さや他者操作的な傾向性があることが示されていた。この点は本章で述べた先行研究でも一貫しており、第 2 節、第 3 節において Dark Triad は共通して協調性、正直

さ-謙虚さ、共感性と関連が示され、Dark Triad の高い者は他者に対して冷淡で他者の不利益を考慮しない傾向にあることが示された。この点は第4節の対人行動においても確認され、Dark Triad はいずれも他者操作、対人葛藤の多さ、暴力的な葛藤解決と正の関連を示す特性であることが示されていた。以上の点から、Dark Triad は他者に対する冷淡さと自分の利益のために他者を利用するような傾向性を共通点にもつ特性群であることが確かめられた。

#### Dark Triad の相違点

第二章第3節で述べたように、Jones & Paulhus (2010a) は Dark Triad を時間的志向性と自我同一性希求の2つの調整変数によってその相違点をまとめている。本章で述べた先行研究は、概ねこのような理論的指摘と整合的な結果を示している。他の2特性を統制した時、時間的志向性に関しては、マキャベリアニズムが衝動性や直接的な攻撃行動の高さと関連を示さない一方で、自己愛傾向やサイコパシー傾向は関連を示したことによって支持された。また、自我同一性希求については、自己愛傾向が自我脅威場面において攻撃行動の高さと関連を示すことや、精神的健康の高さ、他者評定における好ましきによって示された。Dark Triad の各特性は先に述べたように冷淡さや対人的操作・搾取を不可欠な要素として含む一方で、マキャベリアニズムには戦略的・計画的に巧みに振る舞う要素があり、自己愛傾向には誇大な自己イメージを維持する要素が、サイコパシー傾向には衝動的・短期的に自身の欲求を充足しようとする要素がそれぞれ含まれる概念であると言える。

## 第四章 Dark Triad の統合モデルの提案

Dark Triadに関するモデルは Jones & Paulhus (2010a) によって提案された時間的志向と自我同一性希求の2つの調整変数によって Dark Triad を弁別するモデルが広く言及されてきた (e.g., Rauthmann & Kolar, 2013)。このようなモデルが提案されたことによって、Dark Triad の3特性の「オーバーラップがありつつも独自の特徴を有する」様相を上手く捉えることができるようになった。しかし、第一章で述べたように Dark Triad の個々の特性においては、それぞれ適応的な側面と不適応的な側面の2側面があることが示されている。したがって、1つの概念に適応的な側面と不適応的な側面があるという自己愛傾向で指摘された問題 (Back, 2018) は、Dark Triad のモデルにまで及ぶものである。このような問題を解決するためには、Back et al. (2013) によって提案された自己愛傾向の2過程モデルである NARC のように、Dark Triad の適応的な側面と不適応的な側面を統合してモデル化する必要がある。

NARC は Morf & Rhodewalt (2001) のダイナミック自己制御過程モデルに端を発する自己愛傾向のモデル (e.g., Campbell, Brunell, & Finkel, 2006; Campbell & Campbell, 2009; Campbell & Green, 2008) の後継モデルと言え (Back et al., 2013)、ダイナミック自己制御過程モデルにおける認知-感情システムおよび行動と社会的アウトカムとの関係性や社会的アウトカムから認知システムへのフィードバックを受け継いだモデルである。そして、Morf & Rhodewalt (2001) は自身のダイナミック自己制御過程モデルについて、具体的な自己・他者に対する認知表象や特徴的な情動要素が明らかな場合には他の特性にも応用可能であることを論じている。したがって、マキャベリアニズムやサイコパシー傾向の認知的側面や情動要素が示されてきている現在では、これらの概念にも NARC のモデルを適用することができると考えられる。

そこで本稿では、NARC のモデルをマキャベリアニズムやサイコパシー傾向にまで拡張した新たな Dark Triad のモデルを提案する (Figure 4-1)。この統合モデルは、自己愛傾向については NARC (Back et al., 2018) を配置し、マ

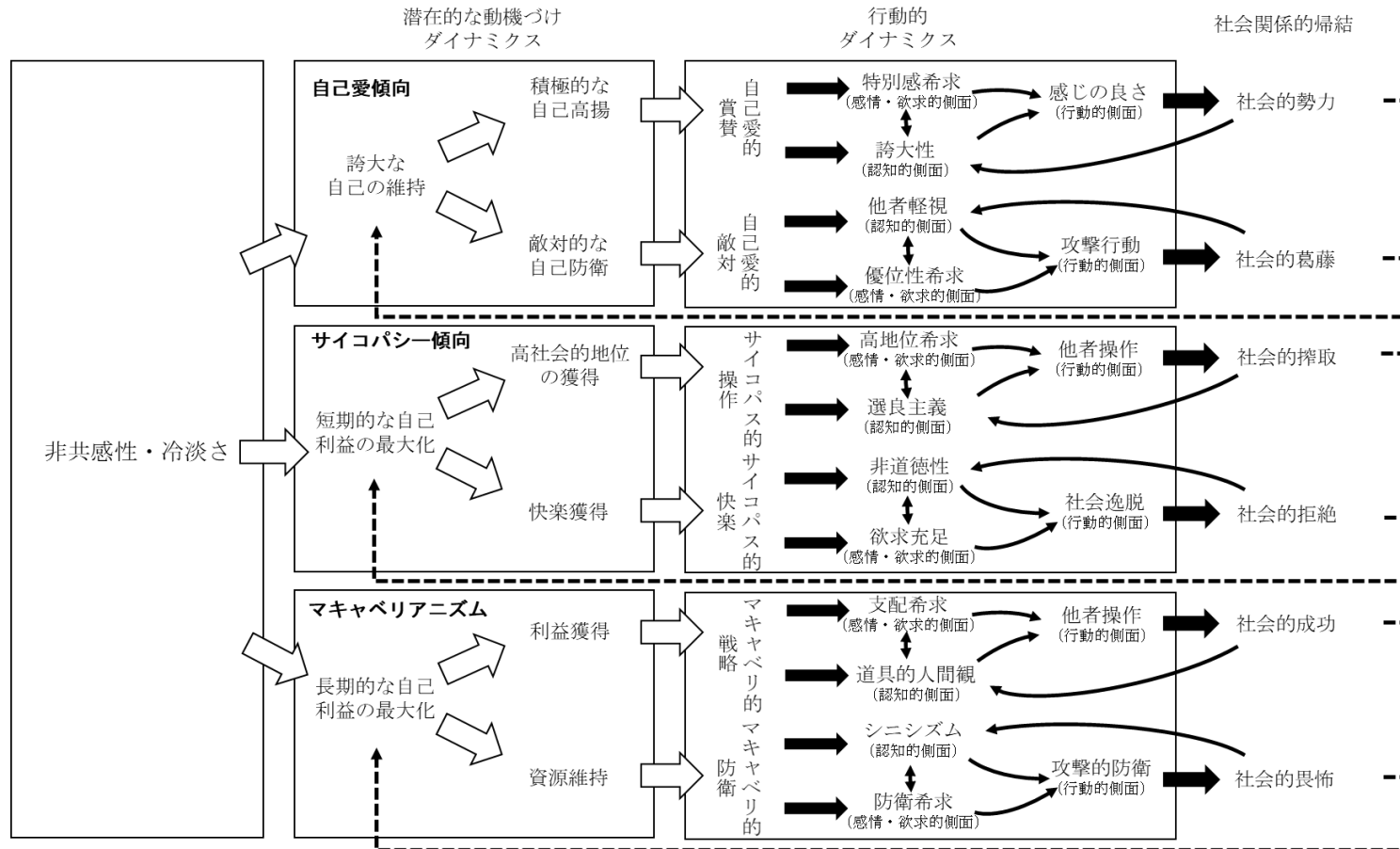


Figure 4-1. Dark Triad の統合モデル

キャベリアニズムやサイコパシー傾向については新たに NARC に対応する形でモデルが構成された。以下では、このモデルの要点を記述する。

初めに、Dark Triad の共通基盤として非共感性・冷淡さを位置づけた。この非共感性・冷淡さから、自己愛傾向、サイコパシー傾向、マキャベリアニズムの潜在的な動機づけシステムへと分化されていくことが想定されている。

サイコパシー傾向に関して、潜在的な動機づけダイナミクスにおいては、長期的な利益よりも目先の自分の利益を最大化させようとする「短期的な自己利益の最大化」を根本の動機づけに位置づけ、それが今よりも高い職位や特権性の獲得を求める「高社会的地位の獲得」と目先の快感情を得ようとする「快樂獲得」に分化することが想定されている。そして、これらの動機づけを充足させるような行動的ダイナミクスとして、「サイコパス的操作」および「サイコパス的快樂」が措かれている。

サイコパス的操作は高社会的地位の獲得を充足させるために活性化される行動ダイナミクスであり、感情・欲求的側面として高い社会的地位を求める「高地位希求」を、認知的側面として優秀な人物を重視し失敗した人物を軽視するような「選良主義」を想定している。このような認知的側面、感情・欲求的側面が相互作用した結果、周囲の人物を自分の都合の良いように操作する「他者操作」という行動的側面が生起することがこのモデルでは想定されている。サイコパス的快樂は自身の快感情を惹起させるように働く行動ダイナミクスであり、感情・欲求的側面として自身の快感情を充足させる「欲求充足」を、認知的側面として道徳性の欠如を表す「非道徳性」を位置づけ、これらが相互作用してリスクテイキング行動のような「社会逸脱」に至る。

サイコパシー傾向の行動的ダイナミクスにおける他者操作は、結果として他者を利用して自分の地位を高めるような「社会的搾取」を高めるように働くことが想定される。その一方で、社会逸脱は結果として所属集団内においてその構成員から批判をされるような「社会的拒絶」を高めるように働くことが考えられる。このような社会関係的帰結は行動的ダイナミクスおよび潜

在的動機づけダイナミクスにフィードバックされることが考えられ、社会的搾取は選良主義を高め、社会的拒絶は非道徳性を高めることが想定される。また、社会的搾取はその行動をとる個人にとってはポジティブなアウトカムであるために、社会的拒絶はネガティブなアウトカムであるがスリル希求的な欲求を充足させることには成功しているために、それぞれ短期的な自己利益の最大化の動機づけを高めるように働くことが考えられている。

マキャベリアニズムに関しては、潜在的動機づけダイナミクスにおいて短期的な目先の利益よりも長期的な利益を重視する「長期的な自己利益の最大化」を布置し、それが長期的な利益を獲得しようとする「利益獲得」と得た利益を維持しようとする「資源維持」に分化されることが想定される。これらの動機づけを充足させるために「マキャベリの戦略」および「マキャベリの防衛」の行動的ダイナミクスが活性化される。

マキャベリの戦略においては、感情・欲求的側面として周囲の人物を長期的な視点からコントロールしようとする「支配希求」と、他者を自分が成功するためのツールであると捉える「道具的人間観」を位置付けており、これらの感情・欲求的側面と認知的側面が相互に影響し合って周囲の人物を長期的な視点から操作する「他者操作」として顕現化される。マキャベリの防衛においては、感情・欲求的側面として外敵および内部の敵から資源を奪われないようにする「防衛希求」と認知的側面として他者や世界について冷笑的な考え方をとる「シニシズム」が位置づけられ、これら感情・欲求的側面と認知的側面が相互作用して、長期的な利益を損なわないように外敵や内部の敵を服従させるような「攻撃的防衛」の行動的側面を生起させる。

これらの行動的ダイナミクスはそのアウトカムとして重要な社会関係的帰結をもたらすことが想定される。他者操作については周囲の人物を巧みに先導してその集団内において成功を収めるような「社会的成功」を高め、攻撃的防衛については敵を恐れさせて自身の利益を保持するような「社会的畏怖」を高めることが想定される。また、これらの社会的成功および社会的畏怖は



利益獲得および資源維持にフィードバックされ、マキャベリアニズムの元の動機づけである長期的な自己利益の最大化を高めることが想定されている。

以上述べてきたように、マキャベリアニズムおよびサイコパシー傾向についても、NARC のモデルに対応する形でそれぞれのシステムが布置されてきた。以下では、このモデルの妥当性について先行研究を参照しつつ記述する。

### 第 1 節 非共感性・冷淡さ

Figure 4-1 では、Dark Triad に共通する基盤として非共感性・冷淡さを位置づけた。これはそれ以降の Dark Triad の潜在的動機づけシステムおよび行動的ダイナミクスを包括する共通基盤である。Dark Triad の共通基盤として冷淡さ・非共感性を位置づけたのは、Dark Triad の共通因子の分散のほとんどを一次性サイコパシー（冷淡さ・他者操作）が説明することを示した Jones & Figueredo (2013) の知見や、Paulhus (2014) の理論的指摘に基づく。

非共感性・冷淡さを Dark Triad の各特性の上位のモデルではなく、共通基盤として布置したのは、これまで、非共感性・冷淡さはそれ自体が独自の概念特性として扱われ (i.e., *callous-unemotional trait*)、その神経基盤や遺伝的規定性の高さが示されてきたことや、サイコパシー傾向の気質的特徴として扱われてきたこと (e.g., Hawes, Brennan, & Dadds, 2009) に基づく。とりわけ、非共感性・冷淡さは社会的情報処理に関わる基礎コルチゾール値の低さと関連が示されてきており (Cima, Smeets, & Jelicic., 2008; Loney et al., 2006)、非共感性・冷淡さは、基礎コルチゾール値の低さによる罰刺激への無反応や他者の恐怖表情への無関心さを反映したものだと考えられる。

この非共感性・冷淡さは、広く自己中心的な傾向性および他者に危害を加える傾向性を表した概念であるが、その具体的な行動については個々の動機づけによって方向付けられると考えられる。動機づけについては過去の来歴やその時々状況要因によって変化すると考えられ、その個々の動機づけが

自己愛傾向、サイコパシー傾向、マキャベリアニズムの潜在的な動機づけダイナミクスを反映すると考えられる。

## 第2節 サイコパシー傾向

Figure 4-1 では、サイコパシー傾向の根本の動機づけは「短期的な利益獲得」であるとしている。これは、目先の利益に飛びつかせたり、自身の欲求を直ぐに充足させたりしようとするような動機づけシステムを表したものである。このような目標は Blackburn (2006) によるサイコパシーの理論的指摘に基づいて構成された。Blackburn (2006) は、報酬獲得へと動機づける行動活性化システム (Behavioral Activation System: BAS) と罰回避を動機づける行動抑制システム (Behavioral Inhibition System: BIS) で構成される Gray (1987) の気質理論に基づき、サイコパシーについて、一次性サイコパシーは BAS が高く BIS が低い傾向にあると考えられることや、二次性サイコパシーが BAS と BIS の両方が高い傾向にあると考えられることを理論的に指摘した。その後の実証知見はこれを支持するものであり、Hughes, Moore, Morris, Corr (2012) や Ross et al. (2007) はサイコパシー傾向と BIS/BAS との関連を検討し、サイコパシー傾向の両側面が BAS の高さおよび BIS の低さと関連が認められている。サイコパシー傾向の両側面に共通する BAS の高さや BIS の低さは報酬獲得を強く動機づけると考えられることから、サイコパシー傾向の両側面は比較的短期的な利益を求めることが考えられる (Hicks & Drislane, 2018; Jones & Paulhus, 2011)。このため、サイコパシーの概念モデルにおいては短期的な利益をサイコパシー傾向の根本の動機づけとした。

サイコパシー傾向の「短期的な利益獲得」という動機づけシステムは、「高社会的地位の獲得」と「快樂獲得」の2つのシステムに分岐する。この2つの動機づけは、Glenn, Efferson, Iyer, Graham (2017) の実証知見に基づく。Glenn et al., (2017) はサイコパシー傾向と社会的価値観、願望、物質的価値

観などとの関連を検討し、サイコパシー傾向が全体として楽しさへの希求や相対的な社会的地位への願望と正に関連することを示した。

これらの動機づけが単一の動機づけシステムを構成するのではなく、2つのシステムへと分岐するという点については、サイコパシー傾向の2つの下位側面がそれぞれ BAS の下位側面と異なる関連を示すという知見 (Hughes et al., 2012) に基づくものである。Hughes et al. (2012) はサイコパシー傾向の一次性サイコパシーが BAS の下位側面の中でも物理的な報酬を手に入れるために全力を尽くすような概念である BAS 駆動や、報酬に対するポジティブな興奮の程度を表す概念である BAS 報酬反応性と正の関連を示すことや、二次性サイコパシーが報酬の中でも新奇刺激に対する反応である BAS 刺激探求と正の関連を示すことを明らかにした。それぞれの概念内容から、Glenn et al. (2017) によって見出されたサイコパシー傾向の高い者が求める報酬の中でも、BAS 駆動や BAS 報酬反応性における報酬は社会的地位であり、BAS 刺激探求における報酬は楽しさであると考えられ、これらの知見を考慮すれば、サイコパシー傾向の動機づけシステムは2つに分岐すると考えられる。以下では、「高社会的地位の獲得」から「社会的搾取」へのプロセス、および「快樂獲得」から「社会的拒絶」へのプロセスについてそれぞれ論じる。

#### 「高社会的地位の獲得」から「社会的搾取」

「高社会的地位の獲得」は前述したように対人・情動的側面に関わるものであり、移行された行動システムにおいては感情的側面に「高地位希求」を、認知的側面に「選良主義」を位置づけた。サイコパシー傾向の「高地位希求」は「高社会的地位の獲得」に対応したものであり、サイコパシー傾向の非共感的な特徴を踏まえれば、単に自身の社会的地位の高さを求めるだけでなく、他者を蹴落とすようなものも含まれると考えられる。そして、それが認知的側面である「選良主義」にも反映されている。「選良主義」とは、社会において能力の優れた者を重視するような考え方を指し、平等主義と対置されるも

のである。認知的側面に「選良主義」を位置づけたのは、社会的地位の高さが平等主義と負の関連を示すという知見 (Piff, Kraus, Côté, Cheng, Keltner, 2010) や、サイコパシー傾向が繰り返しのある四人のジレンマゲームにおいて裏切り行為を示すという知見 (Rilling et al., 2007) に基づくものであり、サイコパシー傾向は自分だけが利益を得るために他者を操作したり、騙したりする傾向性にあると考えられる。

「高地位希求」や「選良主義」は「他者操作」として顕現化される。他者操作は他者を自分の都合の良いようにコントロールするような概念を指す。サイコパシー傾向に他者操作的な傾向があることは Cleckley (1941/1976) の初期の理論において既に指摘されており、対人・情動的側面の中心的な対人行動を表している。その後の自己報告式のサイコパシー尺度においても、他者操作的な側面は繰り返し示されてきた (Williams et al., 2007; Lilienfeld & Widows, 2005)。動機づけシステム、および感情・認知的側面を踏まえれば、サイコパシー傾向の他者操作は社会的地位を得るために裏切りや嘘を駆使して他者をコントロールするような他者操作であることが考えられ、このようなサイコパシー傾向の特徴は、サイコパシーのいくつかの臨床的指摘とも整合的である (e.g., Cleckley, 1941/1976; Karpman, 1941, 1948)。

「他者操作」は「社会的搾取」に帰結する。ここで「社会的搾取」は他者を利用したり貶めたりして自分の利益を得ることであり、他者の利益を奪い取るような様を表している。大隅・大平 (2010) が指摘するように、他者への裏切り行為は即時的な報酬を得ることができるが、他者との協力関係による長期的な互恵的報酬を得る可能性を低める。サイコパシー傾向が高い者は他者を裏切ることにより、短期的な報酬を得続け、周囲と短期的な関係を築いていると考えられる。このことは、サイコパシー傾向と短期的な恋愛関係の選択との関連を示した実証知見 (Jonason & Webster, 2009; Jonason & Kavanagh, 2010; Jonason et al., 2011) と整合的である。また、サイコパシー傾向のこのようなアウトカムへの帰結は、Cleckley (1941/1976) が指摘するような

現実社会において適応しているサイコパシー像と整合的である。すなわち、その背景に他者への非共感性がありながらも、抜け目のない頭脳を持ち、表面的な魅力があり、人を惹きつけるような能力の持ち主であるような人物が想定されている (Dutton, 2012 小林訳, 2013)。

「社会的搾取」は行動システムにおける認知的側面である「選良主義」にフィードバックされる。このような関係のモデル構成は、社会的地位の高さと平等主義および向社会的行動との関連について検討した Piff et al. (2010) に基づくものである。Piff et al. (2010) は実験室実験 (Study 2) によって主観的な社会階層の高さと向社会的行動との間に負の関連があることを示したうえで、Study 3 で社会階層の高さと向社会的行動の関連を平等主義が媒介するかどうかを検討した。その結果、社会階層が平等主義に負のパスを示し、平等主義が向社会的行動に正のパスを示すような間接効果が示された (Piff et al., 2010)。この結果は、自身の社会階層が高い人ほど選良主義的な考え方が高いということを支持しており、Figure 4-1 で示したような社会的搾取から選良主義へのフィードバックループを支持するものである。

#### 「快樂獲得」から「社会的拒絶」

「快樂獲得」の動機づけシステムは次の「サイコパシ的快樂」の行動システムへと移行する。この行動システムにおいては、認知的側面に「非道徳性」を位置づけ、感情的側面に「欲求充足」を位置づけた。認知的側面に「非道徳性」を布置したのは、サイコパシー傾向の非道徳的社会化の議論 (Blair, Mitchell, & Blair, 2005 福井訳 2009) に基づく。Blair et al. (2005 福井訳 2009) はサイコパシー傾向が他者の悲しみや恐怖表情の刺激による学習ができないことを示す知見 (Aniskiewicz, 1979; Blair, Jones, Clark, & Smith, 1997) に基づき、サイコパシー傾向が高い者はそのような形の学習に失敗し、非道徳的な形で社会化することを指摘している。また、感情的側面に「欲求充足」を布置したのは、近年のサイコパシー傾向と衝動性の関連の知見 (Gray,

Weidacker, & Snowden, 2019) に基づくものである。Gray et al. (2019) はサイコパシー傾向と多次元的な衝動性との関連を検討し、サイコパシー傾向の衝動・反社会的側面がポジティブな切迫性 (positive urgency) やネガティブな切迫性 (negative urgency) と正に関連することを示した。ポジティブな切迫性は手に入れることのできる快楽を、ネガティブな切迫性は避けることのできる苦しみを直ぐにでも充足・解消したいと思うような切迫感の高さを表す概念であり、このような即座の欲求充足がサイコパシーの衝動・反社会的側面の背景にあると考えられることから、Dark Triad の統合モデルではサイコパシー傾向の感情的側面に「欲求充足」を位置づけた。

このような「非道徳性」と「欲求充足」は次の「社会逸脱」において顕現化される。「社会逸脱」はサイコパシーの側面の1つであり (Williams et al., 2007), 臨床場面においては重大な犯罪行為をも含めたものを指すが (Hare, 1980), サイコパシー傾向のような非臨床的なサイコパシー概念の場合には犯罪には至らないまでも反社会的と呼ばれうる行動や、未だ捕まっていない犯罪行為を指す (Benning et al., 2018)。このようなサイコパシー傾向の社会逸脱性を表した知見として、前述したようなサイコパシー傾向が道徳性の低さを媒介して教育場面における不正行為 (Williams et al., 2010) や身体的脅威に対する攻撃行動 (Jones & Paulhus, 2010b) との関連が挙げられる。前者の結果は Figure 4-1 で示したような非道徳性から社会逸脱に至るプロセスを支持するものである。後者の結果は、サイコパシー傾向がネガティブな切迫性を背景として攻撃に至るプロセスが示唆されるものであり、Figure 4-1 を支持する結果と言える。

サイコパシー傾向の「社会逸脱」は「社会的拒絶」に帰結すると考えられる。これを支持する知見として、Masui, Fujiwara, & Ura (2013) はサイコパシー傾向が社会的排斥と正に関連することを示している。また、サイコパシー傾向の衝動・反社会的側面は不安、心理的苦痛、抑うつ、怒りといった不適応指標との関連が示されている (Hicks & Patrick, 2006)。なお、サイコパシー

傾向の情動の浅さからこのような社会的拒絶に対して無反応を示すのではないかということも考えられるが、実証知見ではサイコパシー傾向が高い者も低い者も社会的拒絶に対して同程度の反応を示すことが示されている (McDonald et al., 2012)。このような「社会的拒絶」に至る可能性がありながらも、サイコパシー傾向が高い者は社会逸脱的な傾向にある。このような社会逸脱的行動はそれによって欲求が充足されるために非道徳性が学習され、再度社会逸脱に至ることが考えられる (Blair et al., 2005 福井訳 2009)。

### 第 3 節 マキャベリアニズム

Figure 4-1 において、マキャベリアニズムの根本の動機づけは「長期的な利益の最大化」とした。このマキャベリアニズムの動機づけは、Jones & Paulhus (2009) や、Rauthmann & Will (2011) の理論的な指摘に基づいて構成された。Jones & Paulhus (2009) は、前述したようにマキャベリアニズムの概念には長期的な視点から利己的な利益を得る方略が含まれていることを指摘した。また、Rauthmann & Will (2011) は Jones & Paulhus (2009) の指摘を踏まえ、マキャベリアニズムの目標について、「自己中心的な利益」、「作動的な志向性」、「衝動統制」の 3 点にまとめており、自己の作動的な利益 (e.g., 地位, 権力, お金) を得るうえで長期的な視点で動機づけられていることを指摘している。

この「長期的な利益の最大化」は「利益獲得」と「資源維持」に分岐していく。これは Rauthmann & Will (2011) の指摘に基づくものであり、Rauthmann & Will (2011) は、マキャベリアニズムの「自己中心的な利益」は獲得的なもの (acquisitive) と防衛的なもの (protective) に分離している。獲得的なものはマキャベリアニズムが高い者の影響性や権力を高めて社会的に成功したいといった欲求を指し、防衛的なものはマキャベリアニズムが高い者の他者から統制され、資源が奪われたり、少なくなったりするのを防ぎたいといった欲求を指す。このようにマキャベリアニズムが高い者の欲求を獲得的なものと防衛的なものとに分けるというアイデアを支持する実証知見として、前

述したように、マキャベリアニズムの戦略は精神病理的な傾向と全体的に関連を示さなかったのに対して、世界観は精神病理的な傾向と正の関連を示した知見がある (Monaghan et al., 2016)。マキャベリアニズムの世界観と精神病理的な傾向との関連は、マキャベリアニズムの資源の脅威に対する警戒的側面を表していると考えられる (Monaghan et al., 2016)。

### 「利益獲得」から「社会的成功」

「利益獲得」は行動システムである「マキャベリ的操作」に移行する。「マキャベリ的操作」では、感情的側面に「支配希求」、認知的側面に「道具的人間観」を位置づけた。Rauthmann & Will (2011) は、マキャベリアニズムが高い者は自身の利益を獲得するために冷淡で計算高い戦略をとることを指摘している。このように、自身の利益を獲得するために周囲の人や場をコントロールするような欲求を表すために、「支配希求」を布置した。これは、Cristie & Geis (1970) によって述べられているグループを束ねる巧みなリーダー像とも整合的である。認知的側面の「道具的人間観」は、他人は簡単に騙され、操作されるものであり、自身の目的のために道具的に用いられるものだという考え方を指す。この側面は Rauthmann & Will (2011) がマキャベリアニズムの認知的側面のひとつとして掲げている側面であり、感情的側面に位置づけられた「支配希求」を考慮して布置されたものである。すなわち、マキャベリアニズムが高い者の他者に対する支配希求は自身の利益のために他人を道具的に扱うことであり、そのような認知を背景としてマキャベリアニズムが高い者の他者操作は行われていると考えられる。

「他者操作」はマキャベリアニズムの中心的な概念であり (Cristie & Geis, 1970; Fehr et al., 1992), 前述したような「支配希求」と「道具的人間観」の顕現化されたものであると考えられる (Rauthmann & Will, 2011)。この「他者操作」は Mach-IV における戦略と近い概念であり、マキャベリアニズムの他者を巧みに操作し、利益を得ようとする傾向性を表したものである。マキャ



ベリアニズムの他者操作が「支配希求」や「道具的人間観」に基づいていることは、Mach-IV (Cristie & Geis, 1970; 中村他, 2012) の項目内容からも窺える。例えば、戦略に含まれる項目の「重要な人物の機嫌を取るのは賢明なことである」は他者を道具的に扱っており、また、「自分がした事の本当の理由は、都合がよい場合を除いて明かすべきではない」という項目はマキャベリアニズムが高い者の支配的な傾向性が表されたものと考えられる。

Figure 4-1 では、マキャベリアニズムが高い者の「他者操作」は「社会的成功」に帰結することが表されている。ここでの「社会的成功」はマキャベリアニズムが高い者が自分の利益を最大化することに成功していることを意味する。このようにマキャベリアニズムが高い者が「社会的成功」に至ることは様々な実証知見によって支持されている (Czibor, & Bereczkei, 2012; Sakalaki, Richardson, & Thepaut, 2007; Williams et al., 2010)。その中でも代表的な知見として、Sakalaki et al. (2007) はマキャベリアニズムとご都合主義、経済的利益との関連を検討している。その結果、マキャベリアニズムが高い者が状況に応じてご都合主義的に行動を変え、その結果として自身の経済的な利益を最大化していることを示した。このように状況に応じて巧みに行動を変えて自身の利益を最大化しているマキャベリアニズムが高い者の様相は、Jones & Paulhus (2009) の理論的指摘とも整合的である。そして、「社会的成功」は「道具的人間観」にフィードバックされる。マキャベリアニズムが高い者の他者操作は道具的人間観に基づくものであると考えられ、その帰結が社会的成功であれば、マキャベリアニズムが高い者の「道具的人間観」は更に強固なものとなると考えられる。

#### 「資源維持」から「社会的畏怖」

「資源の維持」は行動システムである「マキャベリの警戒」に至る。「マキャベリの警戒」は、認知的側面として「シニシズム」を布置し、感情的側面として「防衛希求」を布置している。「防衛希求」は「資源維持」に対応した

感情的側面である。「シニシズム」はマキャベリアニズムが高い者の世界観として中核的な特徴をなす概念であり (Jones & Paulhus, 2009; Rauthmann & Will, 2011), 人は意志が弱く, 信頼できないものであり, 利己的であるという考え方のことを指す。認知的側面に「シニシズム」を位置づけたのは, マキャベリが『君主論』 (Lisio, G, 1990 池田訳 2018) において, 自分の立場や評判, 地位を貶められることのないようにシニカルに世界を捉えておくことの重要性を説いていることに基づく。具体的にはマキャベリは「...人間は, 恐れている人より, 愛情をかけてくれる人を容赦なく傷つけるものである。その理由は, 人間はもともと邪なものであるから, ただ恩義の絆で結ばれた愛情などは, 自分の利害のからむ機会がやってくれば, たちまち断ち切ってしまう。ところが, 恐れている人については, 処刑の恐怖がつきまとうから, あなたは見放されることがない」 (Lisio, G, 1990 池田訳 2018, p.142) と記述しており, 新しい君主は恐怖をもって国を統治することが重要であることを説いている。他にもマキャベリは「...世間がよい人だと思ふような事がただけを後生大事に守っているわけにはいかない。国を維持するためには, 信義に反したり, 慈悲にそむいたり, 人間味を失ったり, 宗教にそむく行為をも, たびたびやらねばならないことを, あなたは知っておいてほしい」 (Lisio, G, 1990 池田訳 2018, pp.149-150) とし, 国を維持するためには悪にも手を染める必要があることをマキャベリは説いている。

そして, 「防衛希求」と「シニシズム」は「攻撃的防衛」によって顕現化される。資源が脅かされるのは, 自身がコントロールしている内部の不信や裏切りの可能性も考えられる上, 外敵からの攻撃の可能性も考えられる。このような際にマキャベリは全般的に攻撃的な手段をもって防衛することを説いている。例えばマキャベリは「恐れられるのと愛されるのと, さてどちらがよいか...どちらか一つを捨ててやっけていくとすれば, 愛されるより恐れられる方が, はるかに安全である」 (Lisio, G, 1990 池田訳 2018, pp.141) や, 「...名君は, たんに目先の不和だけでなく, 遠い将来の不和についても心にくば

るべきであり、あらゆる努力をかたむけて、将来の紛争に備えておくべきだ...ローマ人は、フィリッポスやアンティオコスをイタリア本土で迎える愚を避けて、ギリシアの地で戦いを仕掛けた」(Lisio, G, 1990 池田訳 2018, p.28) というように、恐怖を持って資源を維持し、外敵からの攻撃に対してもあらかじめ先制攻撃を仕掛けることの重要性を説いている。実証的な知見においても、マキャベリアニズムは攻撃性との間に正の相関を示している (Jones & Neria, 2015; Watson & Morris, 1994)。

「攻撃的防衛」は「社会的畏怖」に帰結する。ここで、マキャベリアニズムが高い者の内部や外部の人間に対する攻撃性は社会的葛藤を生み、マキャベリアニズムが高い者の評判や地位を貶めることに繋がる可能性がある。このような問題に対してマキャベリは、自身の評判や地位を貶められることのないように攻撃をすることの重要性を説いている。例えばマキャベリは「...君主は、たとえ愛されなくてもいいが、人から恨みを受けることがなく、しかも恐れられる存在でなければならない。...どうしても誰かの血を見る行動に行きつかざるをえないときは、適当な口実としかるべき動機があるときのみ、やるべきである」(Lisio, G, 1990 池田訳 2018, p.142) と説いている。実証的な知見においても、マキャベリアニズムが高い者は社会的な望ましさは低く評価されるものの (Rauthmann & Kolar, 2012)、リーダーとしてふさわしいという評価を受けることもある (Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990)。このように、マキャベリアニズムが高い者は社会的評判や地位を貶められないように内部の人間や外部の敵に対して攻撃を行い、それによって周囲を恐れさせることで資源を維持しようとすると考えられる。そして「社会的畏怖」は「シニシズム」へとフィードバックされる。Jones & Paulhus (2009) はマキャベリアニズムが高い者のシニシズムと敵への先制攻撃が相互作用的に働くことを指摘しており、これは Figure 4-1 で示したようなフィードバックループを表したものだと考えられる。すなわちマキャベリアニズムが高い者に対する内

部からの不信や外部からの攻撃に対して攻撃行動をもって資源を維持した際には、その資源の維持の成功をもってシニシズムが確証されると考えられる。

### 第 4 節 まとめ

本章では Dark Triad の各概念の適応・不適応性とそれぞれの共通点・相違点を統合したモデルを提案し、その妥当性について先行研究に基づいて論じられ、全体として先行研究と統合的なモデルであることが確認された。特に、共通部分とそこから分かれる潜在的な動機づけメカニズムにおける「誇大な自己の維持」、「短期的な自己利益の最大化」、「長期的な自己利益の最大化」については、Jones & Paulhus (2010a) による理論的指摘と統合的であるだけでなく、第三章において概観したように Dark Triad の 3 特性を同時に測定した先行研究においても数多く確かめられてきた。しかし、潜在的な動機づけメカニズム以降の行動的ダイナミクスに関しては、Dark Triad の 3 特性を同時に測定して検討した先行研究は数少ない。

## 第五章 問題点，全体の目的

前章では、NARC を Dark Triad にまで拡張した Dark Triad の統合モデルを提案し、Dark Triad の各特性の下位次元を整理し、先行研究と整合的なモデルであることを確認した。しかし同時に、潜在的な動機づけダイナミクス以降の行動的ダイナミクスについては、Dark Triad の 3 特性を同時に測定した研究においては十分に知見が蓄積されているとは言い難い点も指摘された。Dark Triad の統合モデルの妥当性を確かめるためには、行動的ダイナミクスについても検討する必要がある。そこで本章では Dark Triad の統合モデルの妥当性を確固たるものにする上でまず Dark Triad の行動的側面について、検討すべき事柄を取り上げ、その個々の問題意識と全体の目的について述べる。

### 第 1 節 本研究の問題意識

Dark Triad の統合モデルに対する実証的知見の乏しさを踏まえると、直接的に Dark Triad の多次元性を捉える前にまず、Dark Triad の統合モデルで想定される Dark Triad の差異が実際に見出されるかどうかを検討する必要があると考えられる。そこで、本研究では Dark Triad の対人方略、反社会性、社会適応性に焦点をあてて主に Dark Triad の統合モデルにおける行動的側面を検討する。とりわけ、対人方略として「他者操作方略」および「対人葛藤方略」、反社会性として「攻撃行動」および「ゴミのポイ捨て行動」、社会適応性として「ライフスキル」および「コーピングスタイル」に着目する。

これらの検討対象と Dark Triad の統合モデルの行動的側面との対応関係を Table 5-1 に示す。対人方略は Dark Triad の統合モデルにおける全ての行動的側面と関わることが考えられ、反社会性は自己愛傾向の「攻撃行動」やサイコパシー傾向の「社会逸脱」と関わることが考えられる。また、社会適応性は自己愛傾向の「感じの良さ」やマキャベリアニズムの「他者操作」、サイコパシー傾向の「社会逸脱」と関連することが考えられる。したがって、これらの領域においてこれらの Dark Triad の統合モデルから想定される関連が実

Table 5-1. 検討対象とモデル中の行動的側面との対応

検討対象	章	節	研究	測定指標	モデル中の行動的側面との対応
対人方略	第七章	第1節	研究3	他者操作	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己愛傾向の「感じの良さ」</li> <li>サイコパシー傾向の「他者操作」</li> <li>マキャベリアニズムの「他者操作」</li> </ul>
		第2節	研究4	対人葛藤方略	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己愛傾向の「攻撃行動」</li> <li>サイコパシー傾向の「社会逸脱」</li> <li>マキャベリアニズムの「攻撃的防衛」</li> </ul>
反社会性	第八章	第1節	研究5	攻撃性	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己愛傾向の「攻撃行動」</li> <li>サイコパシー傾向の「社会逸脱」</li> <li>マキャベリアニズムの「攻撃的防衛」</li> </ul>
		第2節	研究6	ゴミのポイ捨て	<ul style="list-style-type: none"> <li>サイコパシー傾向の「社会逸脱」</li> </ul>
社会適応性	第九章	第1節	研究7	ライフスキル	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己愛傾向の「感じの良さ」</li> <li>サイコパシー傾向の「社会逸脱」</li> <li>マキャベリアニズムの「他者操作」</li> </ul>
		第2節	研究8	コーピングスタイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己愛傾向の「感じの良さ」</li> <li>サイコパシー傾向の「社会逸脱」</li> <li>マキャベリアニズムの「他者操作」</li> </ul>

際に確かめられるかどうかを通して, Dark Triad の統合モデルの行動的ダイナミクスにおける妥当性を判断する知見が得られると考えられる。

### 他者操作方略

先行研究では Dark Triad の各特性の他者操作について, 主に自分に有利な立場から他者を操作する方略について検討されてきている。先行研究全体の結果を総合してみると, 主に, 自己愛傾向は報酬や賛辞によって他者を操作するようなソフトな方略を用い, サイコパシー傾向は脅したり強制したりして他者を操作するようなハードな方略を用いることが示されており, マキャベリアニズムはソフトおよびハードな方略の両方を用いることが明らかにされてきた (e.g., Jonason et al., 2012)。これらの結果は, 部分的に Dark Triad の統合モデルにおける自己愛傾向の「感じの良さ」や, マキャベリアニズム, サイコパシー傾向の「他者操作」の部分に対応するものであり, これらをサポートするものである。

その一方で我が国では自分に有利な立場からだけではなく, むしろ自分に不利な立場から他者を操作する方略を積極的に取り入れた他者操作方略のモデルも提案されている。そのモデルが, 寺島・小玉 (2014) による他者操作方略のモデルである。寺島・小玉 (2004) は大学生を対象にした自由記述の結果に基づき, 他者操作方略のモデルとして「利己的で高圧的に他者をコントロールして自分の利益を得ようとする方略」の極と「他者からのケアを引き出そうとする方略」の極で表現される軸と, 「相手に何らかの感情を喚起させようとする方略」の極と「相手に何らかの行動を行わせようとする方略」の極で表現される軸の2軸で表現されるモデルを提案している。このうち, 前述の「自分に有利な立場から他者を操作する方略」は「利己的で高圧的に他者をコントロールして自分の利益を得ようとする方略」に対応し, 「自分に不利な立場から他者を操作する方略」は「他者からのケアを引き出そうとする方略」にそれぞれ対応すると考えられる。



寺島・小玉 (2004) は、「利己的で高圧的に他者をコントロールし、自分の利益を得ようとする方略」(i.e., 自己優越の立場から操作)と「他者からのケアを引き出そうとする方略」(i.e., 自己卑下の立場から操作)の2側面を、それぞれ操作対象の行動面を操作するか感情面を操作するかに分類し、その4下位尺度で構成される他者操作方略尺度を作成した。第1の下位尺度が「自己優越的感情操作」であり、相手よりも上の立場にたつて自らの優越性を誇示することで、相手に何らかの感情を喚起させようとする操作である。第2の下位尺度が「自己卑下的感情操作」であり、相手よりも下の立場にたつて自らの能力や状況を卑下することで、相手に何らかの感情を喚起させようとする操作である。第3の下位尺度が「自己優越的行動操作」であり、相手よりも上の立場にたつて自分の優越性を誇示することで自分のために何かをしてもらおうとする操作である。第4の下位尺度が「自己卑下的行動操作」であり、相手よりも下の立場にたつて自らの能力や状況を卑下することで自分のために何かをしてもらおうとする操作である。

Dark Triadの統合モデルに基づけば、マキャベリアニズムやサイコパシー傾向の「他者操作」は、必ずしも自分に有利な立場からの他者操作に限定されない。短期的・長期的な利益を得るためには自分に有利な立場からだけでなく自分に不利な立場から他者操作をすることも有益に働くことが考えられる。しかし、前述したようにDark Triadの各特性と他者操作方略との関連については概して自分に有利な立場からの他者操作が検討されており、自分に不利な立場からの他者操作については知見が蓄積されていないのが現状である。したがって、Dark Triadの統合モデルを検討する上で、寺島・小玉(2004)の他者操作方略尺度との関連を検討することが必要である。

#### 対人葛藤方略

Dark Triadが高い者はその利己的な特徴から他者との葛藤を経験しやすいことが考えられ、恋愛関係においてはそのような傾向性が支持されている

(Horan et al., 2015)。また, 葛藤状況においても相手との関係を継続させるメリットがあれば関係維持行動を行うことも示唆されている (Jonason et al., 2010)。これらの結果は対人葛藤場面における損失回避という点で Dark Triad の統合モデルにおける自己愛傾向の「攻撃性」, マキャベリアニズムの「攻撃的防衛」, サイコパシー傾向の「社会逸脱」を支持するものである。ただし, その具体的な対人葛藤方略については示唆されるに留まり, 具体的にどのような方略を行うのかについてはほとんど明らかにされていない。

葛藤状況における方略は様々に分類されうるが, その代表的なモデルの 1 つとして Rahim & Bonana (1979) が挙げられる (加藤, 2003)。加藤 (2003) はこの Rahim & Bonana (1979) の枠組みに基づいて, 以下の 5 下位尺度で構成される対人葛藤方略スタイル尺度を作成した。第 1 に「統合スタイル」であり, 自分と相手のどちらも受け入れられるような解決案を見つけ出すために情報を交換したり, 相違点を検討したりする方略である。第 2 に「自己譲歩スタイル」であり, 他者の関心事を満足させるために, 相違点を無視したり, 共通点を強調したりする方略である。第 3 に強制スタイルであり, 強制的に自分の意見を通すような方略である。第 4 に回避スタイルであり, 他者と自分を満足させるために, 他者の関心事も自己の関心事も無視して葛藤状況を避けようとする方略である。第 5 に相互妥協スタイルであり, 自分と他者とが互いに意見を譲り合って, 互いに許容可能な解決案を探る方略である。

Dark Triad の統合モデルに基づけば自己愛傾向の「攻撃性」, マキャベリアニズムの「攻撃的防衛」, サイコパシー傾向の「社会逸脱」はそれぞれ葛藤状況において喚起されるという共通特徴があるものの, その概念範囲は異なっている。これらの相違点を検討する上では加藤 (2003) のような広範に対人葛藤方略スタイルを捉えた尺度との関連を検討することが必要である。しかし, 未だに Dark Triad と加藤 (2003) の尺度との関連は検討されていない。

### 攻撃性

Dark Triad の中でも攻撃性の高さに関連が示されてきたのは概ね自己愛傾向とサイコパシー傾向であるが (e.g., Jones & Paulhus, 2010b), 攻撃性の下位側面に着目すればマキャベリアニズムも関係性攻撃の高さに関連することが示されてきた (Klimstra et al., 2014)。これらの結果は Dark Triad の統合モデルにおける自己愛傾向の「攻撃性」、サイコパシー傾向の「社会逸脱」、マキャベリアニズムの「攻撃的防衛」を部分的に支持するものである。

ただし, Klimstra et al. (2014) の調査対象者は青年期 (16 歳程度) であり, 成人期前期以降の対象者にも同様の結果が示されるかどうかについては検討が必要である。Dark Triad の統合モデルに照らし合わせてみると, サイコパス的な操作には関係性攻撃が含まれることも考えられる。これを支持するように, 近年の大学生を対象とした調査では Dark Triad の他の 2 特性を統制してもサイコパシー傾向が関係性攻撃と正に関連することを示した知見がある (Knight, Dahlen, Bullock-Yowell, & Madson, 2018)。このような先行研究の結果の一貫性のなさを踏まえると, Dark Triad と外顕性攻撃および関係性攻撃との関係性を, 青年期以降の調査対象者のデータを用いて総合的に比較検討する必要があると考えられる。しかし, そのような知見は報告されていない。

### ゴミのポイ捨て行動

先行研究において, Dark Triad の中でもサイコパシー傾向は最も反社会的行動と関連が確かめられてきた (Furnham et al., 2013)。また, 他者評定においても最も社会的に望ましくない特性であると評価されることが報告されている (Rauthmann & Kolar, 2012)。これらの知見は, Dark Triad の統合モデルにおけるサイコパシー傾向の「社会逸脱」を支持するものである。

これまでの Dark Triad におけるサイコパシー傾向と反社会的行動との関連を確かめた知見は, 前述したように教育場面, インターネット場面, 職場における反社会的行動の知見である。しかし, Dark Triad の統合モデルにおけ

るサイコパシー傾向の「社会逸脱」を検討する上では、これらの場面における反社会的行動の検討だけでは不十分であると考えられる。たしかにこれらの先行研究ではポジティブな切迫性に関する欲求充足に基づく「社会逸脱」は支持されているものの、ネガティブな切迫性に関する欲求充足については、十分な検討がなされていない。Dark Triad の統合モデルを検討する上で、サイコパシー傾向のネガティブな切迫性に関しても検討する必要がある。

ネガティブな切迫性に基づく「社会逸脱」に関しては様々なものが想定されるが、ここではゴミのポイ捨て行動に着目したい。「ゴミのポイ捨て」とはゴミ箱以外の場所に少数のゴミを捨てることと定義される (Krauss, Jonathan, Freedman, & Whitcup, 1978)。ゴミを所持していることは一般にネガティブな切迫性が喚起されやすい状態であると考えられ、サイコパシー傾向の「社会逸脱」がネガティブな切迫性も含んだ概念であるとするれば、ゴミのポイ捨てとの関連も検討することで、Dark Triad の統合モデルのサイコパシー傾向の部分についてその妥当性を検討することができると考えられる。

### ライフスキル

Dark Triad の中でもサイコパシー傾向やマキャベリアニズムは他者から望ましくないと評定される傾向にあり、その反対に自己愛傾向は他者から望ましいと評定されやすいことが報告されている (Rauthmann & Kolar, 2012)。この知見は、Dark Triad の統合モデルにおけるサイコパシー傾向の「社会逸脱」、マキャベリアニズムの「攻撃的防衛」、自己愛傾向の「感じの良さ」を間接的に支持するものであり、それぞれの行動の結果、他者から社会的に望ましい・望ましくないと評定されるようになると考えられる。

しかし、その社会的望ましさに至る具体的な行動傾向については、あまり検討されていない。社会適応に関わる行動指標としては様々なものが挙げられるが、広く一般に社会適応に関わる行動指標として、日常生活におけるライフスキルが挙げられる。ライフスキルとは「日常生活で生じるさまざまな

問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」(World Health Organization, 1994 川畑・高石・西岡・石川・JKYB 研究会訳 1997) を指す概念であり、内在化問題に関わる様々な社会適応性指標の高さとの関連性が報告されている (島本・石井, 2006)。

Dark Triad の統合モデルにおけるサイコパシー傾向の「社会逸脱」、マキャベリアニズムの「攻撃的防衛」、自己愛傾向の「感じの良さ」を、社会適応性の観点から検討する上で、その適応に至る具体的な行動傾向との関連を検討することが必要である。しかし、Dark Triad の行動的側面についてライフスキルの観点からそれぞれの相違点を検討した研究は未だみられない。

### コーピングスタイル

コーピングとは、個人的に重大で、それに対処するために個人の資源に重い負担をかけたりそれを超過したりすると評価された状況において展開される一過程を指す概念である (Lazarus & Folkman 1984; Folkman & Moskowitz, 2004)。このようにコーピングはストレス対処の一過程であるがゆえに状況に応じて様々な仕方で顕現化されるが、その状況に対する主観的評価の側面がコーピングには含まれているがゆえに、また、パーソナリティ特性に応じて直面するストレス状況が変わってくるがゆえに (Carver & Connor-Smith, 2010)、パーソナリティ特性はそれぞれに応じたコーピングスタイルと関連することが考えられる (Carver & Connor-Smith, 2010)。

Dark Triad との関連においては、前述したように全体として自己愛傾向が問題焦点型対処、情動焦点型対処と正の関連を示し、マキャベリアニズムおよびサイコパシー傾向は問題焦点型対処と負の関連、情動焦点型対処と正の関連を示すことが報告されている。このような関連性は Dark Triad の統合モデルにおける自己愛傾向の「感じの良さ」およびサイコパシー傾向の「社会逸脱」を支持するものであるが、マキャベリアニズムの「他者操作」とは整合的であるとは言い難い。Dark Triad の統合モデルにおいては、マキャベリ

アニズムの「他者操作」は長期的な利益を享受するためにストレスに対して戦略的に対処することが考えられる。

このように先行研究の知見と Dark Triad の統合モデルの不整合があるために、Dark Triad の統合モデルにおける自己愛傾向の「感じの良さ」、サイコパシー傾向の「社会逸脱」、マキャベリアニズムの「他者操作」の妥当性について改めてコーピングスタイルとの関連を検討する必要がある。特に、コーピングスタイルは Lazarus & Folkman (1984) による問題焦点型対処と情動焦点型対処の分類だけでなく、より詳細な次元に分けることもできる (Krägeloh, 2011)。例えば、Brief COPE というコーピング尺度では、コーピングスタイルを 15 下位尺度 (「気晴らし」、「積極的コーピング」、「否認」、「アルコール、薬物使用」、「情緒的サポートの利用」、「道具的サポートの利用」、「行動的諦め」、「感情表出」、「肯定的再解釈」、「計画」、「ユーモア」、「受容」、「宗教・信仰」、「自己非難」) で測定することができる。このような詳細な次元の水準で Dark Triad との関連を検討することによって、Dark Triad の統合モデルについて仔細に検討することが可能になると考えられる。

#### Dark Triad の測定尺度

以上のような問題を解決するためには、Dark Triad を同時に測定し、Dark Triad のそれぞれの独自の関連を検討することが必要である。我が国では、Dark Triad を短い項目数で簡便に測定する尺度として日本語版 DTDD (DTDD-J; 田村・小塩・田中・増井・ジョナソン, 2015) が作成されている。しかし、DTDD には批判がなされていることは前述した通りである。また、DTDD-J 以外の個々の Dark Triad 尺度を用いようとした際には例えば自己愛傾向尺度として Narcissistic Personality Inventory-Short version (NPI-S; 小塩, 1998)、サイコパシー傾向尺度として日本語版 Levenson Self-Report Psychopathy Scale (LSRP; 杉浦・佐藤, 2005)、マキャベリアニズム尺度として日本語版 Mach-IV (中村他, 2012) を使用した場合には、NPI-S が 30 項目、LSRP が 26 項目、日

本語版 Mach-IV が 20 項目であるため、総計で 76 項目が必要となり、海外に比べてれば簡便に測定できるものの、項目数の多さにより調査に制約がかかることが考えられる。その上、Mach-IV 自体に対する批判 (Jones & Paulhus, 2009) も看過できない問題である。以上の点から、日本語版 SD3 を作成する必要があると考えられる。しかし、未だ日本語版 SD3 は作成されていない。

## 第 2 節 全体の目的

前節では Dark Triad の統合モデルの妥当性を検討する上で、「他者操作方略」、「対人葛藤方略」、「攻撃性」、「ゴミのポイ捨て行動」、「ライフスキル」、「コーピングスタイル」、「Dark Triad の測定尺度」といった領域に問題点があることを指摘した。「Dark Triad の測定尺度」以外の問題点は Dark Triad の統合モデルにおける行動的側面に関わるものである。本研究では Dark Triad の統合モデルにおける行動的側面を検討することを全体の目的とする。

第六章 (研究 1, 2) では、Dark Triad を測定する簡便な尺度として代表的な Short Dark Triad を邦訳して日本語版尺度を作成し、その妥当性を検討することを目的とする。そしてその日本語版尺度を用いて第七章 (研究 3, 4), 第八章 (研究 5, 6), 第九章 (研究 7, 8) においてそれぞれ Dark Triad の対人方略, 反社会性, 社会適応性について検討し、Dark Triad の統合モデルにおける行動的側面の検討を行うことを目的とする。Dark Triad の統合モデルが妥当なモデルであるとするれば予測されるような関連が実際に確かめられるかどうかを、各研究で検討する。まとめると、研究 3~8 は Dark Triad の統合モデルにおいて Figure 5-1 に示すように位置づけられる。

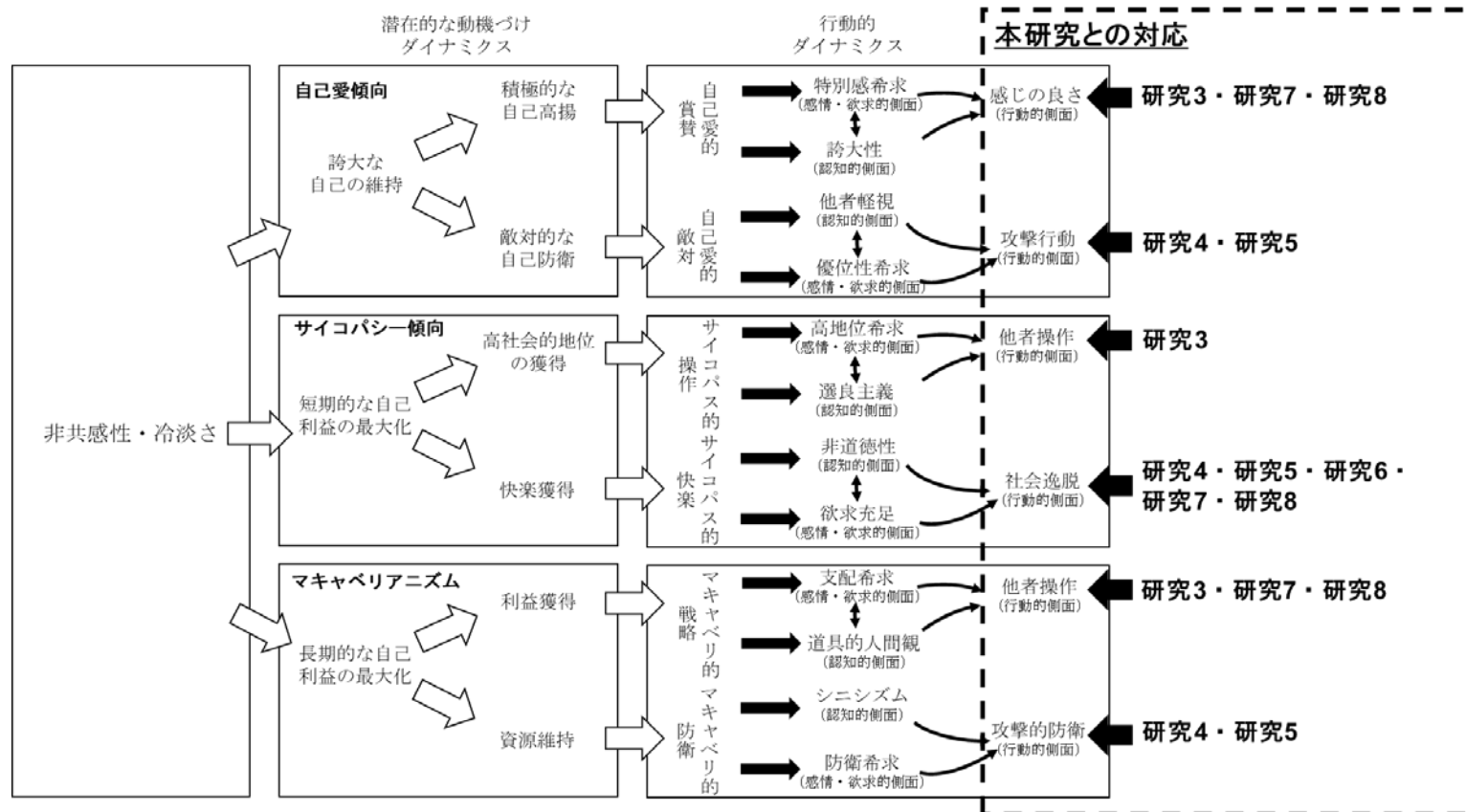


Figure 5-1. Dark Triad の統合モデルの一部と本研究との対応



## 第六章 Dark Triad の測定尺度の開発

本章では、Jones & Paulhus (2014) によって作成された、Dark Triad の 3 特性を十分かつ簡便に測定することが示されている Short Dark Triad (SD3) を作成することを目的とする。SD3 はマキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向を各 9 項目、全 27 項目で測定する尺度であり、その信頼性・妥当性が繰り返し確認されている (Jones & Paulhus, 2014; Maples et al., 2014)。第 1 節：研究 1 では、SD3 の項目を邦訳した上で調査を行い、SD3-J の因子構造について検討を行う。第 2 節：研究 2 では、SD3-J の信頼性および妥当性について、DTDD-J や標準的な Dark Triad 尺度を用いて検討を行う。

### 第 1 節 研究 1: SD3-J の因子構造の検討<sup>3</sup>

#### 目的

研究 1 の目的は、SD3 の項目を日本語に翻訳し、その因子構造を検討することである。Dark Triad の因子構造としては、田村他 (2015) と同様に、Dark Triad の 1 次元的な因子を仮定する 1 因子モデル、Dark Triad の 3 次元のそれぞれの因子とその因子間相関を仮定する 3 因子間相関モデル、一般因子とグループ因子をそれぞれ仮定する階層因子モデルが想定される。このそれぞれに対して確認的因子分析を用いて比較検討することで、SD3-J の因子構造を検討する (Figure 6-1)。Dark Triad は前述したように全体に共通する因子とそれぞれに独自の特徴があると考えられるため、3 因子間相関モデル、もしくは、階層因子モデルの適合度が高くなることが予想される。

---

<sup>3</sup> 研究 1 の内容は下司忠大・小塩真司 (2017). 日本語版 Short Dark Triad (SD3-J) の作成 パーソナリティ研究, 26, 12-22. に採録されたものの一部である。

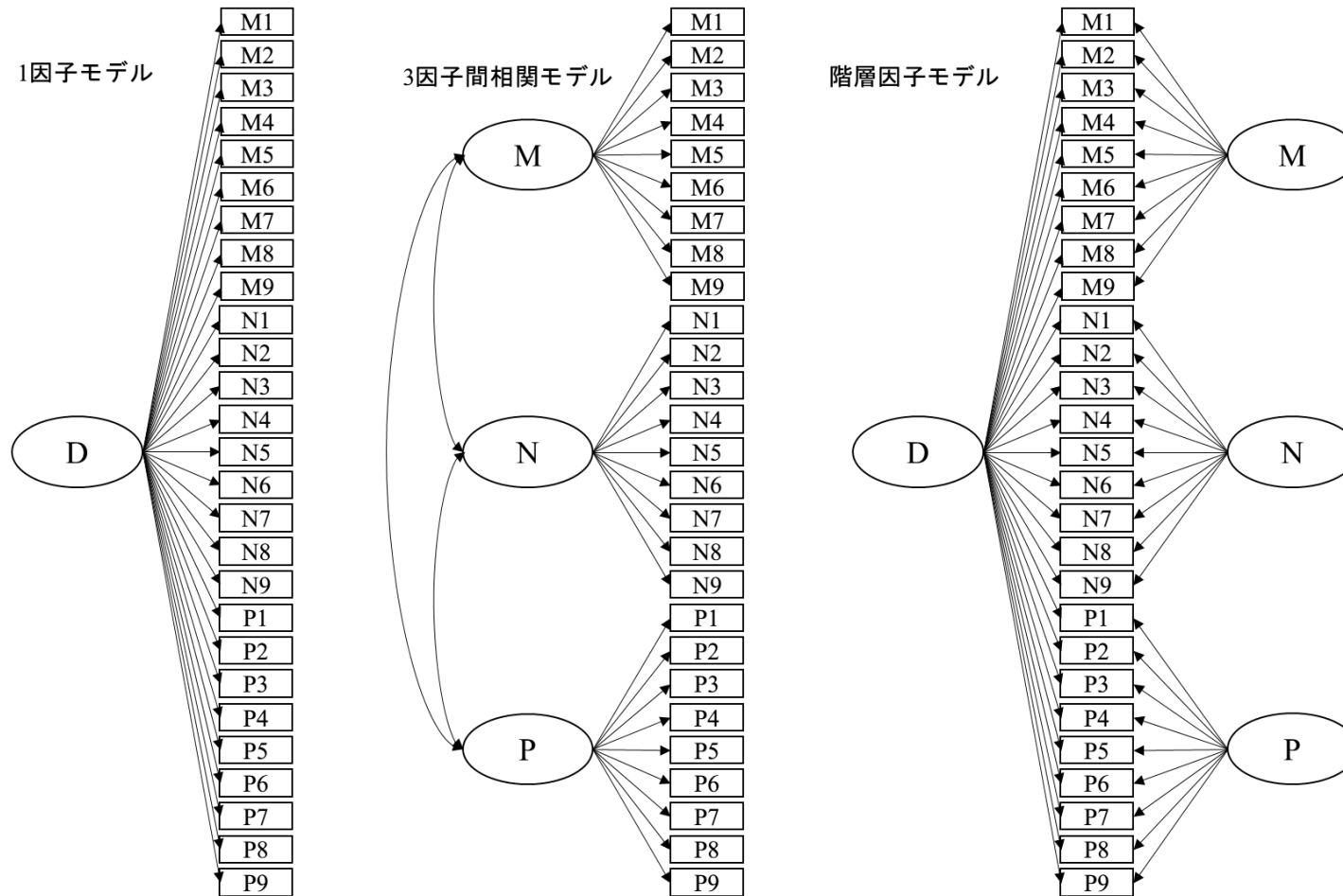


Figure 6-1. Dark Triad の因子構造のモデル

注) D = Dark Triad の共通因子, M = マキャベリアニズム, N = 自己愛傾向, P = サイコパシー傾向

## 方法

### 手続き

大学の講義終了後に集団に質問紙を配布し、回答を求めた。調査時期は2015年2月であった。なお、本研究は早稲田大学の「人を対象とする研究に関する運営委員会」による倫理審査の承認を得て行われたものである。

### 調査対象者・分析対象者

調査対象者は大学生456名であった。そのうち、欠損項目のない436名（男性163名、女性273名）が分析対象者となった。平均年齢は19.95歳（ $SD = 1.49$ ）であった。

### 使用尺度

Jones & Paulhus (2014) によって作成されたSD3を、心理学専攻の大学院生3名の意見を参考にしつつ日本語に翻訳して用いた。項目内容をTable 6-1に示す。訳語に関しては10-20名程度を対象とした予備調査を4回実施し、その都度表現の修正を行い訳出した。その後、日英両言語に堪能な日本人1名によるバックトランスレーションを行った。そのバックトランスレーションの項目内容が、原版の尺度の項目の意味内容と概ね同等の内容であることを、原著者であるDelroy L. Paulhusが確認した。項目数は全27項目であり、Dark Triadの各3次元の項目数はそれぞれ9項目である。「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの5件法で回答を求めた。

## 結果

Table 6-1. SD3-J の項目内容

**マキャベリアニズム**

1. 他の誰かに自分の秘密を教えないということは賢明なことだ
2. 自分の思い通りになるように、賢く周りの人々を扱いたい
3. とにかく、重要な人物は自分の味方に付けておいたほうが良い
4. 将来その人が自分の役に立つかもしれないので、人との直接の争いは避けるようにしている
5. 後になって誰かに対して利用できるような情報に目を配っておくことは賢明なことだ
6. 誰かに復讐するなら、それに最適な時が来るまでじっと待つべきだ
7. 自分の良い評判を守るために、他の人に秘密にしなければならないことがある
8. 自分の計画が、他の誰かの利益ではなく自分の利益になるように取り計らっている
9. ほとんどの人々は簡単に踊らされたり、操られたりしてしまうものだ

**自己愛傾向**

1. 周りの人は私を生まれながらのリーダーだと思っている
2. 私は注目の的になることが嫌いだ (\*)
3. 私なしではグループの多くの活動が滞ってしまう
4. 周りの人がそう言っているので私は特別な人間なのだと思う
5. 私は地位の高い重要な人物と親しくなるのを好んでいる
6. 私は褒められると恥ずかしくなってしまう (\*)
7. 私はこれまでに著名な人物にたとえられたことがある
8. 私は平均的でたいしたことのない人間だ (\*)
9. 私は自分が受けるに値する尊敬を集めるべき人間だ

**サイコパシー傾向**

1. 私は目上の人に仕返しや報復をしたいと思うことがある
2. 私は物騒な状況に飛び込むようなことはしない (\*)
3. 報復は、即座に、冷酷に行うものだ
4. 私は他人からよく手に負えないと言われる
5. 私は他人につらく当たっても平気だというのが実際のところだ
6. 私をからかう者はいつまでもその行為を後悔することになる
7. 私は人に迷惑をかけるような問題を起こしていない (\*)
8. 私は後先考えずに、ほとんど知らない異性と関係を持つのを楽しむことがある
9. 私は誰に何を言っても、欲しいものを手に入れる

(\*) は逆転項目を表す。

日本語に翻訳された SD3 の各項目の記述統計量を Table 6-2 に示す。なお、逆転項目の平均値は逆転後の得点を用いて算出している。これらの項目に対して、1 因子モデル、3 因子間相関モデル、階層因子モデルの 3 モデルに対して確認的因子分析を行った。推定法は最尤法を用いた。分析に際しては、修正指標と項目内容を参考にマキャベリアニズムの項目 3 と自己愛傾向の項目 5 (M3-N5)、自己愛傾向の項目 1 と項目 3 (N1-N3)、サイコパシー傾向の項目 1 と項目 3 (P1-P3) の誤差間に相関を仮定して分析を行った。M3-N5 は「重要な人物」、P1-P3 は「報復」という同じ語句を用いた 2 項目のペアであり、N1-N3 はどちらもグループを主導する人物として優れているかどうかを表す項目であるため、これらの誤差間に相関を仮定することは理論的に妥当であると判断された。その分析結果を Table 6-3 に示す。

それぞれのモデルの妥当性を比較検討するために、各モデルの適合度および情報量基準を算出した。適合度・情報量基準はそれぞれ、1 因子モデル:  $\chi^2 = 1393.45$  ( $df = 321$ ,  $p = .000$ ), RMSEA = .09, CFI = .50, SRMR = .09, AIC = 32830.05, BIC = 33172.58, 3 因子間相関モデル:  $\chi^2 = 840.02$  ( $df = 318$ ,  $p = .000$ ), RMSEA = .06, CFI = .76, SRMR = .07, AIC = 32282.62, BIC = 32637.37, 階層因子モデル:  $\chi^2 = 703.57$  ( $df = 294$ ,  $p = .000$ ), RMSEA = .06, CFI = .81, SRMR = .06, AIC = 32194.18, BIC = 32646.80 であった。

### 考察

研究 1 では Jones & Paulhus (2014) によって作成された Dark Triad を簡便に測定する尺度である Short Dark Triad を日本語に翻訳し、その因子構造の検討を行った。SD3-J の因子構造を検討するために確認的因子分析を行った結果、AIC・BIC の値から 1 因子モデルよりも 3 因子間相関モデル、階層因子モデルの方が望ましいモデルであることが示唆された。

Table 6-2. SD3-J の各項目の記述統計量

項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	最小値	最大値	尖度	歪度
M1	3.65	0.93	1.00	5.00	-0.57	-0.11
M2	3.22	1.04	1.00	5.00	-0.16	-0.89
M3	3.85	0.92	1.00	5.00	-0.77	0.26
M4	3.37	1.04	1.00	5.00	-0.30	-0.73
M5	3.70	0.88	1.00	5.00	-0.71	0.11
M6	3.44	1.14	1.00	5.00	-0.46	-0.64
M7	3.69	1.01	1.00	5.00	-0.85	0.25
M8	2.89	1.00	1.00	5.00	0.14	-0.46
M9	3.32	1.03	1.00	5.00	-0.27	-0.60
N1	1.83	0.85	1.00	5.00	0.94	0.60
N2	2.83	1.10	1.00	5.00	0.03	-0.82
N3	2.19	0.93	1.00	5.00	0.66	0.08
N4	2.08	0.90	1.00	5.00	0.73	0.13
N5	2.66	1.11	1.00	5.00	0.34	-0.66
N6	2.41	1.01	1.00	5.00	0.57	-0.39
N7	2.16	1.06	1.00	5.00	0.84	0.04
N8	2.52	1.06	1.00	5.00	0.47	-0.42
N9	2.21	0.88	1.00	5.00	0.50	-0.02
P1	2.71	1.29	1.00	5.00	0.23	-1.18
P2	2.31	1.02	1.00	5.00	0.77	0.04
P3	2.71	1.06	1.00	5.00	0.24	-0.59
P4	2.29	1.10	1.00	5.00	0.69	-0.36
P5	2.37	1.08	1.00	5.00	0.56	-0.48
P6	2.38	0.98	1.00	5.00	0.60	-0.03
P7	3.21	1.13	1.00	5.00	0.03	-1.03
P8	1.84	1.06	1.00	5.00	1.23	0.72
P9	2.17	1.04	1.00	5.00	0.81	0.13

注) M = マキャベリアニズム; N = 自己愛傾向; P = サイコパシー傾向

Table 6-3. SD3-J における各モデルの因子負荷量

項目	1因子モデル	3因子間相関 モデル			階層因子 モデル			
	D	M	N	P	D	M	N	P
M1	.08	.35			.05	.44		
M2	.49	.66			.39	.52		
M3	.35	.54			.31	.48		
M4	.18	.38			.17	.39		
M5	.25	.49			.13	.55		
M6	.25	.40			.26	.30		
M7	.32	.46			.31	.34		
M8	.46	.56			.48	.33		
M9	.29	.34			.34	.15		
N1	.44		.56		.25		.50	
N2	.25		.42		-.02		.51	
N3	.40		.50		.26		.42	
N4	.53		.73		.33		.63	
N5	.49		.45		.33		.34	
N6	.09		.23		-.07		.31	
N7	.31		.45		.14		.43	
N8	.34		.48		.09		.51	
N9	.51		.67		.31		.59	
P1	.36			.40	.40			.11
P2	.17			.21	-.07			.91
P3	.31			.40	.40			.04
P4	.49			.61	.53			.28
P5	.34			.44	.44			.14
P6	.49			.56	.53			.13
P7	-.03			-.02	-.09			.24
P8	.36			.39	.34			.19
P9	.50			.59	.54			.18
誤差相関								
M3-N5	.25		.33			.32		
N1-N3	.36		.27			.28		
P1-P3	.23		.18			.17		
因子間相関								
			N	P				
		M	.20	.48				
		N		.48				

注) D = Dark Triadの共通因子; M = マキャベリアニズム; N = 自己愛傾向; P = サイコパシー傾向



3 因子間相関モデル, 階層因子モデルの適合度指標を確認すると, CFI は.76 および.81 と低い値を示した。ただし, RMSEA と SRMR は許容範囲の値を示したことから, 総合的にみて 3 因子間相関モデル, 階層因子モデルの適合度は許容範囲であると考えられる。また, 因子負荷量に注目すると, サイコパシー傾向の項目 2, 項目 7 はどのモデルにおいても著しく低い値を示し, 階層因子モデルでは, マキャベリアニズムの項目 9 やサイコパシー傾向の項目 1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9 が, 各グループ因子に対して著しく低い負荷量を示した。この点に関して, これらの項目は階層因子モデルにおいて Dark Triad の一般因子に多く寄与しており, Dark Triad の中核となる項目として解釈できる。また, この点については, 先行研究ではこれらの項目がグループ因子に対して低い因子負荷量を示した知見もあるため (Persson, Kajonius, & Garcia, 2019; Zhang, Ziegler, & Paulhus, 2019), SD3-J の因子構造については, 大規模な国際比較研究によってその普遍性を検討することが必要である。

本研究の結果から, SD3-J が作成され, 理論的に想定される Dark Triad の構造と同様の因子構造が確認された。結果として, 3 因子間相関モデルと階層因子モデルのどちらも選択可能なモデルであることが示された。次節では, この SD3-J の信頼性および妥当性についての検討を行う。

## 第 2 節 研究 2: SD3-J の信頼性・妥当性の検討<sup>4</sup>

### 目的

研究 2 の目的は, 研究 1 で作成された SD3-J の信頼性および妥当性の検討を行うことである。まず, SD3-J の併存的妥当性・弁別的妥当性の確認をす

---

<sup>4</sup> 研究 2 の内容は下司忠大・小塩真司 (2017). 日本語版 Short Dark Triad (SD3-J) の作成 パーソナリティ研究, 26, 12-22. に採録されたものの一部である。

るために、SD3-J と DTDD-J および標準尺度との関連の検討を行う。先行研究 (Jones & Paulhus, 2014) と同様に、SD3-J の各尺度はその次元に対応する標準尺度との間に高い正の相関を示すことが予測され、SD3-J の各尺度とその次元に対応しない標準尺度との相関は SD3-J の各尺度と対応する標準尺度との相関よりも低くなることが予測される。

更に、SD3-J が DTDD-J と比較して Dark Triad の各概念の特徴を十分に捉えきれているかどうかを検討するために、DTDD-J の下位次元の 1 つを統制した時の、その次元における SD3-J の各尺度と標準尺度との偏相関を検討する。SD3-J が標準尺度との間に十分な正の偏相関を示すならば、SD3-J が DTDD-J の得点では説明されない標準尺度の得点の分散の多くを説明していると考えられる。先行研究 (Maples et al., 2014) から、SD3-J は標準尺度との間に高い正の偏相関を示すことが予測される。

本研究では SD3-J の妥当性の根拠として Dark Triad の性差にも注目して検討を行う。Dark Triad のそれぞれの得点は女性よりも男性の方が高いことが複数報告されている (e.g., Jones & Paulhus, 2014)。Dark Triad はいずれも他者への共感性が低く搾取性の高い特性であり、複数の恋愛パートナーを持つ、遊び的な恋愛をするなどの行動傾向を共通して持つことが示されている (e.g., Jonason, Li, Webster et al., 2009)。このような Dark Triad の行動傾向は、潜在的繁殖率に差がある男性と女性において、女性に比べて男性の方に進化的に有利に働くと考えられることから、Dark Triad に性差があることが考えられる (e.g., Jonason et al., 2013)。したがって SD3-J の各尺度の得点は、男性の方が女性よりも高くなることが予測される。

## 方法

### 手続き

手続きは研究 1 と同一のものであった。

### 調査対象者・分析対象者

調査対象者は、研究1の調査対象者のうちの370名、および190名であった。370名はSD3-Jに加えてDTDD-Jにも回答した回答者であり、いずれの項目にも欠損のない353名（男性126名、女性227名）が分析対象者となった。353名の平均年齢は20.12歳（ $SD = 1.57$ ）であった。更に、調査対象者のうち190名がSD3-J、DTDD-Jに加えてMach-IV、NPI-35、LSRPにも回答し、いずれの項目にも欠損のない189名（男性83名、女性106名）が分析対象者となった。189名の平均年齢は19.76歳（ $SD = 1.10$ ）であった。

### 使用した尺度

**SD3-J** 研究1において作成されたSD3-Jを用いた。項目数は全27項目であり、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向をそれぞれ9項目で測定する尺度である。「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの5件法で回答を求めた。

**DTDD-J** SD3-Jの妥当性検討および妥当性の比較を行うために、DTDD (Jonason & Webster, 2010) の日本語版であるDTDD-J (田村他, 2015) を用いた。DTDD-Jは田村他 (2015) によって原版と同等の信頼性・妥当性が確認された尺度である。マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向を4項目ずつで測定するものであり、全12項目で構成される。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法で回答を求めた。

**Mach-IV** 既存のマキャベリアニズム尺度として、先行研究でSD3の妥当性検証に用いられたMach-IV (Cristie & Geis, 1970) の日本語版 (中村他, 2012) を用いた。日本語版Mach-IVは中村他 (2012) によって信頼性と妥当性が確認された尺度であり、全20項目で構成される。「全くそう思わない」から「全くその通りだと思う」の7件法で回答を求めた。

**NPI-35** 既存の自己愛傾向尺度として、先行研究で SD3 の妥当性検証に用いられた NPI (Raskin & Hall, 1979) の日本語版である自己愛人格傾向尺度 (NPI-35: 小西・大川・橋本, 2006) を用いた。NPI-35 は小西他 (2006) によって信頼性と妥当性が確認された尺度であり、注目欲求、誇大性、主導性、身体賞賛、自己確信の 5 下位尺度、全 35 項目で構成される。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの 6 件法で回答を求めた。

**LSRP** 既存のサイコパシー傾向尺度として、LSRP (Levenson, Kiehl, & Fitzpatrick, 1995) の日本語版尺度 (杉浦・佐藤, 2005) を用いた。日本語版 LSRP は大隅・金山・杉浦・大平 (2007) によって信頼性と妥当性が確認された尺度であり、一次性サイコパシー、二次性サイコパシーの 2 つの下位尺度で構成される。大隅他 (2007) において除外項目となった 5 項目を除いた 21 項目で構成される尺度を用い、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 4 件法で回答を求めた。また、LSRP の二次性サイコパシーに関しては信頼性と妥当性の両面で問題点が指摘されている (大隅他, 2007)。そのため本研究ではその点も考慮し、分析および考察を行う。

## 結果

### 信頼性係数と得点の性差

各尺度の記述統計量 (全体, 男性, 女性) と  $\alpha$  係数の値, および性差を検討した結果を Table 6-4 に示した<sup>5</sup>。SD3-J の信頼性を検討するために  $\alpha$  係数

---

<sup>5</sup> 研究 1 においてサイコパシー傾向の項目 7 は著しく低い因子負荷量を示した。そこで、独立変数として step 1 に SD3-J のサ項目 7 以外の項目, step 2 に SD3-J のサイコパシー傾向の全項目を投入して LSRP 得点を予測する階層的重回帰分析を行った。その結果, step 2 におけるサイコパシー傾向の項目 7 は, LSRP の得点を有意に予測していた ( $\beta = .15, \Delta R^2 = .02, p < .05$ )。したがってこの項目は, 妥当性の観点からは必要な項目であるといえる。以降の分析結果はサイコパシー傾向の項目 7 を含めて各得点を算出し, 検討を行ったものである。

を算出したところ、マキャベリアニズムの  $\alpha$  係数は.72、自己愛傾向の  $\alpha$  係数は.73、サイコパシー傾向の  $\alpha$  係数は.65 を示し、いずれも許容範囲の値を示した。その他の尺度の  $\alpha$  係数については、先行研究と同等の値を示した。以上の結果を踏まえ、各尺度の項目平均を算出し、以降の分析に用いた。

各尺度の得点の男女差を検討するために、全ての尺度得点に対して  $t$  検定を行った結果、SD3-J に関してはマキャベリアニズム ( $t = 3.60, p < .001, d = 0.36$ ) とサイコパシー傾向 ( $t = 4.10, p < .001, d = 0.41$ ) において、有意に男性の方が女性よりも得点が高いことが示された。また、DTDD-J でもマキャベリアニズム ( $t = 2.70, p < .01, d = 0.30$ ) とサイコパシー傾向 ( $t = 2.76, p < .01, d = 0.29$ ) において、有意に男性の方が女性よりも得点が高いことが示された ( $n = 357$ )。標準尺度では、自己愛傾向 ( $t = 2.68, p < .01, d = 0.39$ ) とサイコパシー傾向 ( $t = 3.39, p < .001, d = 0.50$ ) において、有意に男性の方が女性よりも得点が高いことが示された ( $n = 189$ )。標準尺度の下位尺度については、誇大感 ( $t = 0.42, p < .001, d = 0.52$ ) と自己確信 ( $t = 0.36, p < .001, d = 0.50$ )、一次性サイコパシー ( $t = 0.23, p < .001, d = 0.56$ ) において、有意に男性の方が女性よりも得点が高いことが示された。

#### 相関・偏相関

SD3-J の併存的妥当性および弁別的妥当性を検討するために、SD3-J の尺度間相関、および DTDD-J との相関関係を算出し、Table 6-5 に示した。その結果、同概念間の相関係数は.41 から.50 であり、別概念間の相関係数は.05 から.57 であった。概ね同概念間の相関係数の方が別概念間の相関係数に比べて高い値を示し、SD3-J の併存的妥当性・弁別的妥当性が支持された。SD3-J の併存的妥当性・弁別的妥当性、および増分妥当性について更に検討を行うために、SD3-J、DTDD-J と標準尺度との相関係数および偏相関係数を Table 6-6 に示した。ここでの偏相関係数は、DTDD-J (SD3-J) の各尺度を統制した時の SD3-J (DTDD-J) の各尺度と標準尺度との偏相関係数である。例えば、

Table 6-4. 各 Dark Triad 尺度の記述統計量,  $\alpha$  係数, 性差

	$\alpha$	$n$	$M$	$SD$	男性			女性			男女差		
					$n$	$M$	$SD$	$n$	$M$	$SD$	$t$	$df$	$p$
<b>SD3-J</b>													
マキャベリアニズム	.72	436	3.46	0.55	163	3.58	0.53	273	3.39	0.55	3.60	434	<.000
自己愛傾向	.74	436	2.33	0.57	163	2.38	0.62	273	2.30	0.54	1.42	434	.157
サイコパシー傾向	.63	436	2.44	0.55	163	2.58	0.57	273	2.36	0.52	4.10	434	<.000
<b>DTDD-J</b>													
マキャベリアニズム	.83	353	2.73	0.86	126	2.90	0.87	227	2.63	0.83	2.86	351	.004
自己愛傾向	.75	353	3.11	0.84	126	3.16	0.85	227	3.08	0.83	0.84	351	.402
サイコパシー傾向	.57	353	2.66	0.69	126	2.79	0.73	227	2.58	0.67	2.71	351	.007
Mach-IV	.71	189	4.32	0.54	83	4.43	0.58	106	4.24	0.49	2.43	187	.016
NPI-35	.93	189	2.86	0.68	83	3.01	0.71	106	2.75	0.64	2.68	187	.008
注目欲求	.87	189	3.30	0.89	83	3.40	0.82	106	3.22	0.94	1.41	187	.159
誇大感	.86	189	2.44	0.83	83	2.67	0.89	106	2.25	0.74	3.58	187	<.000
主導性	.87	189	2.71	0.82	83	2.80	0.92	106	2.64	0.73	1.25	187	.212
身体賞賛	.83	189	2.18	1.02	83	2.33	1.14	106	2.06	0.91	1.84	187	.068
自己確信	.59	189	3.37	0.75	83	3.57	0.81	106	3.21	0.65	3.39	187	<.000
LSRP	.75	189	2.30	0.35	83	2.39	0.33	106	2.22	0.35	3.39	187	<.000
一次性サイコパシー	.82	189	2.22	0.43	83	2.35	0.44	106	2.12	0.40	3.81	187	<.000
二次性サイコパシー	.52	189	2.50	0.44	83	2.51	0.42	106	2.49	0.46	0.22	187	.826

SD3-J の自己愛傾向と NPI-35 との偏相関係数を算出する場合、DTDD-J の自己愛傾向を統制することで算出した。SD3-J は標準尺度との関連において同概念間の相関係数は.47 から.81 であり、別概念間の相関係数は.08 から.49 であった。また、同概念間の偏相関係数は.31 から.72 であり、別概念間の偏相関係数は-.02 から.29 であった。SD3-J は標準尺度との関連においても、概ね同概念間の相関係数の方が別概念間の相関係数に比べて高い値を示し、また、同概念間の相関係数の値は統制した上でも DTDD-J に比べて大きな変動はみられなかった。以上の結果から、SD3-J の併存的妥当性・弁別的妥当性および増分妥当性が支持された。

### 考察

研究 2 では研究 1 で因子構造が確認された SD3-J の信頼性と妥当性の検討を行った。信頼性については  $\alpha$  係数を算出して検討を行った。また、妥当性については性差および DTDD-J、標準尺度との関連に基づき、併存的妥当性・弁別的妥当性・増分妥当性の観点から検討を行った。

#### SD3-J の信頼性

SD3-J の信頼性を確認するために SD3-J の各次元の  $\alpha$  係数を算出した結果、マキャベリアニズム、自己愛傾向は Jones & Paulhus (2014) の結果とほとんど同等の値を示した。いずれの  $\alpha$  係数 (.72, .73) も高い値とは言い難いが、複雑な概念を 9 項目で測定するという観点からは妥当な値であるといえる。

その一方で、サイコパシー傾向の  $\alpha$  係数は.65 であり、マキャベリアニズムや自己愛傾向とは異なり、先行研究 (Jones & Paulhus, 2014; Study 1:  $\alpha = .72$ , Study 2:  $\alpha = .73$ ) に比べて低い値を示した。ただし、SD3 を用いた先行研究の中には本研究で得られたサイコパシー傾向の  $\alpha$  係数と同程度の値を報告する

Table 6-5. SD3-J と DTDD-J との関連

	SD3-J			DTDD-J		
	M	N	P	M	N	P
SD3-J						
マキャベリアニズム	—					
自己愛傾向	.11 *	—				
サイコパシー傾向	.32 ***	.25 ***	—			
DTDD-J						
マキャベリアニズム	.51 ***	.30 ***	.57 ***	—		
自己愛傾向	.28 ***	.50 ***	.22 ***	.35 ***	—	
サイコパシー傾向	.26 ***	.05	.41 ***	.47 ***	.11 *	—

\*\*\*  $p < .001$ , \*  $p < .05$ , M = マキャベリアニズム; N = 自己愛傾向; P = サイコパシー傾向

Table 6-6. SD3-J および DTDD-J と標準尺度との関連

	SD3-J						DTDD-J					
	M		N		P		M		N		P	
	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>
Mach-IV	<b>.47</b> ***	<b>.31</b> ***	.08	-.02	<b>.40</b> ***	<b>.29</b> ***	<b>.43</b> ***	<b>.23</b> **	.17 *	.15 *	<b>.39</b> ***	<b>.27</b> ***
NPI-35	<b>.24</b> ***	.04	<b>.81</b> ***	<b>.72</b> ***	.23 **	.21 **	<b>.37</b> ***	<b>.30</b> ***	<b>.61</b> ***	<b>.32</b> ***	.11	.02
注目欲求	<b>.29</b> ***	.14	<b>.67</b> ***	<b>.45</b> ***	.22 **	.22 **	<b>.32</b> ***	.21 **	<b>.78</b> ***	<b>.65</b> ***	.07	-.03
誇大感	.18 *	-.02	<b>.75</b> ***	<b>.67</b> ***	.28 ***	.24 **	<b>.36</b> ***	<b>.31</b> ***	<b>.46</b> ***	<b>.06</b>	.17 *	.06
主導性	.13	-.06	<b>.76</b> ***	<b>.70</b> ***	.14	.13	<b>.32</b> ***	<b>.30</b> ***	<b>.43</b> ***	<b>.00</b>	.05	.00
身体賞賛	.06	-.07	<b>.46</b> ***	<b>.32</b> ***	.19 **	.16 *	.22 **	.22 **	<b>.39</b> ***	<b>.18</b> *	.09	.02
自己確信	.21 **	.15 *	<b>.36</b> ***	<b>.39</b> ***	.03	.00	.15 *	.04	<b>.08</b>	<b>-.16</b> *	.07	.07
LSRP	<b>.49</b> ***	<b>.26</b> ***	.23 **	.12	<b>.54</b> ***	<b>.43</b> ***	<b>.55</b> ***	<b>.38</b> ***	<b>.25</b> ***	.14	<b>.46</b> ***	<b>.31</b> ***
一次性サイコパシー	<b>.50</b> ***	<b>.27</b> ***	.31 ***	.22 **	<b>.55</b> ***	<b>.45</b> ***	<b>.57</b> ***	<b>.41</b> ***	.23 **	.07	<b>.42</b> ***	<b>.25</b> ***
二次性サイコパシー	.13	.07	-.10	-.21 **	<b>.17</b> *	<b>.08</b>	.13	.07	.13	.23 **	<b>.26</b> ***	<b>.21</b> **

注) M = マキャベリアニズム, N = 自己愛傾向, P = サイコパシー傾向; *pr* はもう一方のDark Triad尺度の同概念を統制した際の偏相関係数を表す。また, 太字は同概念の特性同士の相関係数を表す。\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$



ものもあり (Pailing, Boon, & Egan, 2014;  $\alpha = .67$ ), 総合的に判断してサイコパシー傾向の  $\alpha$  係数も許容範囲の値であると考えられる。SD3-J は各 9 項目で構成されている尺度であるが, SD3-J よりも少ない項目数 (i.e., 各 4 項目) で構成される DTDD-J に比べて  $\alpha$  係数が低い値を示した。この点については, DTDD が Dark Triad の概念の複雑さに反して同質性の高い項目群で構成されているために高くなったことが考えられる。例えば, DTDD のマキャベリアニズムを表す項目 1 と項目 4 はほとんど同一の項目であることが指摘されている (Maples et al., 2014)。

### SD3-J の妥当性

**マキャベリアニズム** SD3-J のマキャベリアニズムは, 原版と同様に男性の方が女性よりも得点が高いことが示され, Mach-IV との間に有意な正の相関及び正の偏相関を示した。以上の結果から SD3-J のマキャベリアニズムが原版と同方向の概念を測定していることが確認された。

ただし, Mach-IV との相関係数が比較的低い値を示した点や LSRP との相関係数が比較的高い値を示した点は, 原版の結果と整合性のない結果であった。また, DTDD-J も Mach-IV との相関係数は同程度に低く, LSRP との相関係数はそれよりも高い値を示した。この点については Mach-IV の日本語版尺度は英語版の尺度ほど妥当性の検討が十分になされているわけではないこともあり, 外部基準との関連を通して更に検討を行うことが必要である。

**自己愛傾向** SD3-J の自己愛傾向は原版と同様に NPI-35 との間に比較的高い正の相関及び正の偏相関を示し, LSRP, Mach-IV との間に比較的低い正の相関を示した。これらの結果から SD3-J の自己愛傾向が原版と同等の妥当性を有することが示された。ただし, 自己愛傾向においては性差が確認されなかった点は, 原版と異なる結果となった。この点について, NPI-35 において性差が確認されたのは誇大感と自己確信のみであり, SD3-J の自己愛傾向は自己確信との間に比較的低い相関係数を示していた。したがって原版と比較

して、SD3-J の自己愛傾向は自己確信の特徴を捉えきれていない可能性が考えられ、そのことが性差の結果に反映されたと考えられる。なお、SD3-J の自己愛傾向を統制しても DTDD-J の自己愛傾向は注目欲求と高い偏相関を示した。この点に関して、周囲から注目されたいという欲求は過敏型自己愛の重要な特徴のひとつであり (小塩, 2002), 前述したように DTDD は過敏型の自己愛傾向も測定しているという問題点がある。DTDD-J が DTDD の問題点を引き継いだことにより、自己愛傾向と注目欲求の偏相関が SD3-J の自己愛傾向を統制しても高い値を示したと考えられる。

**サイコパシー傾向** SD3-J のサイコパシー傾向は原版と同様に男性の方が女性よりも得点が高いことが示され、LSRP との間に有意な正の相関および正の偏相関が示された。また、Mach-IV や NPI-35 との間に LSRP との相関よりも低い相関を示した。以上の結果から、SD3-J のサイコパシー傾向が原版と同方向の概念を測定していることが示された。

その一方で、LSRP との相関係数が比較的低い点や、二次性サイコパシーとの間に有意な偏相関を示さなかった点は原版の結果と整合性のない結果であった。ただし、原尺度である SD3 と LSRP との関連が確かめられていないことや、LSRP の二次性サイコパシーには信頼性・妥当性の面で問題点があること (大隅他, 2007) を考慮すると、SD3-J の二次性サイコパシーの側面については今後外部基準との関連から総合的に判断することが必要である。

### 第 3 節 総合考察

研究 1 および研究 2 では、Dark Triad の 3 特性を十分、かつ簡便に測定することのできる Short Dark Triad を邦訳して SD3-J を作成し、その因子構造および信頼性・妥当性を検討した。本研究の結果から SD3-J が原版と同様の因子構造を有し、また、十分な信頼性を示した。妥当性についてはいくつかの検討課題が残されたものの、概ね許容範囲の妥当性が示された。

これまでの研究では Dark Triad の個々の特性の尺度は作成されていたが、それらを全て用いると項目数が過剰に多くなってしまいう問題点があった (Jonason & Middleton, 2015)。また、Dark Triad を簡便に測定する DTDD にも妥当性の点で問題が指摘されていた (e.g., Maples et al., 2014)。さらに、Mach-IV も理論的に想定されるマキャベリアニズムとズレがあることが指摘されていた (e.g., Jones & Paulhus, 2014)。本研究の結果から、DTDD-J に代わる簡便な Dark Triad 尺度として SD3-J が作成され、その因子構造および信頼性・妥当性が支持された。そこで、次章以降の研究においては、この SD3-J を用いて Dark Triad 概念モデルの妥当性に関する検討を行う。

## 第七章 Dark Triad と対人方略

前章では Dark Triad の日本語版尺度である SD3-J を作成した。これによって、Dark Triad の統合モデルの妥当性の検討が可能となった。本章では、Dark Triad の対人方略について検討を行うことを目的とする。Dark Triad はいずれも利己的な動機に基づいて対人行動を行う特性であり (Jones & Paulhus, 2010a), Dark Triad が高い者は自身の利益を最大化するために様々な方略を用いていることが示唆される。本章では対人方略として他者操作方略と対人葛藤方略に焦点をあてる。第 1 節：研究 3 では Dark Triad と他者操作方略の関連について、第 2 節：研究 4 では Dark Triad と対人葛藤方略との関連について検討を行うことで、Dark Triad の統合モデルの妥当性を検討する。

### 第 1 節 研究 3: Dark Triad と他者操作方略の関連<sup>6</sup>

#### 目的

研究 3 の目的は、Dark Triad と寺島・小玉 (2004) のモデルにおける他者操作方略との関連を検討することである。Dark Triad の統合モデルに基づけば、マキャベリアニズムが高い者は長期的な利益を最大化させるために自身の評判のコントロールを含めたあらゆる他者操作方略を行うことが考えられる (マキャベリアニズムの「他者操作」に対応)。そのため、マキャベリアニズムは Dark Triad を互いに統制しても全ての他者操作方略と正の関連が示されると考えられる。また、サイコパシー傾向が高い者も、マキャベリアニズムの場合と同様に自身の利益を最大化するために様々な他者操作方略を行うことが考えられる (サイコパシー傾向の「他者操作」に対応)。また、自己愛傾向に関しては、自己愛傾向が高い者はサイコパシー傾向やマキャベリアニズム

---

<sup>6</sup> 研究 3 の内容は、下司忠大・小塩真司 (2019). Dark Triad と他者操作方略との関連 パーソナリティ研究, 28, 119-127. に採録されたものを再分析したものである。

が高い者とは異なり、実利的な利益ではなく自己の誇大性を維持することを目標として他者を操作することが考えられる (Jones & Paulhus, 2010a) (自己愛傾向の「感じの良さ」に対応)。したがって、寺島・小玉 (2004) のモデルに依拠すれば、自己愛傾向が高い者は他者の行動的側面ではなく感情的側面を、優越的な立場から操作することが考えられる。そのため、自己愛傾向は自己優越的感情操作のみと正の関連が示されると考えられる。

## 方法

### 手続き

大学の講義終了後に集団に質問紙を配布し、回答を求めた。調査時期は2015年2月であった。なお、本研究は早稲田大学の「人を対象とする研究に関する運営委員会」による倫理審査の承認を得て行われたものである。

### 調査対象者・分析対象者

調査対象者は大学生 210 名であった。この内、デモグラフィック項目を除く、全項目に欠損のない 202 名 (男性 65 名, 女性 132 名, 不明 5 名) を分析対象者とした。平均年齢は 19.83 歳 ( $SD = 1.14$ ) であった。

### 使用尺度

**Dark Triad** Dark Triad の個人差を測定するために、研究 1, 2 で作成された日本語版 Short Dark Triad (SD3-J) を用いた。SD3-J について、5 件法 (「全くそう思わない (1 点)」 ~ 「非常にそう思う (5 点)」) で回答を求めた。

**他者操作方略** 他者操作方略を測定するために、寺島・小玉 (2004) のモデルに基づいて作成された他者操作方略尺度 (寺島・小玉, 2004) を用いた。他者操作方略尺度は自己優越的感情操作 6 項目 (項目例「ほめてもらおうとして自分の成功した話を大げさに言う」), 自己優越的行動操作 5 項目 (項目

例「ことわりなくくさせようとして都合がよいことを確認した後に頼み事をする」), 自己卑下的感情操作 5 項目 (項目例「相手に「そんなことないよ」と否定してもらおうとして自分を卑下する」), 自己卑下的行動操作 5 項目 (項目例「相手に仕事を代わってもらおうとして調子悪そうなふりをする」) の 4 尺度で構成される。他者操作方略尺度については, 6 件法 (「まったくしない (1 点)」 ~ 「よくする (6 点)」) で回答を求めた。

### 結果

各尺度の記述統計量,  $\alpha$  係数, 尺度間の相関係数を Table 7-1 に示した。 $\alpha$  係数がいずれも許容範囲の値を示したことを確認した上で, 各尺度の得点について項目平均を用いて算出し, 尺度間の相関係数を算出した。マキャベリアニズムとサイコパシー傾向は全ての他者操作方略と有意な正の相関を示し, 自己愛傾向は自己優越的感情操作のみと有意な正の相関を示した。下位尺度間の相関は, SD3-J はマキャベリアニズムとサイコパシー傾向, および自己愛傾向とサイコパシー傾向との間に有意な正の相関が示された。

Dark Triad の各特性が他の 2 特性を統制した上で他者操作方略とどのように関連するかを検討するために, 構造方程式モデリングを用いて検討を行った。Dark Triad の 3 特性から他者操作方略の 4 方略に対するパスを引き, Dark Triad の特性間と他者操作方略の誤差に共分散を仮定する飽和モデル (Figure 7-1) を設定し, 推定を行った。その結果を Table 7-2 に示す。マキャベリアニズムは全ての他者操作方略と有意な正の関連を示し, サイコパシー傾向は自己優越的行動操作, 自己優越的感情操作, 自己卑下的行動操作と有意な正の関連を示した。自己愛傾向は自己優越的感情操作との間に有意な正の関連を示した。なお, Dark Triad および誤差間の相関は全て正の相関を示した (Dark Triad 間:  $r_s = .12-.43$ , 誤差間:  $r_s = .60-.82$ )。

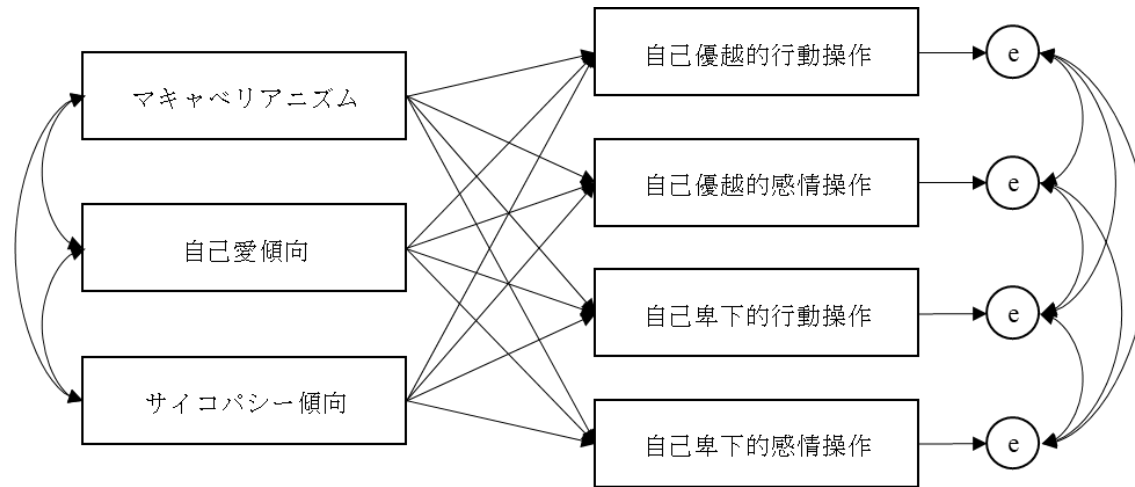


Figure 7-1. Dark Triad から他者操作方略へパスを引いたモデル



Table 7-1. Dark Triad と他者操作方略との相関

	1	2	3	4	5	6	7	M	SD
1. マキャベリアニズム	(.74)							3.40	0.57
2. 自己愛傾向	.06	(.73)						2.41	0.55
3. サイコパシー傾向	.21 **	.32 ***	(.67)					2.47	0.56
4. 自己優越的感情操作	.36 ***	.25 ***	.31 ***	(.88)				3.13	1.00
5. 自己卑下的感情操作	.39 ***	.09	.19 **	.73 ***	(.85)			2.99	0.98
6. 自己優越的行動操作	.47 ***	.11	.34 ***	.61 ***	.64 ***	(.82)		2.60	0.93
7. 自己卑下的行動操作	.36 ***	.07	.25 ***	.60 ***	.72 ***	.72 ***	(.85)	2.80	0.96

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

注) 括弧内の値は $\alpha$ 係数を表す。

Table 7-2. Dark Triad から他者操作方略への標準回帰係数

	マキャベリアニズム			自己愛傾向			サイコパシー傾向			$R^2$
	$\beta$	95%CI	$p$	$\beta$	95%CI	$p$	$\beta$	95%CI	$p$	
自己優越的感情操作	.31	[.18, .43]	<.001	.17	[.04, .30]	.010	.19	[.06, .32]	.005	.21 ***
自己卑下的感情操作	.36	[.23, .49]	<.001	.03	[-.10, .17]	.613	.11	[-.03, .24]	.126	.16 ***
自己優越的行動操作	.41	[.29, .53]	<.001	.01	[-.11, .14]	.833	.25	[.12, .37]	<.001	.28 ***
自己卑下的行動操作	.32	[.19, .45]	<.001	-.01	[-.14, .13]	.910	.19	[.05, .32]	<.001	.16 ***

\*\*\*  $p < .001$

## 考察

研究3では、寺島・小玉(2004)の枠組みを用いて、Dark Triadと他者操作方略との関連を検討した。Dark Triadの統合モデルに基づけば、Dark Triadを互いに統制した上で、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向は自己優越から自己卑下まで全ての他者操作方略と関連し、自己愛傾向は自己優越的感情操作と有意な正の関連を示すことが考えられた。本研究の結果は仮説を部分的に支持するものであり、Dark Triadを互いに統制した上で、マキャベリアニズムは全ての他者操作方略と、自己愛傾向は自己優越的感情操作と、サイコパシー傾向は自己優越的感情操作、自己卑下的感情操作、自己優越的行動操作とそれぞれ有意な正の関連を示した。

従来の知見では、マキャベリアニズムが高い者はハードな方略とソフトな方略を使って他者を操作していることが示されていた(Jonason & Webster, 2012)。本研究の結果から、マキャベリアニズムが高い者は、それらの方略に加えて自己の劣位性を主張するような方略を用いていることが示され、目的を達成する上であらゆる策を講じていることが示唆された。また、これまでの研究では、Dark Triadの他者の行動を操作する傾向性に焦点が当てられてきたが(e.g., Jonason & Webster, 2012)、本研究の結果からは、マキャベリアニズムが高い者が用いる他者操作方略には自分の評価を好意的に仕向けるような感情操作の方略も含まれていることが明らかにされ、その好意的に仕向ける方略としては自己の優位性を主張する方略と劣位性を主張する方略の両方略があることが示された。マキャベリアニズムの概念内容を踏まえると、このような感情操作についても自身の目的を達成するための手段のひとつ(e.g., 評判維持)としての他者操作であると考えられる。

自己愛傾向が高い者は先行研究においてソフトな他者操作方略を使って他者を操作していることが示されていた(Jonason et al. 2012)。本研究の結果は、

自己愛傾向が高い者はさらに他者の感情自体も操作していることを示すものであった。本研究の結果はこのように先行研究を拡張したものと捉えることもできるが、他方で先行研究の知見を再解釈させるものとも考えられる。具体的には、Jonason et al. (2012) では自己愛傾向が高い者のソフトな他者操作方略を示しているが、この他者操作方略は主に自己の誇大性を維持させるような感情操作の他者操作方略である可能性が考えられる。

先行研究において、サイコパシー傾向が高い者は強要や暴力などのハードな方略を使って他者を操作していることが示されていた (Jonason et al., 2012)。本研究の結果は、マキャベリアニズムと同様にハードな方略だけでなく自己の劣位性を主張するような行動操作への関連を示した点で、サイコパシー傾向が高い者の他者操作方略についてこれまでにない側面を示すものであった。臨床的な知見ではサイコパスはその共感性の低さから自身が追い込まれた際に空涙や同情を引くような操作方略を用いることが指摘されており (Stout, 2005)、この点がサイコパシー傾向に特徴的な自己卑下的行動操作であることが考えられる。また、従来の知見ではサイコパシー傾向は主に他者の行動を強制的に支配するような他者操作と関連が示されていた (Jonason et al., 2012; Jonason & Webster, 2012)。しかし、本研究の結果から、他者の感情についても優越的に操作することが示された。この点について、Babiak & Hare (2006) は、サイコパスはその共感性の低さから他者を平然と騙すことができ、他者と出会う場面や出会った後の操作段階においてうまく印象をコントロールして支配関係を築いていることを指摘している。このような他者操作がサイコパシー傾向に特徴的な自己優越的感情操作であることが考えられる。

ただし、サイコパシー傾向が自己卑下的感情操作と関連を示さなかった点は仮説を支持しない結果であった。寺島・小玉 (2004) のモデルにおいて、自己優越的および自己卑下的な行動の操作は他者を自分の都合の良いように操作するという利点があり、自己優越的感情操作は他者に自分の優越性を印象付けるといった利点がある。その一方で、自己卑下的感情操作は自分の劣位性

をアピールすることで将来的および長期的な他者からのケアを求めるものだと考えられる。このように、自己卑下的感情操作は将来的・長期的な他者からのケアを求めるために、短期的な利益を求めるサイコパシー傾向とは有意な関連を示さなかったことが考えられる。

本研究では Dark Triad の他者操作方略における相違点が示され、マキャベリアニズムやサイコパシー傾向がそれぞれ自己優越的行動操作、自己卑下的行動操作と独自に正に関連することが示された。また、Dark Triad の 3 特性はいずれも自己優越的感情操作と独自に正の関連を示し、マキャベリアニズムのみが自己卑下的感情操作と正の関連を示した。以上のように、Dark Triad の他者操作方略はそれぞれ異なることが示された。

## 第 2 節 研究 4: Dark Triad と対人葛藤方略

### 目的

研究 4 の目的は、Dark Triad と加藤 (2003) の対人葛藤方略モデルとの関連を検討することである。Dark Triad の統合モデルに基づけば、マキャベリアニズムには自己中心的でありながらも他者と上手く付き合っていくような側面があり、マキャベリアニズムが高い者は自己志向と他者志向のバランスをとって対処することが考えられる (マキャベリアニズムの「攻撃的防衛」に対応)。したがって、Dark Triad を互いに統制した時には相互妥協スタイルと正の関連が示されると考えられる。自己愛傾向が高い者にとって対人葛藤状況は誇大な自己を脅かされる状況であると考えられ、それに対しては、攻撃的な手段を用いて対抗すると考えられる (自己愛傾向の「攻撃行動」に対応)。そのため、自己愛傾向は Dark Triad を互いに統制した時に強制スタイルと正の関連が示されると考えられる。また、サイコパシー傾向が高い者は対人葛藤状況においてネガティブな切迫性が高まり衝動的な手段で対人葛藤を解消

すると考えられる (サイコパシー傾向の「社会逸脱」に対応)。したがって、Dark Triad を互いに統制した時には強制スタイルと正の関連を示すことが考えられる。

## 方法

### 手続き

大学の講義終了後に集団に質問紙を配布し、回答を求めた。調査時期は2015年2月であった。なお、本研究は早稲田大学の「人を対象とする研究に関する運営委員会」による倫理審査の承認を得て行われたものである。

### 調査対象者・分析対象者

調査対象者は大学生 220 名 (男性 142 名, 女性 77 名, 不明 1 名) であった。全ての参加者において欠損項目がみられなかったため、220 名のデータを分析対象者とした。平均年齢は 19.47 歳 ( $SD = 1.11$ ) であった。

### 使用尺度

**Dark Triad** Dark Triad の測定には研究 1, 2 で作成した日本語版 Short Dark Triad (SD3-J) を用いた。SD3-J に対しては、5 件法 (「全くそう思わない (1 点)」～「非常にそう思う (5 点)」) で回答を求めた。

**対人葛藤方略** 対人葛藤方略の 5 次元の測定には対人葛藤方略スタイル尺度 (加藤, 2003; Handling Interpersonal Conflict Inventory: HICI) を用いた。HICI は各 4 項目, 全 20 項目で構成され, 統合スタイル (項目例:「最良の結果が得られるように, お互いの考えを理解する」), 自己譲歩スタイル (項目例:「友人の望み通りにする」), 相互妥協スタイル (項目例:「お互いの意見の間を取ろうとする」), 強制スタイル (項目例:「自分の意見を通そうとする」), 回避スタイル (項目例:「できる限り口論にならないようにする」),

で構成される。対人葛藤方略スタイル尺度については 4 件法（「あてはまらない (1 点)」～「よくあてはまる (4 点)」）で回答を求めた。なお、教示は加藤 (2003) の手続きに従い「友人と 2 人で何かを一緒にやらなければならない時、友人と意見が合わなかった」という場面を思い浮かべてもらい、その際にどのような行動をとるのかについて回答を求めた。

## 結果

各尺度の記述統計量、 $\alpha$  係数、特性間の相関係数を Table 7-3 に示す。各尺度の  $\alpha$  係数はいずれも先行研究と同程度の値を示したため、それぞれの尺度の項目平均を尺度得点として以降の分析に用いた。Dark Triad と対人葛藤方略スタイルとの相関関係については、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向はいずれも強制スタイルとの間に有意な正の相関を示した。また、自己愛傾向およびサイコパシー傾向は回避スタイル、自己譲歩スタイルとの間に有意な負の相関を示した。サイコパシー傾向はそれらに加えて相互妥協スタイルとの間に有意な負の相関を示した。

次に、Dark Triad を互いに統制した時に Dark Triad の各特性が対人葛藤方略とどのように関連するのかを検討するために、Dark Triad の各特性から対人葛藤方略スタイルの 5 変数にパスを引き、Dark Triad の各特性と対人葛藤方略スタイルの誤差に共分散を仮定したモデル (Figure 7-2) を、構造方程式モデリングを用いて推定した。その結果を Table 7-4 に示す。マキャベリアニズムは相互妥協スタイルと有意な正の関連を示した。自己愛傾向とサイコパシー傾向は強制スタイルと有意な正の関連を示した。自己愛傾向は強制スタイルに加えて回避スタイルと有意な負の関連を示し、サイコパシー傾向は強制スタイルに加えて統合スタイル、回避スタイル、自己譲歩スタイル、相互妥協スタイルとの間に有意な負の関連を示した。

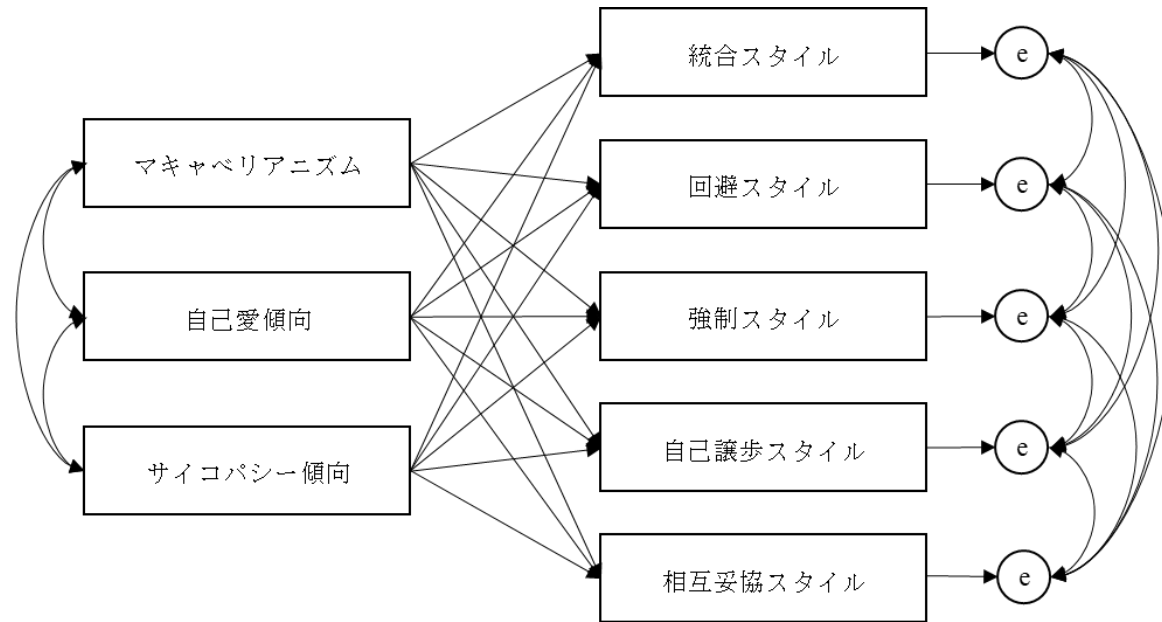


Figure 7-2. Dark Triad から対人葛藤方略へのパスを引いたモデル

Table 7-3. Dark Triad と対人葛藤方略との相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. マキャベリアニズム	(.69)								3.45	0.55
2. 自己愛傾向	.18 **	(.81)							2.33	0.68
3. サイコパシー傾向	.37 ***	.37 *	(.71)						2.20	0.67
4. 統合スタイル	.04	.02	-.11	(.83)					3.07	0.60
5. 回避スタイル	-.01	-.19 **	-.18 **	.30 ***	(.85)				2.87	0.77
6. 強制スタイル	.23 ***	.42 ***	.44 ***	-.02	-.21 **	(.80)			1.89	0.63
7. 自己譲歩スタイル	-.07	-.15 *	-.19 **	.25 ***	.49 ***	-.15 *	(.73)		2.41	0.59
8. 相互妥協スタイル	.12	-.11	-.13 *	.60 ***	.47 ***	.03	.40 ***	(.56)	2.62	0.50

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

注) 相関表の括弧内の値は $\alpha$ 係数を表す。

Table 7-4. Dark Triad から対人葛藤方略への標準回帰係数

	マキャベリアニズム			自己愛傾向			サイコパシー傾向			$R^2$
	$\beta$	95%CI	$p$	$\beta$	95%CI	$p$	$\beta$	95%CI	$p$	
統合スタイル	.09	[-.05, .23]	.209	.06	[-.08, .20]	.386	-.16	[-.31, -.01]	.033	.02 *
回避スタイル	.07	[-.07, .21]	.308	-.15	[-.29, -.01]	.036	-.15	[-.30, -.01]	.043	.06 ***
強制スタイル	.07	[-.05, .19]	.277	.29	[.17, .41]	<.000	.31	[.18, .44]	<.000	.27 ***
自己譲歩スタイル	.01	[-.13, .15]	.902	-.09	[-.23, .05]	.198	-.16	[-.31, -.02]	.030	.05 ***
相互妥協スタイル	.20	[.06, .33]	.006	-.08	[-.21, .06]	.287	-.18	[-.33, -.03]	.017	.05 ***

\*\*\*  $p < .001$ , \*  $p < .05$



## 考察

研究 4 では、Dark Triad と対人葛藤方略スタイルとの関連を検討した。本研究の結果から、仮説通りマキャベリアニズムは相互妥協スタイルと有意な正の関連を示し、自己愛傾向およびサイコパシー傾向は強制スタイルと有意な正の関連を示した。また、仮説とは異なり、自己愛傾向は回避スタイルとも有意な負の関連を示し、サイコパシー傾向は統合スタイル、回避スタイル、自己譲歩スタイル、相互妥協スタイルとの間にも有意な負の関連を示した。

先行研究 (Horan et al., 2015) において、マキャベリアニズムは交際相手との対人葛藤場面において、Dark Triad の 2 変数を統制した時に敵意的なコミュニケーションと正の関連を示していたが、本研究では Dark Triad を互いに統制した時に相互妥協スタイルと正の関連を示し、強制スタイルとはほとんど関連を示さなかった。この点については、本研究においては交際パートナーに限らず一般的な対人関係における対人葛藤場面を想起して回答を求めたために、このような結果になったことが考えられる。実際に先行研究ではマキャベリアニズムが高い者は交際パートナーに対して過度に親密になることを避ける傾向にあることが示されている (Jonason & Buss, 2012)。また、マキャベリアニズムが高い者は目標が同じである競合相手に対しては協力関係を結び、利益に向けて協力した上で利益を分割することが理論的に指摘されている (Jones & Paulhus, 2010a)。以上の知見から、本研究の結果は互惠的關係における相互妥協的な葛藤方略を反映したものだと考えられる。

自己愛傾向とサイコパシー傾向が強制スタイルと正の関連を示した点は仮説通りであった。前述のように Horan et al. (2015) では交際パートナーに対する葛藤時におけるコミュニケーションについて検討していたが、本研究では一般的な対人関係における葛藤場面においても敵対的な葛藤方略を用いることが示された。その上で、自己愛傾向とサイコパシー傾向と強制方略と関

連を示した本研究の結果は、Dark Triad を互いに統制した時に確かめられたものであり、自己愛傾向と強制スタイル、サイコパシー傾向と強制スタイルとの正の関連はそれぞれ異なる方略を反映したものであると言える。

自己愛傾向とサイコパシー傾向の葛藤方略における違いは、葛藤場面の違いに依拠できる可能性がある。Jones & Paulhus (2010b) は自己愛傾向が攻撃行動をする場面は自我脅威場面であり、サイコパシー傾向が攻撃行動をする場面は身体脅威場面であることを示している。Jones & Paulhus (2010b) の示した自己愛傾向とサイコパシー傾向の違いに基づけば、本研究における自己愛傾向と強制スタイルとの正の関連は自我脅威的な葛藤状況 (e.g., 自分の優越性が否定されたり、自分の意見が否定されたりするような場面) における葛藤方略を反映したものだと考えられる。その一方で、サイコパシー傾向と正の関連は自身の身体への脅威やそれに準ずる脅威が生じた際のネガティブな切迫性による葛藤方略を反映したものだと考えられる。

仮説とは異なり、自己愛傾向は回避スタイルとの間にも有意な負の関連を示し、サイコパシー傾向は強制スタイル以外の対人葛藤方略スタイルとの間に有意な負の関連を示した。自己愛傾向が回避スタイルと負の関連を示した点は、自己愛傾向が高い者が強制的に他者に自身の誇大性を認めさせようとする傾向性が反映したものだと考えられる。また、サイコパシー傾向に関してはサイコパシー傾向が高い者が自身の欲求を充足させるうえで他者の意図や行動を無視して行動する傾向性が反映されたものと考えられる。ただし、その係数はいずれも小さく、これらの考察は推測の域を出ない。

以上のように、Dark Triad の対人葛藤方略における傾向性が部分的に明らかにされ、マキャベリアニズムが高い者は相手とのバランスを考慮しながら相互に妥協するような対人葛藤方略を用い、自己愛傾向やサイコパシー傾向が高い者はそれぞれ異なる強制的な対人葛藤方略を用いることが示唆された。

### 第3節 総合考察

研究3, 4では他者操作方略と対人葛藤方略に着目してDark Triadとの関連を検討した。これらの結果を踏まえ、以下ではDark Triadの統合モデルの妥当性について考察したい。研究3, 4を通して得られた結果をまとめると、Dark Triadを互いに統制した上で、マキャベリアニズムは全ての他者操作方略、および相互妥協スタイルと有意な正の関連を示した。また、自己愛傾向は自己優越的感情操作、および強制スタイルと有意な正の関連を示した。サイコパシー傾向は自己優越的行動操作、自己卑下の行動操作、自己優越的感情操作、および強制スタイルと有意な正の関連を示した。

Dark Triadの統合モデルに基づけば、マキャベリアニズムが高い者は長期的な利益を最大化するために、利益の獲得や資源の維持に向けて様々な戦略を行うことが想定された。このような戦略性は、Dark Triadの統合モデルにおける、マキャベリアニズムの「他者操作」や「攻撃的防衛」に対応するものである。本研究で得られたマキャベリアニズムの多様な他者操作方略や相互妥協的な対人葛藤方略は、このようなマキャベリアニズムの長期的な利益獲得に向けた戦略性を支持するものであった。マキャベリアニズムが高い者は長期的な利益を獲得するために、状況に応じて様々な他者操作を行い、また、他者とのバランスを考慮しながら対処することが示唆される。

また、自己愛傾向が高い者は誇大な自己を維持するような対人的方略を示すことが想定されたが、これはDark Triadの統合モデルにおける自己愛傾向の「感じの良さ」や「攻撃行動」に対応するものである。本研究で得られた自己愛傾向の自己優越的感情操作や強制スタイルは、そのような自己愛傾向の誇大な自己イメージの獲得や防衛をする傾向性を支持するものであった。すなわち、自己愛傾向が高い者は誇大な自己イメージを獲得するために他者の感情自体を操作する傾向にあり、それに失敗したり対抗されたりした場合には強制スタイルによって対処することが示唆される。

サイコパシー傾向が高い者は短期的な利益を獲得するために様々な他者操作を行ったり, 欲求充足に向けて衝動的に行動したりすることが想定された。このような短期的な利益獲得は Dark Triad の統合モデルにおけるサイコパシー傾向の「他者操作」や「社会逸脱」に対応するものである。本研究で示された自己優越的行動操作, 自己卑下的行動操作, 自己優越的感情操作, および強制スタイルは, そのような Dark Triad の統合モデルに基づく仮説を支持するものであった。すなわちサイコパシー傾向が高い者は現在の社会的地位を直ぐに高めるために自己優越的行動操作, 自己優越的感情操作, 自己卑下的行動操作を行い, また自身の欲求を充足させるために強制スタイルにより自分の意見を押し通すことが示唆される。

## 第八章 Dark Triad と反社会性

前章では Dark Triad の対人方略について検討した。その結果、Dark Triad の対人方略における相違点が整理され、それぞれが異なる方略を用いることが示唆された。他方で、Dark Triad が”Dark”の名を冠しているのは、そのような対人的方略からだけでなく、Dark Triad が高い者の冷淡さや反社会性にも依拠するものである (Jones & Figueredo, 2013)。このような Dark Triad の反社会的な行動特徴の側面についても Dark Triad の統合モデルが支持されるかどうかを検討するために、第 1 節：研究 5 では Dark Triad と攻撃行動の関連の検討を行い、第 2 節：研究 6 では Dark Triad と環境破壊行動であるゴミのポイ捨て行動との関連の検討を行う。

### 第 1 節 研究 5: Dark Triad と外顕性・関係性攻撃の関連

#### 目的

研究 5 の目的は Dark Triad の外顕性・関係性攻撃との関連を検討することである。Dark Triad の統合モデルに基づけば、マキャベリアニズムが高い者が攻撃行動をとるのは利益を獲得したり資源を維持したりする時であり、サイコパシー傾向が高い者においては利益を獲得したり自身の身体に危険が及んだ時であると考えられる。自己愛傾向が高い者においては自我脅威場面において、攻撃行動が行われることが考えられる。ただし、その際に、外顕性攻撃を行うとその妨害や脅威は取り除かれるものの、自身の友人関係の質 (friendship quality) が低下することが示されている (Banny, Heilbron, Ames, & Prinstein, 2011)。それとは対照的に、関係性攻撃は互恵的な関係においては自身の友人関係の質が向上することが示されている (Banny et al., 2011)。以上の知見を踏まえ、Dark Triad の統合モデルに基づけば、マキャベリアニズムは自身の周りの人との関係の維持にも関わる特性であるため、Dark Triad を互いに統制すると外顕性攻撃とは関連せず、関係性攻撃と正の関連を示す

ことが考えられる (マキャベリアニズムの「攻撃的防衛」に対応)。また、自己愛傾向とサイコパシー傾向は外顕性攻撃、関係性攻撃のどちらにも正の関連を示すと考えられる (それぞれ、自己愛傾向の「攻撃行動」、サイコパシー傾向の「社会逸脱」に対応)。

## 方法

### 手続き

手続きは研究 4 と同一のものであった。

### 調査対象者・分析対象者

調査参加者および分析対象者は研究 4 と同一であった。

### 使用尺度

**Dark Triad** Dark Triad を測定するために、研究 1, 2 で作成された日本語版 Short Dark Triad (SD3-J) を用いた。SD3-J の項目に対して、5 件法 (「全くそう思わない (1 点)」～「非常にそう思う (5 点)」) で回答を求めた。

**外顕性攻撃・関係性攻撃** 攻撃行動を測定するために、磯部・菱沼 (2007) による攻撃性尺度を用いた。この尺度は外顕性攻撃を泰 (1990) の身体的攻撃および言語的攻撃の項目のうちの 12 項目 (項目例:「ムカついて、人を叩いたことがある」) で測定し、関係性攻撃を櫻井 (2002) を参考に作成された関係性攻撃 10 項目 (項目例:「腹を立てた相手の悪口を、その人がいないところで他の人に話す」) で測定する尺度であり、全 22 項目で構成される。攻撃性尺度の項目に対して、5 件法 (「全く当てはまらない (1 点)」～「非常に当てはまる (5 点)」) で回答を求めた。

## 結果

各尺度の記述統計量、 $\alpha$ 係数、尺度間の相関係数を Table 8-1 に示した。 $\alpha$ 係数はいずれも許容範囲の値を示した。そこで、各尺度の得点について項目平均を用いて算出し、尺度間の相関係数を算出した。その結果、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向が外顕性攻撃および関係性攻撃と有意な正の相関を示した。その一方で、自己愛傾向は有意な相関を示さなかった。

Dark Triad の各特性が他の 2 特性を統制した上で各攻撃性とどのように関連するのかを検討するために、構造方程式モデリングを用いて検討を行った。Dark Triad の 3 特性から外顕性攻撃・関係性攻撃に対するパスを引き、Dark Triad の特性間と各攻撃性の誤差に共分散を仮定する飽和モデル (Figure 8-1) を設定し、推定を行った。その結果を Table 8-2 に示す。マキャベリアニズムは関係性攻撃に対して有意な正の関連を示し、サイコパシー傾向は外顕性攻撃と関係性攻撃に有意な正の影響を示した。また、自己愛傾向は外顕性攻撃においても関係性攻撃においてもほとんど関連はみられなかった。

## 考察

本研究では Dark Triad の外顕性攻撃・関係性攻撃との関連を検討することを目的とした。Dark Triad の統合モデルに基づけば、Dark Triad を互いに統制した上で、マキャベリアニズムは外顕性攻撃とは関連せず、関係性攻撃と正の関連を示し、サイコパシー傾向および自己愛傾向は外顕性攻撃・関係性攻撃の両方と正の関連を示すことが考えられる。本研究の結果から、仮説通り、マキャベリアニズムは関係性攻撃と有意な正の関連、サイコパシー傾向は外顕性攻撃および関係性攻撃と有意な正の関連を示した。その一方で、仮説とは異なり、自己愛傾向はいずれの攻撃性ともほとんど関連を示さなかった。



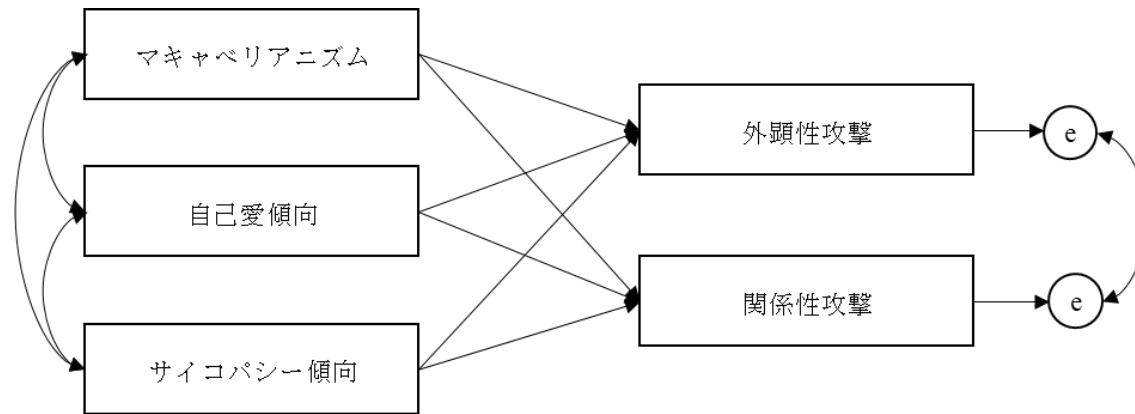


Figure 8-1. Dark Triad から攻撃性へパスを引いたモデル

Table 8-1. Dark Triad と攻撃性の相関

	1	2	3	4	5	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. マキャベリアニズム	(.69)					3.45	0.55
2. 自己愛傾向	.18 **	(.81)				2.33	0.68
3. サイコパシー傾向	.37 ***	.37 *	(.71)			2.20	0.67
4. 外顕性攻撃	.16 *	.10	.41 ***	(.86)		3.07	0.60
5. 関係性攻撃	.32 ***	.09	.32 ***	.24 ***	(.78)	2.62	0.50

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

注) 相関表の括弧内の値は $\alpha$ 係数を表す。

Table 8-2. Dark Triad から攻撃性への標準回帰係数

	マキャベリアニズム			自己愛傾向			サイコパシー傾向			$R^2$
	$\beta$	95%CI	$p$	$\beta$	95%CI	$p$	$\beta$	95%CI	$p$	
外顕性攻撃	.01	[-.12, .14]	.870	-.06	[-.19, .07]	.376	.43	[.29, .57]	<.001	.17 ***
関係性攻撃	.24	[.11, .37]	<.001	-.04	[-.17, .09]	.520	.25	[.11, .39]	<.001	.15 ***

\*\*\*  $p < .001$

マキャベリアニズムが外顕性攻撃とはほとんど関連せず、関係性攻撃と独自に有意な正の関連を示した本研究の結果は、マキャベリアニズムが関係性攻撃のみと独自に有意な正の関連を示した Klimstra et al. (2014) と整合的な結果であった。マキャベリアニズムの戦略的な概念内容を踏まえれば、マキャベリアニズムは日常的に攻撃行動を行うというよりも、必要に迫られた際に戦略的・計画的に自身の評判を落とさないように攻撃行動を行うことが考えられる (Jones & Paulhus, 2010a)。また、関係性攻撃は集団の注目を集める上で適応的な機能を果たすことが示されている (Zimmer-Gembeck, Geiger, & Crick, 2005)。Banny et al. (2011) や以上の知見を踏まえれば、本研究によって示されたマキャベリアニズムと関係性攻撃との有意な正の関連は、マキャベリアニズムによる戦略的な攻撃行動を反映したものだと考えられる。

サイコパシー傾向が外顕性攻撃および関係性攻撃と独自に有意な正の関連を示した本研究の結果は、外顕性攻撃と独自に有意な正の関連を示し、関係性攻撃とはほとんど関連を示さなかった Klimstra et al. (2014) の結果と不整合であった。これらの結果の不整合は、調査対象者の年齢による違いによって生じたものと考えられる。Klimstra et al. (2014) の調査対象者は青年期前期の対象者であったが、本研究の調査対象者は成人期前期の対象者であった。年齢の調整効果について、年齢が経るにしたがって外顕性攻撃が知覚された人気 (perceived popularity) と負の関連をするようになり、関係性攻撃が知覚された人気と正の関連を示すようになることが示されている (Rose et al., 2004)。サイコパシー傾向が高い者は社会的な力を誇示するために、外顕性攻撃だけでなく関係性攻撃も併せて行うようになることが示唆される。

他方で、先行研究では Dark Triad を互いに統制した時に自己愛傾向は関係性攻撃と有意な正の関連を示したものの、本研究の結果では自己愛傾向は外顕性攻撃とも関係性攻撃とも関連を示さなかった。Jones & Paulhus (2010b) は、自己愛傾向の攻撃性は自己の誇大性の脅威に左右されることを示している。また、成人期前期に比べて青年期の方が自己の誇大性が脅かされやすい

時期であることが指摘されている (中島, 1998)。以上の知見を踏まえれば、自己愛傾向の攻撃性における本研究の結果と先行研究との不一致は、攻撃場面の状況や年齢層の違いに依拠できる可能性がある。

以上の結果から、Dark Triad の外顕性攻撃・関係性攻撃における特徴が示された。マキャベリアニズムとサイコパシー傾向はそれぞれ独自に関係性攻撃と正の関連を示し、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向で異なる関係性攻撃を行うことが示唆された。また、サイコパシー傾向のみが外顕性攻撃と独自に正の関連を示し、マキャベリアニズムや自己愛傾向に比べて、外顕性攻撃と関係性攻撃の両方を用いる点に特徴があることが示された。

## 第 2 節 研究 6: Dark Triad とゴミのポイ捨て行動との関連<sup>7</sup>

### 目的

研究 6 の目的は Dark Triad とゴミのポイ捨て (littering; Kraus et al., 1978) 行動との関連を検討することである。ゴミのポイ捨ては自身にとって利益を生じさせるが、その一方で自身の評判を貶める可能性のある行動でもあるため、Dark Triad の統合モデルに基づき、マキャベリアニズムや自己愛傾向とはほとんど関連せず、サイコパシー傾向と正の関連を示すと考えられる (サイコパシー傾向の「社会逸脱」に対応)。

ゴミのポイ捨て行動は数多くの地方自治体における条例違反に該当する行為であり、これを質問紙で測定すると社会的望ましさのバイアスが過重にかかることが想定される。そこで本研究ではゴミ箱のない実験室にゴミのポイ捨てをするかどうかを実験室実験によって検討する。実験手続きは、ゴミの

---

<sup>7</sup> 研究 6 の内容は下司忠大・吉野伸哉・小塩真司 (2019). Dark Triad の高い者はゴミのポイ捨てをしやすいのか パーソナリティ研究, 28, 84-86. に採録されたものを再分析したものである。

ポイ捨て行動について社会心理学的な観点から実験的に検討している Krauss et al. (1978) の手続きを参考に行う。Krauss et al. (1978) では実験室の状態をゴミが全くない状態とゴミが散乱している状態とで比較検討しているが、ゴミが全くない状態で実験した場合にはほとんどの実験参加者 (全体の 93.3%) がゴミを捨てないことを示している。そのため、ゴミが全くない状態ではゴミのポイ捨て行動に個人差が生じないことが考えられ、Dark Triad とゴミのポイ捨て行動は、ゴミが散乱しているような状況下において関連することが考えられる。ただし、Krauss et al. (1978) の実験はそれ以後の追試研究が未だ行われていないため、本研究では両条件を対象に実験を行う。

### 方法

#### 実験参加者

「自律神経系の活動と創造性能力に関する研究」への募集に大学生 41 名 (男性 9 名, 女性 32 名) が参加した。平均年齢は 19.83 歳 ( $SD = 1.11$ ) であった。参加者には謝礼として、QUO カード 500 円分を進呈した。

#### 使用尺度

実験前に Dark Triad を測定するために、研究 1, 2 で作成された日本語版 Short Dark Triad (SD3-J) を用いた。SD3-J に対して 5 件法 (「全くそう思わない (1 点)」～「非常にそう思う (5 点)」) で回答を求めた。

#### 使用器具

以下に述べる実験手続きにおいて、工作用マット (A4 サイズ), 白綿棒 (直径 7.5cm), フィンガーペイント用絵具 (CE マーク, AP マーク取得済み), ヴァセリン (保湿クリーム), スケッチブック (A3 サイズ), ウェットティッシュ (ノンアルコール, 123mm×180mm) ストップウォッチを用いた。

### 実験手続き

以下の手続きは Krauss et al. (1978) の実験を参考にして行われた。実験は早稲田大学内のドアによって連結されている2つの実験室を使用して行われた (Figure 8-2)。実験前のドアは出入口のドアはどちらも締まっており、連結部のドアは開けたままにした。実験者は実験参加者が来たら実験室 B のドアから入室を促し、実験室 B の連結ドア付近のイスに荷物を置くように伝えた。そして実験室 A に誘導し、質問紙への回答を求めた。質問紙の回答が終えて質問紙の回収が終えた後で、実験内容の説明を行った。ここでは、「自律神経系の活動と創造性能力に関する研究」であることを伝え、自律神経系の活動の指標として手形を採取することと、創造性能力の指標としてアナグラム課題を行っていただくことを教示した。以上の研究内容に対して改めて実験への参加の意思を確認し、参加に同意いただけた場合には 500 円分の QUO カードを渡し、実験参加者の荷物の中かポケットの中に入れるよう求めた。

次に、実験参加者の手形を採取した。手形は以下の手続きで採取された。まず、実験者は工作用ボードにフィンガーペイント用絵具を一定量絞り出し、綿棒で円状にまんべんなく伸ばした。そして、その円状に伸ばされた絵具に手のひらを付けるように求め、スケッチブックに手のひらを押し付けるように教示した。実験参加者がスケッチブックに手のひらを付けてからストップウォッチで 15 秒を数え、15 秒後に手のひらをはなすように教示した。

手形を採取した後、実験者は、「今のままではなかなか絵具が落ちないので、落としやすくするためにクリームを塗っていただきます」と述べ、綿棒でヴァセリンを少量とって渡し、実験参加者に手のひらにまんべんなく塗っていただくように教示した。塗り終わった後、実験者はストップウォッチを取り出し、「効果が出るまで 1 分ほどかかるので、そのまま少々お待ちください」と述べ、ストップウォッチで 1 分を測った。1 分後、実験参加者にウェットティッシュを数枚渡し、絵具を完全に拭き取るように求めた。

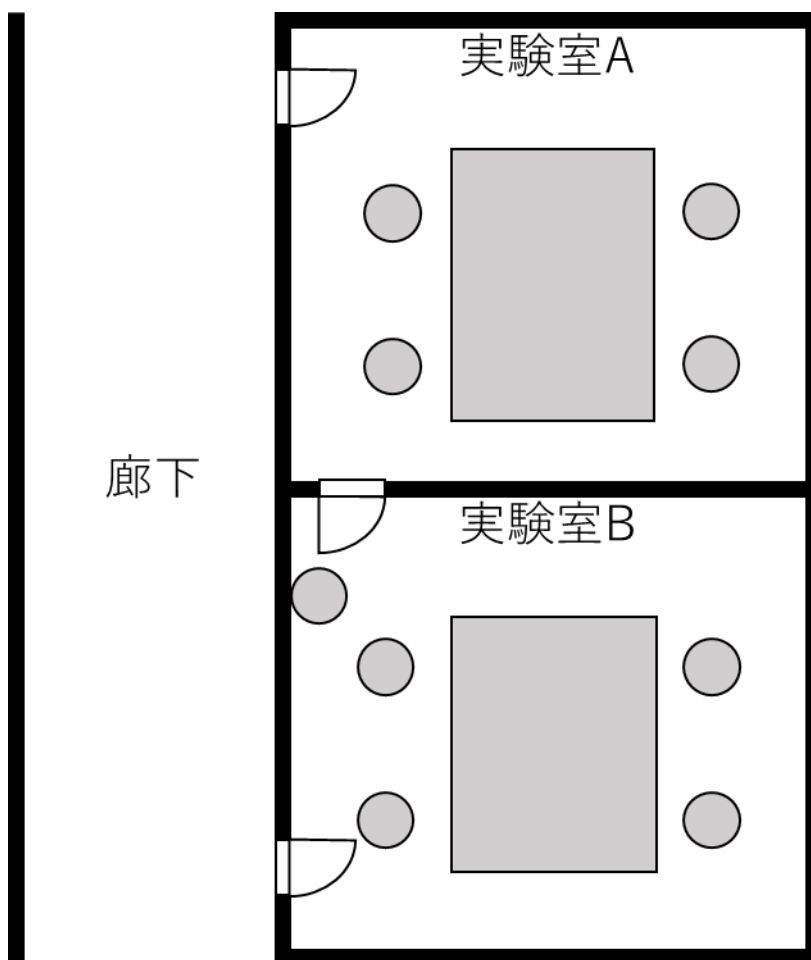


Figure 8-2. 実験室の間取り図

絵具を拭き終えたら、次に創造性課題に取り組んでいただくように教示した。創造性課題は市村・上田・楠見 (2017) よりアナグラム課題 50 問を抽出して用いた。創造性課題の制限時間は 5 分間であった。5 分後に回答をやめるように教示し、創造性課題の用紙を回収した。続いて、2 回目の手形の採取を行った。手続きは 1 回目の手形の採取と同様であった。

2 回目の手形の採取を終えた後、再び「落ちやすくするため」と述べて同じ手続きでヴァセリンを塗るように求めた。そして、実験参加者の手に絵具・ヴァセリンが付いた状態で実験室 B に誘導し、イスに座るように教示した。ここで、「大変申し訳ないのですが、これからすぐに次の実験が始まる関係で、その準備をしなければいけないのです。ですので、これで実験終了とさせていただきます。1 分間待っていただいて、その後、ウェットティッシュで絵具を拭いてください。全て拭き終わりましたら、そのままお帰りください。この度は実験にご参加いただき、誠にありがとうございました」と述べ、実験者はウェットティッシュを数枚渡し、実験室 A に戻り、連結部のドアを閉めた。実験参加者が実験室 B から出てくるところを呼び止め、謝罪とともにデブリーフィングを行った。

### 測定指標と実験操作

測定指標については、Krauss et al. (1978) と同様に実験参加者がティッシュをゴミ箱のない実験室 B の机の上に置いていくかどうかをゴミのポイ捨ての指標とした。また、実験は実験室 B の机の上にゴミが全くない条件 (きれいな条件) と、ゴミがある条件 (汚い条件) の 2 条件で実施された。

## 結果

SD3-J の各条件の記述統計量と  $\alpha$  係数および各特性間の相関係数を Table 8-3 に示す。 $\alpha$  係数はいずれも許容範囲の値を示したため、各尺度の項目平均



を算出し、各尺度得点として以降の分析に用いた。ゴミのポイ捨て指標に関しては、きれい条件では 21 名中 2 名がゴミ捨てを行い、汚い条件では 20 名中 12 名がゴミ捨てを行った。Krauss et al. (1978) と同様に、きれい条件ではほとんどの実験参加者がゴミを捨てなかったため、これ以降の分析では、汚い条件の参加者のデータを対象に分析を行った。

Dark Triad がゴミのポイ捨て行動を予測するかどうかを検討するために、従属変数をゴミのポイ捨て指標 (捨てない = 0, 捨てた = 1)、独立変数を年齢、性別、Dark Triad (標準化得点) としたロジスティック回帰モデルを設定した。ロジスティック回帰モデルは、データ数が少ない場合にはベイズ推定法の方が最尤法よりも結果が安定するため (岡本, 2014), 本研究では HMC 法 (Hamiltonian Monte Carlo method) によるベイズ推定を行った。事前分布は十分に広い一様分布を設定した。バーンイン期間を 1000 に設定した上で 21000 個の乱数を 5 つ発生させ、計 100000 個の乱数を事後分布の結果とした。収束判定指標  $\hat{R}$  の値から、各推定値が収束したことが示された ( $\hat{R} < 1.1$ )。

汚い条件における Dark Triad のオッズ比の事後分布から算出された EAP 推定値およびその標準偏差と 95% 確信区間 (confidence interval; CI) を Table 8-4 に示し、密度分布を Figure 8-3 に示す。マキャベリアニズムのオッズ比の EAP 推定値は 0.72 (95%CI [0.31, 1.58]) を示した。また、自己愛傾向は 1.42 (95%CI [0.73, 2.86]), サイコパシー傾向は 1.51 (95%CI [0.76, 3.19]) であった。自己愛傾向とサイコパシー傾向に着目すると、オッズ比が 1 を超える事後の累積確率はそれぞれ 84% と 87% であった。なお、マキャベリアニズムについてはオッズ比が 1 を超える事後の累積確率は 21% であった。

## 考察

研究 6 では Dark Triad の各特性とゴミのポイ捨て行動との関連について検討した。本研究の結果から、ゴミが散乱しているような状況において、自己

愛傾向とサイコパシー傾向が 1SD 増加するとゴミのポイ捨てのオッズ比が約 1.5 倍増加する可能性が高いこと、そして両特性が 1SD 増加することでゴミのポイ捨てをしないよりもする可能性の方が高い（つまりオッズ比が 1 を超える）確率が約 85%になることが示された。

サイコパシー傾向がゴミのポイ捨て行動をする可能性が比較的高いことが示されたことは仮説を支持する結果であった。サイコパシー傾向が高い者はネガティブな切迫性を背景に自身の欲求を充足する (Gray et al., 2019) 点に特徴があり、サイコパシー傾向が高い者のゴミのポイ捨て行動は、ゴミを所有しているというネガティブな切迫性を解消しようとして行われるゴミのポイ捨てを反映していると考えられる。

その一方で、自己愛傾向もサイコパシー傾向と同程度にゴミのポイ捨て行動をする可能性が高いことは、予測外の結果であった。自己愛傾向が高い者の不適応的な側面として、Back et al. (2013) は自己愛傾向が高い者は他者に比べて優位に立つことを求め、他者を卑下することを示している。本研究における自己愛傾向の結果は、このような他者と比較した際の特権意識や搾取性を表したものである可能性がある。

また、マキャベリアニズムのゴミのポイ捨てをする可能性は比較的低いことが示された。サイコパシー傾向とマキャベリアニズムはいずれも囚人のジレンマゲームにおける裏切り行動と関連のある特性であるが (Deutchman & Sullivan, 2018; Rilling et al., 2007), サイコパシー傾向とは異なりマキャベリアニズムが高い者は社会的文脈において利己的行動をした際の罰を受ける可能性や互惠性に敏感に反応する傾向性が示唆されており (Deutchman & Sullivan, 2018), その点が結果に反映された可能性がある。

以上の結果から、Dark Triad のゴミのポイ捨て行動における特徴が明らかにされ、自己愛傾向とサイコパシー傾向がそれぞれ独自にゴミのポイ捨て行動と関連することが示された。ただし、これらのオッズ比の確信区間は 0 を

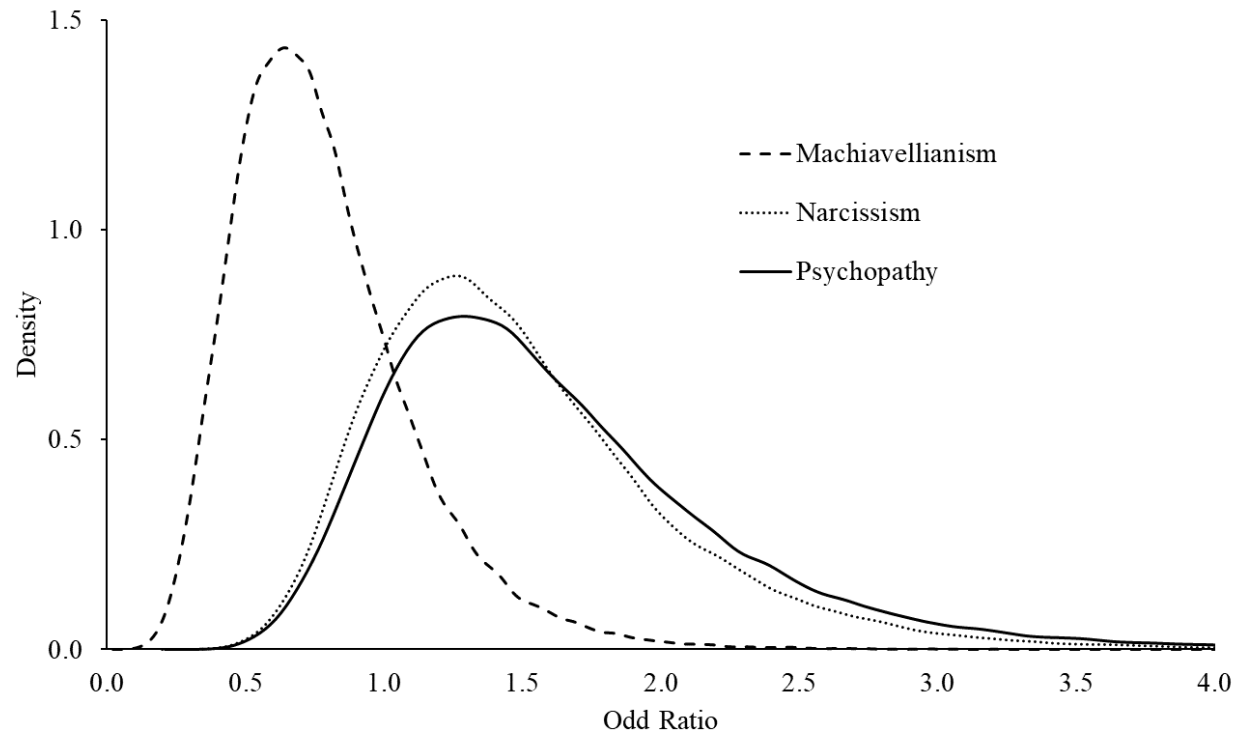


Figure 8-3. Dark Triad のオッズ比の事後分布

Table 8-3. Dark Triad 間の相関と各条件の記述統計量

	1	2	3	きれい条件			汚い条件		
				<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. マキャベリアニズム	(.68)			21	3.48	0.54	20	3.46	0.49
2. 自己愛傾向	.14	(.69)		21	2.37	0.49	20	2.52	0.56
3. サイコパシー傾向	.20	.09	(.61)	21	2.47	0.48	20	2.18	0.46

注) 相関表の括弧内の値は $\alpha$ 係数を表す。

Table 8-4. Dark Triad の EAP 推定値および標準偏差

	EAP	post.sd	2.5%	25%	50%	75%	97.5%	有効標本数	$\hat{R}$
マキャベリアニズム	0.72	1.51	0.31	0.55	0.73	0.95	1.58	100000	1.00
自己愛傾向	1.42	1.42	0.73	1.12	1.40	1.79	2.86	53561	1.00
サイコパシー傾向	1.51	1.45	0.76	1.17	1.49	1.92	3.19	100000	1.00

含むものであり、その解釈には留意が必要である。また、同様の結果が確かめられるかどうかについて更なる検討が必要であろう。

### 第3節 総合考察

研究5, 6では攻撃性とゴミのポイ捨て行動に焦点をあてて Dark Triad との関連を検討することによって、Dark Triad の統合モデルの妥当性を検討した。これらの研究の主要な結果を以下にまとめる。Dark Triad を互いに統制した上で、マキャベリアニズムは関係性攻撃と有意な正の関連を示し、ゴミのポイ捨て行動とはほとんど関連を示さなかった。サイコパシー傾向は外顕性攻撃・関係性攻撃と有意な正の関連を示し、ゴミのポイ捨て行動をする可能性が比較的高い傾向にあることが示された。また、自己愛傾向は攻撃性とはほとんど関連を示さず、ゴミのポイ捨て行動をする可能性が比較的高い傾向にあることが示された。

Dark Triad の統合モデルに基づけば、マキャベリアニズムが高い者は自身の評判を下げる可能性がある行動はできるだけ避ける傾向にあり、その上で、マキャベリアニズムが高い者は自身の利益を獲得する上で自身の評判を維持しつつ、他者を蹴落とすような傾向を示すことが想定された。これは Dark Triad の統合モデルにおける「攻撃的防衛」に対応するものである。マキャベリアニズムの結果は、このような Dark Triad の統合モデルによる想定を支持するものであった。マキャベリアニズムが高い者は自身の利益を得るために自身の評判を気にしつつ、状況に応じて関係性攻撃を行うことが示唆される。

自己愛傾向が高い者はその誇大性を維持する特徴から他者に対して攻撃的に行動することが想定された。これは Dark Triad の統合モデルにおける自己愛傾向の「攻撃性」に対応するものである。しかし、自己愛傾向は攻撃性とは関連を示さず、ゴミのポイ捨て行動と正に関連することが示唆された。これは Dark Triad の統合モデルを支持しない結果であり、自己愛傾向の「攻撃行動」に関しては再考が必要である可能性がある。ただし、本研究では先行

研究 (Jones & Paulhus, 2010b) のように状況設定をしておらず、また、ゴミのポイ捨て行動に関しても確信区間が 0 を含む結果であったため、このような自己愛傾向の不適応的側面については詳細な検討が必要であろう。

サイコパシー傾向は目先の社会的地位の向上や欲求充足を背景として反社会的な行動をすることが想定された。これはサイコパシー傾向の「社会逸脱」に対応するものである。研究 5, 6 の結果はそのような想定を支持するものであり、その結果と、Dark Triad の統合モデルによる理論的想定から、サイコパシー傾向が高い者は自身の地位を高めたり、ポジティブな切迫性・ネガティブな切迫性を解消したりするために攻撃行動を行い、ネガティブな切迫性に基づいてゴミのポイ捨て行動を行うことが示唆される。

## 第九章 Dark Triad と社会適応性

ここまで、Dark Triad について、第六章では Dark Triad の対人方略に焦点をあて、第七章では Dark Triad の反社会性に焦点をあてて検討を行ってきた。これらは Dark Triad の、社会的に望ましいとは言い難い側面に焦点をあてた検討である。その一方で、Dark Triad はその大胆さや冷淡さ、他者操作的な特徴において場合によっては社会適応的に働くことが指摘されてきた (e.g., Jonason, Li, & Teicher, 2010)。このような社会適応性においても Dark Triad の統合モデルの妥当性が確認されるかどうかを検討するために、第 1 節：研究 7 では Dark Triad とライフスキルの関連を検討し、第 2 節：研究 8 では、Dark Triad とコーピングスタイルとの関連の検討を行う。

## 第 1 節 研究 7: Dark Triad とライフスキルの関連<sup>8</sup>

### 目的

研究 7 の目的は、Dark Triad とライフスキルとの関連を検討することである。本研究ではライフスキルを「意思決定」(i.e., 意思決定時に情報収集したり、計画を立てたりするスキル)、「対人関係スキル」(i.e., 他者に共感的に接するスキル)、「効果的コミュニケーション」(i.e., 自身の感情や気持ちを素直に表現するスキル)、「情動への対処」(i.e., 自身のネガティブ感情に対して効果的に対処するスキル) の 4 つに分類した嘉瀬・飯村・坂内・大石 (2016) の青年・成人用ライフスキル尺度 (LSSAA) を用いて検討する。

---

<sup>8</sup> 研究 7 の内容は嘉瀬貴祥・上野雄己・下司忠大 (2019). Dark Triad のライフスキルに対する関連—反社会的な性格特性の適応的、不適応的側面に関する探索的検討— パーソナリティ研究, 27, 266-269. に採録されたものを再分析したものである。再分析にあたり、倫理審査の手続きにおいて生データの取り扱いは第 1 著者および第 2 著者に限られていたため、生データの分析は行わず、尺度得点データを用いて再分析を行った。本研究で報告した  $\alpha$  係数は採録済みの値を再掲したものである。



Dark Triad の統合モデルに基づけば、マキャベリアニズムが高い者は他者操作をする上で戦略的・計画的に周囲の情報を収集することが考えられる (Jones & Paulhus, 2011) (マキャベリアニズムの「他者操作」に対応)。そのため、意思決定と正の関連を示すことが考えられる。自己愛傾向が高い者は対人場面において誇大な自己を見せつけることによって賞賛を浴びようとする傾向にあり、このような行動は初対面においては有効に働くことが示されている (Back et al., 2010) (自己愛傾向の「感じの良さ」に対応)。この点から、自己愛傾向は対人関係スキル、および、効果的コミュニケーションと正の関連を示すと考えられる。サイコパシー傾向が高い者は短期的な利益を得るために衝動的な他者操作する傾向にあり、また、直ぐに欲求充足することを目的として行動する傾向にあると考えられる (サイコパシー傾向の「社会逸脱」に対応)。そのため、ライフスキルにおける意思決定や対人関係スキルとは負の関連を示すと考えられる。

なお、ライフスキルにおける情動への対処は Dark Triad の統合モデルとは直接的には関連しないものの、Dark Triad の中でも自己愛傾向はメンタル・タフネス (スポーツ競技においてプレッシャーに上手く対処し、耐えることのできる能力; Lin, Mutz, Cloygh, Papageorgiou, 2017) と正の関連を示し、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向はメンタル・タフネスと負の関連を示していることから (Vaughan, Carterm Cockroft, & Maggiorini, 2018), 自己愛傾向は情動への対処と正の関連, マキャベリアニズムとサイコパシー傾向は情動への対処と負の関連を示すことが考えられる。本研究では Dark Triad とライフスキルとの関連を検討することで、以上の仮説を検討する。

## 方法

### 手続き

大学の講義終了後に集団に質問紙を配布し、回答を求めた。調査時期は2017年12月であった。なお、本研究は立教大学の倫理審査委員会による承認を得て行われたものである。

#### 調査対象者・分析対象者

調査対象者は大学生319名であった。この内、デモグラフィック項目を除く、全項目に欠損のない272名（男性135名、女性137名）を分析対象者とした。平均年齢は19.96歳（ $SD = 1.25$ ）であった。

#### 測定項目

**Dark Triad** Dark Triadの測定には、研究1, 2で作成された日本語版 Short Dark Triad (SD3-J) を用いた。SD3-Jに対しては、5件法（「全くそう思わない（1点）」～「非常にそう思う（5点）」）で回答を求めた。

**ライフスキル** ライフスキルの測定には、青年・成人用ライフスキル尺度（嘉瀬他, 2016; Life Skills Scale for Adolescents and Adults: LSSAA）を用いた。LSSAAは意思決定8項目（項目例：「入手した情報が信頼できるかどうか適切に判断することができる」）、対人関係スキル5項目（項目例：「他人に対して思いやりのある言動をとることができる」）、効果的コミュニケーション5項目（項目例：「自分の素直な気持ちを他人にはっきりと伝えられる」）、情動への対処3項目（項目例：「悲しいことがあっても、考え方を前向きに変えることができる」）で構成される。LSSAAには、5件法（「まったくあてはまらない（1点）」～「とてもよくあてはまる（5点）」）で回答を求めた。

### 結果

各尺度の記述統計量、 $\alpha$ 係数および各特性間の相関係数をTable 9-1に示した。 $\alpha$ 係数はいずれも許容範囲の値を示したため、各尺度の項目平均を算出

し、各尺度得点とした。Dark Triad とライフスキル間の相関係数を算出したところ、マキャベリアニズムは意思決定と有意な正の相関を示し、自己愛傾向は意思決定、対人関係スキル、効果的コミュニケーション、情動への対処と有意な正の相関を示した。サイコパシー傾向は対人関係スキルと有意な負の相関を示し、効果的コミュニケーションと有意な正の相関を示した。

Dark Triad を互いに統制した上で Dark Triad がどのようにライフスキルと関連するのかを検討するために、構造方程式モデリングを用いて検討を行った。Dark Triad の各特性からライフスキルの 4 変数に対してパスを引き、Dark Triad 間およびライフスキルの誤差項間に共分散を仮定したモデル (Figure 9-1) を推定した。その結果を Table 9-2 に示す。マキャベリアニズムは意思決定および対人関係スキルと有意な正の関連を示した。自己愛傾向は意思決定、対人関係スキル、効果的コミュニケーション、情動への対処と有意な正の関連を示した。サイコパシー傾向は意思決定、対人関係スキル、情動への対処と有意な負の関連を示した。

### 考察

本研究では、Dark Triad とライフスキルとの関連を検討した。本研究の結果から、仮説通り、マキャベリアニズムは意思決定、対人関係スキルと正の関連を示し、自己愛傾向は対人関係スキル、効果的コミュニケーション、情動への対処と正の関連を示した。サイコパシー傾向は意思決定、対人関係スキル、情動への対処と負の関連を示した。

Paulhus (2014) はマキャベリアニズムが高い者を「熟達した他者操作者」(strategic manipulator) と称し、Jones & Paulhus (2011) はマキャベリアニズムが高い者が他者を操作する上で慎重かつ巧みな方略を用いることを指摘している。このような理論的指摘を踏まえれば、マキャベリアニズムと意思決定および対人関係スキルとの関連を示した本研究の結果は、マキャベリアニズ

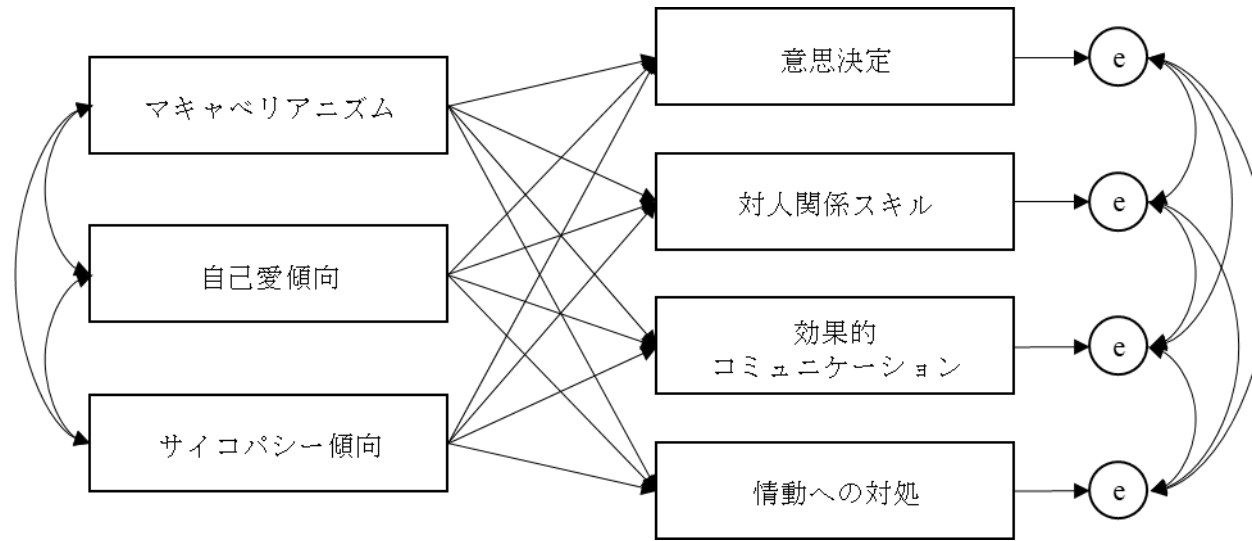


Figure 9-1. Dark Triad からライフスキルへのパスを引いたモデル

Table 9-1. Dark Triad とライフスキルとの相関

	1	2	3	4	5	6	7	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. マキャベリアニズム	(.65)							3.41	0.54
2. 自己愛傾向	.16 ***	(.77)						2.45	0.65
3. サイコパシー傾向	.25 **	.44 ***	(.66)					2.41	0.57
4. 意思決定	.23 ***	.16 **	-.05	(.80)				3.01	0.53
5. 対人関係スキル	.06	.14 *	-.29 ***	.30 ***	(.80)			3.79	0.64
6. 効果的コミュニケーション	.03	.56 ***	.27 ***	.20 **	.29 ***	(.74)		3.17	0.71
7. 情動への対処	-.02	.30 ***	-.09	.26 ***	.23 ***	.24 ***	(.79)	3.05	0.96

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

注) 相関表の括弧内の値は $\alpha$ 係数を表す。

Table 9-2. Dark Triad からライフスキルへの標準偏回帰係数

	マキャベリアニズム			自己愛傾向			サイコパシー傾向			$R^2$
	$\beta$	95%CI	$p$	$\beta$	95%CI	$p$	$\beta$	95%CI	$p$	
意思決定	.25	[.13, .36]	<.001	.21	[.09, .34]	.001	-.21	[-.33, -.08]	.002	.10 ***
対人関係スキル	.12	[.01, .23]	.039	.32	[.20, .44]	<.001	-.46	[-.58, -.34]	<.001	.18 ***
効果的コミュニケーション	-.07	[-.18, .03]	.150	.55	[.44, .66]	<.001	.05	[-.06, .16]	.391	.32 ***
情動への対処	-.03	[-.14, .09]	.670	.42	[.29, .54]	<.001	-.26	[-.39, -.14]	<.001	.15 ***

\*\*\*  $p < .001$

ムの他者操作における巧みさを反映したものだと考えられる。すなわちマキャベリアニズムが高い者は他者を操作する上であらかじめ情報を収集し、うまく計画を練り、対人関係において上手く取り入ることが考えられる。ただし、マキャベリアニズムと対人関係スキルとの正の関連については効果量が.20を下回る低い値であった ( $\beta = .12$ )。対人関係スキルは広く共感性と関わる概念であるが (嘉瀬他, 2016), マキャベリアニズムは共感性のうち情動的共感性とは負の関連, 認知的共感性とは正の関連が示されており (Turner, Foster, & Webster, 2019), このような共感性との部分的な関連が, 本研究の結果における効果量の低さに反映されたものと考えられる。

また, マキャベリアニズムと情動への対処との間にほとんど関連が示されなかった点も仮説を支持しない結果であった。本研究ではマキャベリアニズムとメンタル・タフネスとの間に負の関連を示した Lin et al. (2017) の結果に基づいて情動への対処との間に負の関連を示すと仮説を立てていた。しかし, Jones & Paulhus (2009) が指摘するようにマキャベリアニズムが不安に関連する傾向性を示すのはマキャベリアニズムの警戒的な側面によるものであり, マキャベリアニズム自体に内在化問題が生じているわけではないとも考えられる。本研究ではメンタル・タフネスのようにスポーツ競技に限ったものではなく, より全般的にネガティブな精神状態に対する前向きな対処を測定しているために, 本研究のような結果が得られたと考えられる。

また, 本研究の結果から, 自己愛傾向は対人関係スキルおよび効果的コミュニケーションと有意な正の関連を示した。この結果は自己愛傾向が高い者は初対面においては印象が良いことを示した Back et al. (2010) の結果と整合的であり, 自己愛傾向が高い者は自身の誇大性を強調する上で効果的なライフスキルを身に付けている可能性が考えられる。また, Back et al. (2010) は自己愛傾向から印象の良さを媒介する変数として, 「派手で整った服装」 (flashy and neat dress), 「チャーミングな表情」 (charming facial expression), 「自信のある身振り」 (self-assured body movement) が媒介することを示して

いるが、本研究の結果はそれらに加えてより一般的な対人関係におけるコミュニケーションの上手さがあることを示唆するものであった。また、情動への対処と正の関連を示した結果は、自己愛傾向とスポーツ競技におけるメンタル・タフネスとの間に正の関連を示した Vaughan et al. (2018) の結果と整合的であり、自己愛傾向の誇大性の認知が反映したものだと考えられる。

サイコパシー傾向が高い者は意思決定や対人関係スキル、情動への対処と負の関連を示した。これらの結果はサイコパシー傾向が高い者の非機能的衝動性 (Jones & Paulhus, 2011) や、ネガティブな切迫性 (Gray et al., 2019) と整合的な結果であった。すなわち、サイコパシー傾向は自身の地位を向上させるような機会に直ぐに反応して強引にでも他者を操作すると考えられ、また、ネガティブな情動が喚起されるような状況下においては他者のことを顧みずにそのネガティブな情動を解消しようとすることが示唆される。

以上のように、本研究では Dark Triad のライフスキルにおける傾向性が示された。マキャベリアニズムは情報を収集したり計画を立てたりする上で社会適応的な特徴があり、自己愛傾向は全般的なライフスキルを備えた特性であるという点において、社会適応的な特徴があることが示唆された。また、サイコパシー傾向は意思決定や対人関係スキル、情動への対処の低さによって社会不適応的な特徴があることが示唆された。

## 第 2 節 研究 8: Dark Triad とコーピングスタイルとの関連

### 目的

本研究の目的は Dark Triad のコーピングスタイルとの関連を検討することである。前述したように、コーピングスタイルは多次的に捉えれば「気晴らし」、「積極的コーピング」、「否認」、「アルコール、薬物使用」、「情緒的サポートの利用」、「道具的サポートの利用」、「行動的諦め」、「感情表出」、「肯

定的再解釈」, 「計画」, 「ユーモア」, 「受容」, 「宗教・信仰」, 「自己非難」の次元が想定される (Carver, 1997)。先行研究および Dark Triad の統合モデルに基づけば, マキャベリアニズムは自身の利益を得るために長期的な観点からありとあらゆる方略をとることが考えられるため, マキャベリアニズムが高い者は計画的にコーピングをする一方で上手く情動をコントロールしたり, 自らの振る舞いを反省したりするような傾向性も示されることが考えられる (マキャベリアニズムの他者操作に対応)。また, 自己愛傾向は自身の能力を誇大に評価することを特徴とする概念であるため, 肯定的再解釈と正の関連を示すことが考えられるうえ, 自己愛傾向が高い者ほどストレスに対して有効に対処できると考え, 積極的にコーピングを行うことが考えられる (自己愛傾向の感じの良さに対応)。サイコパシー傾向が高い者は刹那的にストレスを解消しようと考えられるため, ストレッサー自体を回避するようなコーピングを行うことが考えられる (サイコパシー傾向の社会逸脱に対応)。本研究では以上の仮説が支持されるかどうかを検討する。

## 方法

### 手続き

大学生を対象に, Web 調査によって回答を求めた。調査時期は 2015 年 11 月であった。

### 調査対象者・分析対象者

調査対象者は大学生 361 名 (男性 125 名, 女性 236 名) であった。全ての参加者において欠損項目がみられなかったため, 361 名のデータを分析対象者とした。平均年齢は 21.42 歳 ( $SD = 1.81$ ) であった。

### 測定項目



**Dark Triad** Dark Triad の測定には、研究 1, 2 で作成された日本語版 Short Dark Triad (SD3-J) を用いた。SD3-J に対して、5 件法（「全くそう思わない (1 点)」～「非常にそう思う (5 点)」）で回答を求めた。

**コーピング** コーピングスタイルの測定には、日本語版 Brief COPE (岩崎・大塚・佐々木・毛利, 2007; 大塚, 2008; Otsuka, Sasaki, Iwasaki, & Mori, 2009) を用いた。日本語版 Brief COPE は各 2 項目、全 30 項目で構成され、気晴らし (項目例:「そのことから気をそらすために、仕事や他の活動にとりかかる」), 積極的コーピング (項目例:「自分が置かれている状況について何かをすることに集中する」), 否認 (項目例:「これは現実ではない」と自分に言い聞かせる」), アルコール・薬物使用 (項目例:「気分をよくするためにお酒や薬を飲む」), 情緒的サポートの利用 (項目例:「誰かから精神的な支えを得る」), 道具的サポートの利用 (項目例:「誰かから援助やアドバイスを得る」), 行動的諦め (項目例:「それに取り組もうとすることをあきらめる」), 感情表出 (項目例:「口に出して不快な気持ちから逃れようとする」), 肯定的再解釈 (項目例:「それがよりよく思えるように、別の視点から見ようとする」), 計画 (項目例:「何をすべきか戦略を立てようとする」), ユーモア (項目例:「それについて冗談を言う」), 受容 (項目例:「それが起こったという現実を受け入れる」), 宗教・信仰 (項目例:「宗教や自分の信念の中にやすらぎを求めようとする」), 自己非難 (項目例:「自分自身を批判する」) で構成される。日本語版 COPE に対しては 4 件法（「まったくそうしない (1 点)」～「いつもそうする (4 点)」）で回答を求めた。なお、教示文は大塚 (2008) を参考に、「以下では、あなたが困った出来事やいやな出来事を体験した時に、あなた自身が普段どのように感じたり、対応したりしているかをお聞きします。もちろん、出来事が異なれば対応の仕方も異なります。しかし、いやな出来事に直面しているときに、あなたがいつもどのように対応しているかを考えてお答え下さい」とした。

## 結果

## 日本語版 Brief COPE の探索的因子分析

日本語版 Brief COPE はコーピングスタイルを広範に収集した尺度であるために 14 もの下位尺度で構成されているが、必ずしも下位尺度間が無相関であるわけではない (e.g., Knoll, Rieckmann, & Schwarzer, 2005)。そこで、尺度の儉約性の観点から、日本語版 Brief COPE の下位尺度得点に対して探索的因子分析を行った。因子数を決定するために平行分析および MAP テストを行ったところ、2 因子もしくは 4 因子が提案された。2 因子もしくは 4 因子に設定した上で最尤法、プロマックス回転にて探索的因子分析を行い、因子負荷量を解釈したところ、解釈可能性の観点から 4 因子が採用された。どの因子に対しても .30 に満たなかった「感情表出」を除き、再度探索的因子分析を行ったところ、Table 9-3 に示すような因子負荷量が算出された。

第 1 因子は「計画」、「積極的コーピング」、「受容」、「肯定的再解釈」に高い因子負荷量を示しており、これらはストレスをポジティブに受け入れそれに対して積極的に取り組むような内容であることから、「積極的対処」と命名した。第 2 因子は「情緒的サポートの利用」、「道具的サポートの利用」に高い因子負荷量を示しており、これらはストレス状況下において他者からのサポートを受けようとするような内容であることから、「サポートの利用」と命名した。第 3 因子は「否認」、「宗教・信仰」、「ユーモア」、「アルコール・薬物使用」に高い因子負荷量を示しており、これらはストレス状況を否定することによってストレスを回避しようとする内容であることから、「現実回避」と命名された。第 4 因子は「気晴らし」、「行動的諦め」、「自己非難」に高い因子負荷量を示しており、ストレス状況を認めつつも対処することを放棄するような内容であることから「降伏的態度」と命名された。

Table 9-3. 日本語版 Brief COPE の因子負荷量

	第1因子 積極的対処	第2因子 サポート利用	第3因子 現実回避	第4因子 降伏的態度
計画	<b>.83</b>	-.10	-.04	.13
積極的コーピング	<b>.69</b>	-.01	-.02	.04
受容	<b>.69</b>	-.02	-.14	-.02
肯定的再解釈	<b>.47</b>	.11	.32	-.05
情緒的サポートの利用	-.14	<b>1.07</b>	-.06	.02
道具的サポートの利用	.05	<b>.73</b>	-.04	.00
否認	-.15	-.04	<b>.67</b>	.18
宗教・信仰	.00	-.05	<b>.60</b>	-.08
ユーモア	.19	.03	<b>.55</b>	-.04
アルコール・薬物使用	-.09	-.01	<b>.43</b>	.01
気晴らし	.13	.10	-.02	<b>.58</b>
行動的諦め	-.23	.01	.13	<b>.58</b>
自己非難	.06	-.05	-.04	<b>.42</b>
因子間相関				
第2因子 (サポート利用)	.53	—		
第3因子 (現実回避)	-.04	.18	—	
第4因子 (降伏的態度)	-.17	.17	.28	—

注) 太字は因子負荷量.40以上を表す。

### 尺度得点の算出・相関

各尺度の記述統計量、 $\alpha$  係数、および各特性間の相関係数を算出し、Table 9-4 に示した。 $\alpha$  係数は気晴らし ( $\alpha = .34$ ) 以外はいずれも先行研究と同様の値を示した。気晴らしの  $\alpha$  係数については項目数が 2 項目であることや、先行研究 (岩崎他, 2007; 大塚, 2008; Otsuka, Sasaki, Iwasaki, & Mori, 2009) においても低い値を示していることから、気晴らしも含め、全尺度項目の項目平均を算出し、各尺度得点とした。

各特性の相関については、マキャベリアニズムは計画、積極的コーピング、降伏的態度、気晴らし、自己非難と有意な正の相関を示した。自己愛傾向は積極的対処、肯定的再解釈、現実回避、宗教・信仰、ユーモアと有意な正の相関を示し、降伏的態度およびその下位尺度と有意な負の相関を示した。サイコパシー傾向は積極的対処およびその下位尺度とサポート利用、道具的サポートの利用と有意な負の相関を示し、現実回避およびその下位尺度と降伏的態度、行動的諦めと有意な正の相関を示した。

### 構造方程式モデリング

Dark Triad を互いに統制した時に Dark Triad がコーピングスタイルとどのように関連するのかを検討するために、構造方程式モデリングを用いて検討を行った。Dark Triad の各特性から上位尺度の各コーピングスタイルにパスを引き、Dark Triad の各特性間とコーピングスタイルの各誤差項間に共分散を仮定した飽和モデルを推定した (Figure 9-2)。その結果を Table 9-5 に示す。マキャベリアニズムは積極的対処、降伏的態度と有意な正の関連を示し、自己愛傾向は積極的対処と有意な正の関連、降伏的態度と有意な負の関連を示した。サイコパシー傾向は積極的対処、サポート利用と有意な負の関連を示し、現実回避、降伏的態度と有意な正の関連を示した。

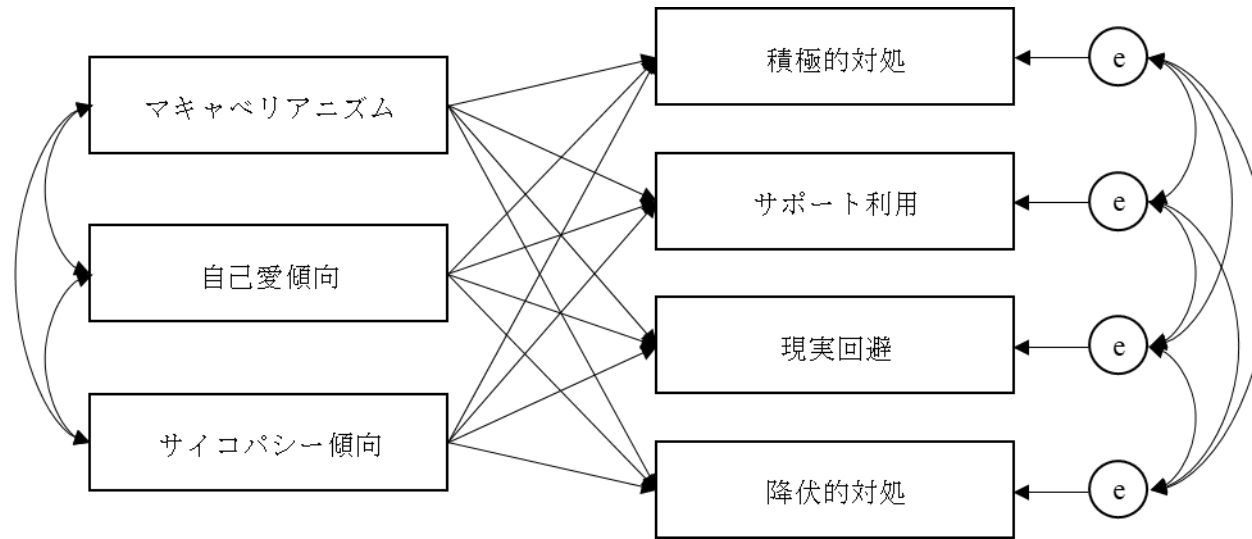


Figure 9-2. Dark Triad からコーピングスタイルへのパスを引いたモデル

Table 9-4. Dark Triad とコーピングスタイルとの相関

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.	12.	13.	14.	15.	16.	17.	18.	19.	20.	21.	
1. マキャベリアニズム	(.76)																					
2. 自己愛傾向	-.08	(.78)																				
3. サイコパシー傾向	.25 ***	.30 ***	(.66)																			
4. 積極的対処	.07	.13 *	-.21 ***	(.79)																		
5. 計画	.11 *	.06	-.18 ***	.80 ***	(.64)																	
6. 積極的コーピング	.12 *	.04	-.15 **	.75 ***	.54 ***	(.47)																
7. 受容	.05	.07	-.21 ***	.75 ***	.53 ***	.45 ***	(.62)															
8. 肯定的再解釈	-.06	.20 ***	-.11 *	.72 ***	.37 ***	.35 ***	.34 ***	(.67)														
9. サポート利用	-.08	.04	-.12 *	.42 ***	.31 ***	.31 ***	.30 ***	.35 ***	(.87)													
10. 情緒的サポートの利用	-.06	.06	-.08	.39 ***	.28 ***	.29 ***	.25 ***	.35 ***	.94 ***	(.80)												
11. 道具的サポートの利用	-.08	.00	-.14 **	.40 ***	.29 ***	.29 ***	.32 ***	.30 ***	.93 ***	.73 ***	(.81)											
12. 現実回避	-.03	.18 ***	.31 ***	-.01	-.07	-.06	-.16 **	.20 ***	.08	.09	.05	(.77)										
13. 否認	-.01	.06	.33 ***	-.14 **	-.15 **	-.14 **	-.30 ***	.10 *	.00	.03	-.02	.72 ***	(.72)									
14. 宗教・信仰	-.07	.26 ***	.21 ***	.00	-.03	-.06	-.09	.13 *	.03	.02	.04	.70 ***	.42 ***	(.67)								
15. ユーモア	-.05	.20 ***	.11 *	.22 ***	.10 *	.10 *	.04	.36 ***	.18 ***	.18 ***	.15 **	.66 ***	.30 ***	.30 ***	(.67)							
16. アルコール・薬物使用	.05	.00	.21 ***	-.10 *	-.12 *	-.06	-.11 *	-.02	.00	.02	-.02	.71 ***	.36 ***	.26 ***	.27 ***	(.86)						
17. 降伏的態度	.23 ***	-.22 ***	.13 *	-.09	-.03	-.07	-.13 *	-.05	.16 ***	.18 ***	.11 *	.22 ***	.30 ***	.09	.09	.14 *	(.68)					
18. 気晴らし	.15 **	-.11 *	.09	.11 *	.03	.07	-.05	.06	.23 ***	.33 ***	.20 ***	.12 *	.26 ***	.09	.18 ***	.13 *	.71 ***	(.34)				
19. 行動的諦め	.09	-.12 *	.21 ***	-.25 ***	-.22 ***	-.24 ***	-.26 ***	-.05	.02	.05	-.01	.24 ***	.37 ***	.14 **	.07	.12 *	.73 ***	.35 ***	(.72)			
20. 自己非難	.20 ***	-.21 ***	.03	-.05	.06	-.01	-.02	-.16 **	.09	.06	.10 *	.11 *	.11 *	.09	.00	.10 *	.71 ***	.21 ***	.24 ***	(.76)		
21. 感情表出	.09	-.11 *	.06	.07	.10 *	.05	-.01	.05	.43 ***	.44 ***	.36 ***	.21 ***	.21 ***	.10 *	.21 ***	.09	.36 ***	.75 ***	.24 ***	.19 ***	(.55)	

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

Table 9-5. Dark Triad からコーピングスタイルへの標準偏回帰係数

	マキャベリアニズム			自己愛傾向			サイコパシー傾向			$R^2$
	$\beta$	95%CI	$p$	$\beta$	95%CI	$p$	$\beta$	95%CI	$p$	
積極的対処	.17	[.07, .27]	.001	.24	[.14, .35]	<.001	-.33	[-.43, -.22]	<.001	.11 ***
サポート利用	-.04	[-.14, .07]	.499	.08	[-.03, .18]	.175	-.13	[-.25, -.02]	.019	.02 **
現実回避	-.10	[-.20, .01]	.067	.08	[-.02, .19]	.112	.31	[.20, .41]	<.001	.11 ***
降伏的態度	.17	[.07, .27]	.001	-.26	[-.36, -.15]	<.001	.17	[.06, .28]	.002	.12 ***

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$

## 考察

本研究の目的は Dark Triad とコーピングスタイルとの関連を検討することであった。まず、日本語版 Brief COPE の探索的因子分析を行い、「積極的対処」、「サポート利用」、「現実回避」、「降伏的態度」の解釈可能な 4 因子が見出された。このうち、「積極的対処」については、代表的なコーピングの枠組み (加藤, 2005) における「問題焦点型対処」に対応するものと考えられる。

本研究の結果から、Dark Triad を互いに統制した時にマキャベリアニズムは積極的対処や降伏的態度と正の関連を示し、自己愛傾向は積極的態度と正の関連、降伏的態度と負の関連を示した。また、サイコパシー傾向は積極的対処やサポート利用と負の関連を示し、現実回避や降伏的態度と負の関連を示した。以上の結果は概ね仮説と同様の結果であった。

従来の研究ではマキャベリアニズムが高い者は問題焦点型対処を行わない傾向にあることが示されていたが (Birkás et al., 2016)、本研究の結果はマキャベリアニズムが高い者ほど問題焦点型対処を行う傾向にあることを示すものであった。Birkás et al. (2016) と本研究の結果の相違は、マキャベリアニズムの戦略的柔軟性によって説明できると考えられる。Jones & Paulhus (2011) はマキャベリアニズムには状況適応の特徴があることを理論的に指摘しており、マキャベリアニズムが高い者は状況に応じて様々な戦略を使い分けていることを指摘している。実際に、本研究の結果でもマキャベリアニズムは積極的対処だけでなく降伏的態度とも正の関連を示した。したがって、Birkás et al. (2016) の結果と本研究の結果の不整合は、マキャベリアニズムのストレス状況に応じた最適な戦略的方略の使いわけによるものだと考えられる。

Birkás et al. (2016) では自己愛傾向が高い者は問題焦点型対処の中でも計画的問題解決、自己統制、肯定的再解釈と正の関連を示し、責任受容や脱出-回避と負の関連を示していた。本研究によって示された自己愛傾向と積極的



対処との正の関連、降伏的態度との負の関連、とりわけ、肯定的再解釈との正の相関、自己非難と負の相関を示した点は、これらの結果と整合的な結果であり、自己愛傾向の自己高揚的な認知傾向 (Paulhus & John, 1998) が反映されたものと考えられる。

本研究ではサイコパシー傾向が高い者ほど積極的対処、サポート利用を行わず、現実回避、降伏的態度を行う傾向にあることが示された。これらはサイコパシー傾向が高い者が問題焦点型対処、計画的な問題解決をしない傾向にあることを示した Birkás et al. (2016) と整合的な結果であり、サイコパシー傾向の低いセルフ・コントロール傾向 (Jonason & Tost, 2010) やネガティブな切迫性 (Gray et al., 2019) が反映されたものと考えられる。本研究の結果は先行研究 (Birkás et al., 2016) を拡張するものであり、ストレス状況を回避する傾向性やアルコールや薬物を使用する傾向性など、サイコパシー傾向が高い者のより具体的なコーピング傾向が明らかにされた。

本研究ではサイコパシー傾向はサポート利用と有意な負の関連を示し、また、マキャベリアニズムや自己愛傾向とサポート利用は有意な関連は示されなかった。これらの結果は研究 3 においてこれらの概念が他者操作と関連しなかった結果と矛盾するような結果であるようにも思われる。この点に関して、Dark Triad の概念内容から、Dark Triad の各特性が高い者は他者を巧みに操作する一方で、他者に対して明示的に助けを求めることはしない傾向にあることが考えられ、そのことが本研究の結果に反映されたことが考えられる。

### 第 3 節 総合考察

研究 7, 8 では、ライフスキルとコーピングスタイルに着目して Dark Triad との関連を検討することによって、Dark Triad の統合モデルの妥当性を検討した。研究 7, 8 の主要な結果をまとめると、以下の通りである。Dark Triad を互いに統制した時、マキャベリアニズムは意思決定と有意な正の関連を示し、また、積極的対処や降伏的態度と有意な正の関連を示した。自己愛傾向

は全てのライフスキルと有意な正の関連を示し、また、積極的対処と有意な正の関連を、降伏的態度と有意な負の関連を示した。サイコパシー傾向は意思決定や対人関係スキルと負の関連を示し、現実回避、降伏的態度と正の関連を示し、積極的対処やサポートの利用と負の関連を示した。

マキャベリアニズムが高い者は、Dark Triad の統合モデルに基づけば、長期的な利益を獲得したり、資源を維持したりする上で計画的かつ効率的に物事に対処することが想定された。これはマキャベリアニズムの「他者操作」に対応するものである。本研究で得られた結果は全体としてこのような想定を裏付けるものであった。マキャベリアニズムが高い者は長期的な利益を獲得する上で有益な情報を集めたり、それに基づいて計画を立てたりする傾向にあり、ストレス状況下においてもストレスを解消する手立てを計画的に考えることが示唆される。

自己愛傾向が高い者は誇大な自己イメージを確証したり、維持したりする上で社会適応的な振る舞いを見せることが想定された。これは自己愛傾向の「感じの良さ」に対応するものである。本研究の結果は、Dark Triad の統合モデルを支持するものであった。自己愛傾向が高い者は初対面の相手に対して適応的な立ち居振る舞いを行い、ストレス状況下においても自己肯定的にストレスを捉える傾向にあることが示唆される。

サイコパシー傾向が高い者は目先に社会的地位向上の機会があれば強引に飛びつき、欲求充足を満たすために必ずしも長期的な利益には結びつかない傾向にあり、全般的に社会不適応的な傾向性と関連を示すことが想定された。これはサイコパシー傾向の「社会逸脱」に対応するものである。本研究の結果はこれを支持するものであった。サイコパシー傾向が高い者は自身の社会的地位を向上させるうえで将来の展望や他者の利害を度外視し、また、ストレス状況下においても当面の問題解決を図ろうとすることが示唆される。

## 第十章 總括的討論

本研究の全体の目的は、Dark Triad の統合モデルにおける行動的側面の妥当性を検討することであった。まず、Dark Triad の測定尺度を確立するために、研究 1, 2 では海外で作成された比較的信頼性・妥当性の高い Dark Triad 尺度の日本語版を作成し、その信頼性および妥当性を確認した。その後、対人方略、反社会性、社会適応性の 3 つの観点から、Dark Triad の統合モデルが妥当なモデルであるとすれば得られると予測される関連が、実際に確かめられるかどうかを検討してきた。Figure 10-1 に Dark Triad の統合モデルと本研究で検討した箇所について示した。以下では、Dark Triad の統合モデルの各行動的側面について、本研究の結果と合わせてその整合性を整理する。

## 第1節 Dark Triad の統合モデルの妥当性

### 自己愛傾向

自己愛傾向の「感じの良さ」については研究 3, 研究 7, 研究 8 において検討された。全体として仮説を支持する結果が得られており、自己愛傾向が高い者ほど自己優越の立場から他者の感情を操作し、ポジティブな認知をもとに積極的にストレスに対処することが示唆された。「攻撃行動」については研究 4, 5 において検討され、仮説通り、研究 4 では自己愛傾向が高い者が対人葛藤場面で強制的に葛藤を解決しようとする傾向が示された。その一方で、研究 5 において自己愛傾向は攻撃行動と関連を示さなかった。この点については前述のとおり、本研究では状況を設定せずに尺度間の関連に基づいた結果のみを提示しているために関連が示されなかった可能性が考えられる。

Dark Triad の統合モデルでは予測されなかった関連として研究 6 では、確信区間は 0 を含むものであったものの、自己愛傾向とゴミのポイ捨て傾向との関連が示唆された。この関連については自己愛傾向が高い者の実験者に対する攻撃行動として捉えられる一方で、自己愛傾向が高い者の特権意識に基づくものである可能性もある。特権意識に基づく反社会性については Dark

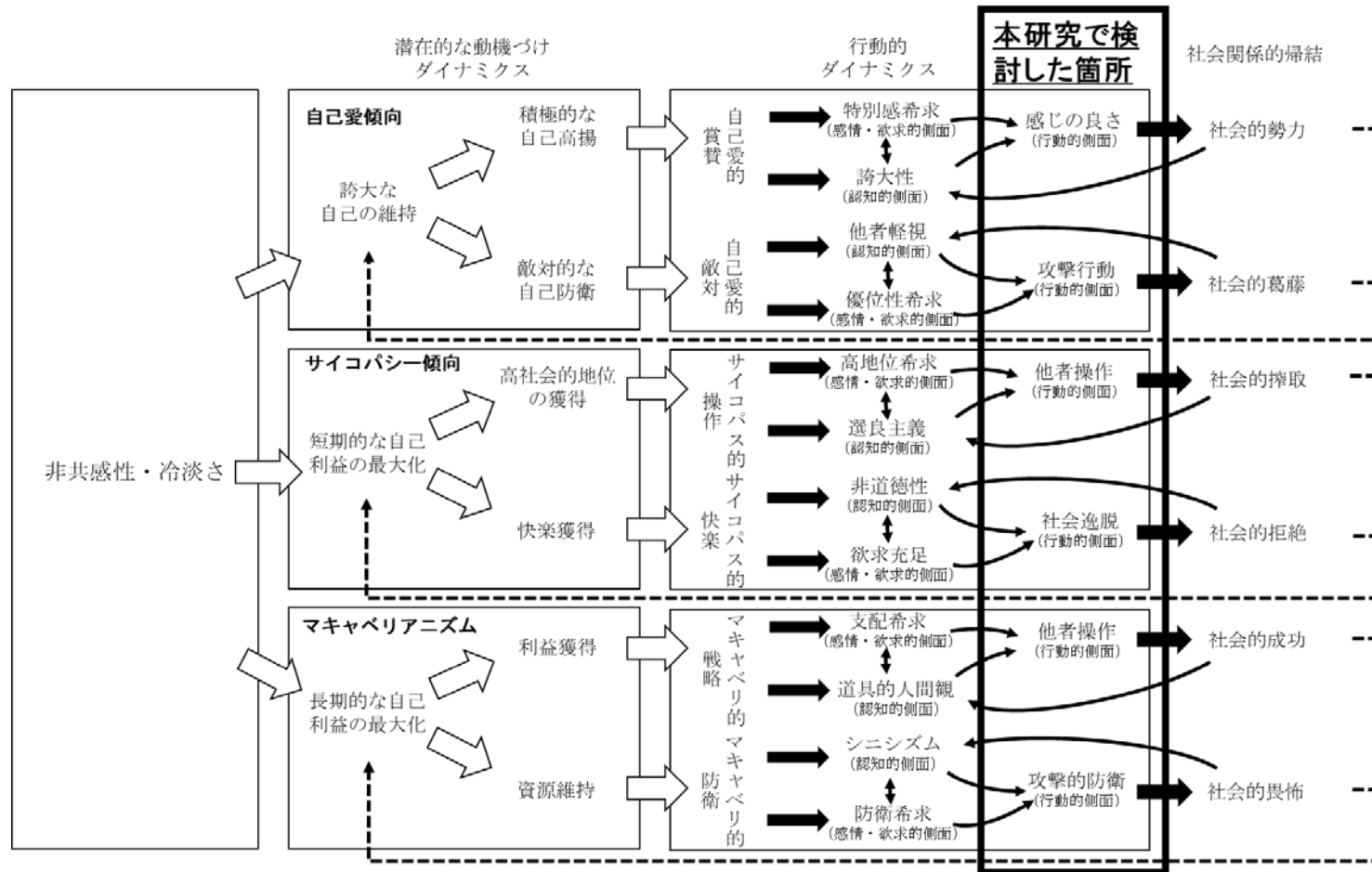


Figure 10-1 Dark Triad の統合モデルと本研究で検討した箇所

Triad の統合モデルには含まれておらず、今後、特権意識に基づく反社会性を含める必要があるかどうかも含めて検討が必要であろう。

### サイコパシー傾向

サイコパシー傾向の「他者操作」の側面については、研究 3 において検討された。その結果は仮説を支持するものであり、自己愛傾向やマキャベリアニズムを統制した上でも、サイコパシー傾向が高い者は様々な方略を用いて他者操作を行っていることが示唆された。「社会逸脱」については研究 4、研究 5、研究 6、研究 8 において検討され、全体として仮説を支持する結果であった。サイコパシー傾向が高い者は対人葛藤場面で強制的に葛藤解決をしようとする傾向や、ゴミをポイ捨てする傾向、ライフスキルが低い傾向、刹那的なコピーングを行う傾向にあることが示唆された。

### マキャベリアニズム

マキャベリアニズムの「他者操作」については、研究 3、研究 7、研究 8 において検討された。結果は仮説を支持するものであり、マキャベリアニズムが高い者は多様な他者操作方略を用いて操作を行っていることや、計画的に意思決定すること、多様なコピーング方略を用いる傾向にあることが示唆された。「攻撃的防衛」については、研究 4、研究 5 において検討され、その結果は全体として仮説を支持する結果であった。マキャベリアニズムが高い者は対人葛藤場面において相互妥協的に葛藤を解決しようとすることや、関係性攻撃を行う傾向にあることが示された。

## 第 2 節 Dark Triad の統合モデルの意義

本研究の結果によって Dark Triad の統合モデルの全体の妥当性が確認されたわけではないものの、行動的側面に関しては Dark Triad の統合モデルと整合的な結果が得られた。Dark Triad の統合モデルは近年の Dark Triad の概念

理解に関する議論にいくつかの示唆をもたらす。第 1 に Dark Triad の各特性のファセットの問題である。Dark Triad は「オーバーラップしつつも、それぞれ独自の特徴を有する特性のまとまり」としてコンセンサスを得ているものの (Furnham et al., 2013; Jonason & Middleton, 2015; Jones & Paulhus, 2010a; Paulhus, 2014), 近年の議論では, 従来の Dark Triad 研究は Dark Triad の各特性のファセットをほとんど考慮していないという問題が指摘されている (Muris et al., 2017)。第 2 に Dark Triad の進化的基盤に関する問題である。Dark Triad の統合モデルが正しければ, Dark Triad の各特性はそれぞれ適応・不適応の水準が異なり, それは進化的な観点からみても進化適応度に差をもたらすと考えられる。第 3 に, Dark Triad の形成に関する問題である。前述したように Dark Triad は遺伝要因の影響だけでなく非共有環境の影響も受ける特性であることが示されているが, Dark Triad の統合モデルに基づけばそれぞれが異なる非共有環境の影響を受けると考えられる。以上の 3 点についてそれぞれ論じたうえで, 最後に, 本研究の限界と今後の展望を述べる。

#### Dark Triad の各特性のファセット

Dark Triad の各特性はその初出である Paulhus & Williams (2002) 以降, 主に単一次元, もしくは, 別個の 3 特性として扱われてきた。この点に関して, ある構成概念が単一次元に布置される構成概念であるのか多次元的な構成概念であるのかは, その構成概念の下位側面同士が相互に交換可能かどうかによって判断されるであろう。McCrae (2014) はこのような違いを数学の共通集合 (intersection;  $\cap$ ) と和集合 (union;  $\cup$ ) のアナロジーで表現している。数学ではこれらの集合は要素の有無で表現されるが, 心理尺度の場合には量 (quantity) で表現される (McCrae, 2014)。ある構成概念がその下位側面の共通集合で表現されるような特性であれば, その下位側面同士は相互に交換可能な特性であろう (McCrae, 2014)。その一方で, ある構成概念がその下位側面の和集合で表現されるような特性であるならば, その下位側面同士は相関

があったとしても同一の特性であることは必ずしも仮定されない (McCrae, 2014)。下位側面同士が同一かどうかは、その下位側面同士の相関係数の大きさや各下位側面の外部基準との関連の相違、上位概念を統制した際の各下位側面の増分妥当性などによって評価されるであろう。下位側面が相互に交換可能であれば、その相関係数は非常に高い値を示すであろうし、外部基準との関連にも違いは見出されず、増分妥当性もないことが考えられる。

第二章で論じられたように、また、本研究の結果でも示されたように、Dark Triad の 3 特性はそれぞれ外部基準と独自の関連を示す。それに加え、増分妥当性に関して、Dark Triad は全般的なパーソナリティ次元においては、Big Five の協調性次元、もしくは HEXACO の正直さ-謙虚さ次元に位置づけられる特性であることが示されてきた (Muris et al., 2017; O'Boyle et al., 2015; Vize et al., 2018)。したがって、(低い) 協調性や正直さ-謙虚さは Dark Triad の上位概念として位置づけられるが、Dark Triad は協調性や正直さ-謙虚さを統制しても外部基準との関連が確かめられており (e.g., Burtăverde, Chraif, Aniței, & Mihăilă, 2016; Lee et al., 2013; Pilch & Górnik-Durose, 2016)、その増分妥当性が示されている。以上の点を考慮し、これまでの Dark Triad 研究は 3 特性をそれぞれ別個に測定し、検討が進められてきた。

しかし、Dark Triad を研究対象として扱う際には、3 特性だけでなく 3 特性のそれぞれのファセットも考慮する必要がある可能性がある。Dark Triad の統合モデルが想定しているように、Dark Triad の各特性における下位側面は同一のものではなく、それぞれが異なる心理社会的変数と関連を示すような特性であるとするれば、Dark Triad の 3 特性のファセットまで考慮する必要があるであろう。Dark Triad の 3 特性自体のファセットが考慮されていない問題は Muris et al. (2017) も指摘しており、Dark Triad の統合モデルはそのような問題提議に対する 1 つの回答となると考えられる。

特に、Dark Triad と適応的および不適応的なアウトカムとの関連を示す際には、Dark Triad の各特性の下位側面によって相反する関連を示す可能性が



あるため、Dark Triadの各特性の多次元性を考慮せずにDark Triadの3特性だけを検討対象とするとDark Triadと適応性・不適応性との関連が不明瞭になる恐れがある。ただし、目的によっては多次元性を考慮せず、Dark Triadの3特性で十分な場合もあると考えられる。例えばDark Triadの差異自体を問題とする場合 (e.g., Jones & Paulhus, 2011; Jones & Paulhus, 2017) や、理論的にDark Triadの各特性の下位側面が同じ関連を示すことが想定されるような場合が挙げられる。例えば、認知傾向や動機づけ、態度のような高次の次元にある概念とDark Triadとの関連や、社会的に重要な行動の説明においてDark Triadの各特性の下位側面が複合的に予測力に貢献している場合などが挙げられる。このように理論的にDark Triadの下位側面が外部基準と同じ関連を示すかどうか、また、複合的に予測力を高めるかどうかを想定する上でも、Dark Triadの統合モデルは一定の役割を果たすと考えられる。

**Dark Triadの測定尺度** Dark Triadの各特性の下位側面まで検討するためには、Dark Triadの下位側面まで測定することのできる尺度を用いる必要がある。現在海外で用いられているDark Triadの標準的な尺度はDark Triadを簡便に測定するSD3 (Jones & Paulhus, 2014) か、それぞれのDark Triad尺度であるMach-IV (Cristie & Geis, 1970), NPI (Raskin & Hall, 1979), SRP-III (Williams et al., 2007) であるが、SD3はDark Triadの下位側面を測定することができないために、Dark Triadの各特性の下位側面を検討するためにはそれぞれのDark Triad尺度を使う必要がある。しかし、それぞれのDark Triad尺度についても問題が指摘されており、Glenn & Sellborn (2015) の知見ではMach-IVやNPIによって測定されるマキャベリアニズムや自己愛傾向はサイコパシー傾向の下位側面であることが報告されている。また、Muris et al. (2017) のメタ分析では、Mach-IVはサイコパシー傾向の尺度と他指標との関連がほとんど変わらないことが示されている。以上の点から、Dark Triadの統合モデルに基づいた新たなDark Triad尺度が求められる。自己愛傾向についてはNARCに基づいて作成されたNARQ (Back et al., 2013) が有力である。

マキャベリアニズムについては未だ有力な尺度が作成されておらず、新たなマキャベリアニズム尺度が求められている (Muris et al., 2017)。

我が国における Dark Triad 尺度の現状としては、Mach-IV の日本語版 (中村他, 2012) および NPI の日本語版 (Fukushima & Hosoe, 2011; 小西他, 2006; 小塩, 1998) が作成されているものの、SRP-III の全項目の日本語版は作成されていない。ただし、サイコパシー傾向の一次性サイコパシーおよび二次性サイコパシーを測定することのできる Levenson Self-Report Psychopathy (LSRP; Levenson et al., 1995) の日本語版 (杉浦・佐藤, 2005; 大隅他, 2007) や、SRP-III の短縮版 (Gordts, Uzieblo, Neumann, Bussche, & Rossi, 2017) の日本語版 (柳田・新井・藤, 2018) は作成されている。我が国における今後の研究においては NARQ の日本語版尺度を作成するとともに、Dark Triad の統合モデルに基づいてマキャベリアニズムの多次元性を考慮した新たなマキャベリアニズム尺度を作成し、国際比較を行っていくことが必要であろう。

### Dark Triad の進化的基盤

Dark Triad の進化的基盤については、従来では第 2 章で記述したように生活史理論に立脚して論じられてきた。しかし、前述したように単純に Dark Triad と速い生活史戦略とを結びつけるのは早計であると考えられる。この点に関連して、生活史理論の観点から言えば、ヒトという種は他の種に比べて遅い生活史戦略をとることが知られている (Morgan et al., 2013)。ヒトという種の中では早い生活史戦略をとる個体は相対的に少なく、そのために広く人口に分布するパーソナリティとの関連が認められないとも考えられる。

それでは、Dark Triad の進化過程としてはどのような説明が考えられるのであろうか。Dark Triad の統合モデルは Dark Triad の各特性に適応的な側面と不適応的な側面の両面を異なる動機づけプロセスで布置したものである。したがって、Dark Triad を、通状況的に不適応的な特性ではなく、個々の状況において適応・不適応が両極で行き来するような特性として捉えるモデル

である。この適応・不適応が進化的な適応性に関連するものであるとすれば、Dark Triadは比較的進化適応性の高い環境的ニッチ (environmental niche) において一定の割合で自然選択された特性であると考えられる。

Penke, Denissen, & Miller (2007) や Nettle (2007 竹内訳 2009) はパーソナリティ特性はある環境ではベネフィットとして働き、ある環境ではコストとして働くために、パーソナリティ特性の個人差が進化的に維持されてきたことを論じている。Dark Triadもこのようにして維持されてきたとすれば、Dark Triadの各特性はそれぞれに共通のコストとベネフィットと固有のコストとベネフィットのもとで遺伝的に分散し、環境との相互作用の中で形成されていくことが考えられる。Dark Triadに共通のコストとベネフィットについては、ベネフィットとしては短期的な配偶傾向が挙げられるであろう (e.g., Jonason et al., 2009)。コストとしては、社会的評判が下がることによる所属集団における社会的排斥が挙げられる (e.g., Rauthmann & Kolar, 2012)。Dark Triadの各特性に固有のコストとベネフィットについては、Dark Triadの統合モデルの「社会関係的帰結」にある適応・不適応が対応すると考えられる。

### Dark Triad に対する環境の影響

第二章で論じられたように、Dark Triadの各特性は遺伝的基盤を有する概念である一方で、非共有環境の影響も認められている。Dark Triadの統合モデルが妥当なモデルであるとするならば、各特性の高低に影響を与える非共有環境の影響はどのようなものが考えられるであろうか。

近年、Jonason, Icho, & Ireland (2016) が生活史理論の枠組みに基づいてDark Triadと幼少期の環境の厳しさや予測不可能性との関連を検討している。その結果、Dark Triadと幼少期の予測不可能性の高さとの間に弱い関連が示された。Jonason et al. (2016) は行動遺伝データを用いた検討を行っていないため、これらの環境要因が共有環境に相当するのか非共有環境に相当するのかわかりませんが、前述の行動遺伝学的な研究知見に基づけば、非共有環境

としての予測不可能性が、Dark Triad の高低に影響を及ぼしていると考えられる。具体的には、Dark Triad の統合モデルとこの知見を踏まえると、Dark Triad のいずれかが高い者は、それぞれ幼少期に予測不可能な環境に対して様々な対処行動を行い、その対処行動の仕方およびフィードバックを受けて発達してきたと考えられる。予測不可能性に対して周りを上手くコントロールしたり資源を維持したりすることによって対処できた場合には、マキャベリアニズムが高くなることが考えられる。また、予測不可能な環境下においては環境の変動性が大きく、それに伴って自尊感情も大きく揺れ動くと考えられる。このような自尊感情の変動性に対して誇大な自己イメージを顕示することで対処した場合には自己愛傾向が高くなる可能性がある。予測不可能性に対して、直ぐに変動する環境を逃さないために短期的な利益を求めることで対処した場合にはサイコパシー傾向が高くなる可能性が考えられる。

### 第 3 節 本研究の限界と今後の展望

本研究の結果は全体として Dark Triad の統合モデルを支持するものであり、Dark Triad の統合モデルは現在の Dark Triad 研究の中でいくつかの示唆をもたらすモデルであると考えられる。ただし、本研究は Dark Triad の統合モデルの妥当性を確固たるものにするためには些か足りない点がある。以下では、その限界点について 3 点を取りあげて論じ、今後の展望を示す。

本研究の限界点として第 1 に、Dark Triad の統合モデルを支持するような心理測定的な検討を行っていない点が挙げられる。本研究では Dark Triad の統合モデルの妥当性の実証的知見が蓄積されていないために、まず Dark Triad の統合モデルが支持されるかどうかを実証的に検討することを目的とした。その結果は Dark Triad の統合モデルを支持するものであったが、Dark Triad の統合モデルの妥当性を確固たるものにするためには、Dark Triad の統合モデルに沿った Dark Triad の各特性を二次元で捉えた心理尺度を作成し、その妥当性を検討することが必要であろう。自己愛傾向の尺度である NARC

の邦訳版尺度やマキャベリアニズム，サイコパシー傾向の新たな尺度を作成し，その構成概念妥当性を検討することが必要である。

第 2 に，本研究では Dark Triad の統合モデルにおけるプロセスには言及していない点が挙げられる。本研究では Dark Triad 間にどのような差異が生じるのかを確認することによって，Dark Triad の統合モデルの妥当性を検討してきた。このような検討方法をとることによって，Dark Triad の各特性のモデルに含まれる特徴についてそれぞれの独自の特徴を見出すことができた。しかし，Dark Triad の統合モデルは動機づけシステムから行動システム，そして社会的アウトカムへ至るダイナミックなモデルであるという性質上，そのプロセスについての検討を行うことも欠かせない。今後の研究においてはそれぞれのダイナミックなプロセスを検討することが求められる。

第 3 に，本研究では Dark Triad の統合モデルにおけるフィードバックループの妥当性について検討できなかった点が挙げられる。Dark Triad の統合モデルで想定されたフィードバックループは Dark Triad の各特性が受ける環境からの影響を反映したものといえ，Dark Triad の発達過程を理解する上で重要な側面であると考えられる。今後の研究においては縦断的研究や実験室実験によりこれらのフィードバックループを検討することが必要である。

## 引用文献

- Ackerman, R. A., Witt, E. A., Donnellan, M. B., Trzesniewski, K. H., Robins, R. W., & Kashy, D. A. (2011). What does the narcissistic personality inventory really measure? *Assessment, 18*, 67-87.
- Aghababaei, N., & Błachnio, A. (2015). Well-being and the dark triad. *Personality and Individual Differences, 86*, 365-368.
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 5th ed. Washington, DC: American Psychiatric Association.
- Andrew, J., Cooke, M., & Muncer, S. J. (2008). The relationship between empathy and Machiavellianism: An alternative to empathizing-systemizing theory. *Personality and Individual Differences, 44*, 1203-1211.
- Aneshensel, C. S., Rutter, C. M., & Lachenbruch, P. A. (1991). Social structure, stress, and mental health: Competing conceptual and analytic models. *American Sociological Review, 4*, 166-178.
- Aniskiewicz, A. S. (1979). Autonomic components of vicarious conditioning and psychopathy. *Journal of Clinical Psychology, 35*, 60-67.
- Babiak, P., & Hare, R. D. (2006). *Snakes in Suits: When Psychopaths go to work*. New York, NY: Harper Collins Publishers.
- Back, M. D. (2018). The Narcissistic Admiration and Rivalry Concept. In A. D. Hermann, A. B. Brunell, & J. D. Foster (Eds.), *Handbook of Trait Narcissism* (pp. 57-67). Cham: Springer International Publishing.
- Back, M. D., Küfner, A. C. P., Dufner, M., Gerlach, T. M., Rauthmann, J. F., & Denissen, J. J. A. (2013). Narcissistic admiration and rivalry: Disentangling the bright and dark sides of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology, 105*, 1013-1037.

- Back, M. D., Schmuckle, S. C., & Egloff, B. (2010). Why are narcissists so charming at first sight? Decoding the narcissism popularity link at zero acquaintance. *Journal of Personality and Social Psychology, 98*, 132-145.
- Banny, A. M., Heilbron, N., Ames, A., & Prinstein, M. J. (2011). Relational benefits of relational aggression: Adaptive and maladaptive associations with adolescent friendship quality. *Developmental Psychology, 47*, 1153-1166.
- Baughman, H. M., Dearing, S., Giammarco, E., & Vernon, P. A. (2012). Relationships between bullying behaviors and the Dark Triad: A study with adults. *Personality and Individual Differences, 52*, 571-575.
- Benning, S. D., Venables, N. C., & Hall, J. R. (2018). Successful psychopathy. In C. J. Patrick (Ed.), *Handbook of psychopathy* (pp. 585-608). New York, NY, US: The Guilford Press.
- Birkás, B., Gács, B., & Csathó, Á. (2016). Keep calm and don't worry: Different Dark Triad traits predict distinct coping preferences. *Personality and Individual Differences, 88*, 134-138.
- Björkqvist, K., Lagerspetz, K. M., & Kaukiainen, A. (1992). Do girls manipulate and boys fight? Developmental trends in regard to direct and indirect aggression. *Aggressive Behavior, 18*, 117-127.
- Blackburn, R. (2006). Other theoretical models of psychopathy. In C. J. Patrick (Ed.), *Handbook of psychopathy* (pp. 35-57). New York: Guilford.
- Blair, R., Jones, L., Clark, F., & Smith, M. (1997). The psychopathic individual: A lack of responsiveness to distress cues? *Psychophysiology, 34*, 192-198.
- Blair, J. Mitchell, D., & Blair, K. (2005). *The psychopath: Emotion and the brain*. Malden, MA: Blackwell. (ブレア, J. ミッチェル, D. ブレア, K. 福井祐輝 (訳) (2009). サイコパス——冷淡な脳—— 星和書店)

- Bogolyubova, O., Panicheva, P., Tikhonov, R., Ivanov, V., & Ledovaya, Y. (2018). Dark personalities on Facebook: Harmful online behaviors and language. *Computers in Human Behavior, 78*, 151-159.
- Book, A., Visser, B. A., & Volk, A. A. (2015). Unpacking “evil”: Claiming the core of the Dark Triad. *Personality and Individual Differences, 73*, 29-38
- Buckels, E. E., Trapnell, P. D., & Paulhus, D. L. (2014). Trolls just want to have fun. *Personality and Individual Differences, 67*, 97-102.
- Buckels, E. E., Trapnell, P. D., Andjelovic, T., & Paulhus, D. L. (2018). Internet trolling and everyday sadism: Parallel effects on pain perception and moral judgment. *Journal of Personality, 87*, 328-340.
- Burtăverde, V., Chraif, M., Aniței, M., & Mihăilă, T. (2016). The incremental validity of the dark triad in predicting driving aggression. *Accident Analysis & Prevention, 96*, 1-11.
- Campbell, W. K., Brunell, A. B., & Finkel, E. J. (2006). Narcissism, interpersonal self-regulation, and romantic relationships: An agency model approach. In K. D. Vohs, & E. J. Finkel (Eds.), *Self and relationships: Connecting intrapersonal and interpersonal processes* (pp. 57-83). New York: Guilford Press.
- Campbell, W. K., & Campbell, S. M. (2009). On the self-regulatory dynamics created by the peculiar benefits and costs of narcissism: A contextual reinforcement model and examination of leadership. *Self & Identity, 8*, 214-232.
- Campbell, W. K., & Green, J. D. (2008). Narcissism and interpersonal self-regulation. In J. V. Wood, A. Tesser, & J. G. Holmes (Eds.), *The self and social relationships* (pp. 73-94). New York, NY: Psychology Press
- Campbell, W. K., & Foster, J. D. (2007). The narcissistic self: Background, an extended agency model, and ongoing controversies. In C. Sedikides & S. J. Spencer (Eds.), *The self* (pp. 115-138). New York, NY: Psychology Press.



- Carter, G. L., Campbell, A. C., Muncer, S., & Carter, K. A. (2015). A Mokken analysis of the Dark Triad 'Dirty Dozen': Sex and age differences in scale structures, and issues with individual items. *Personality and Individual Differences, 83*, 185-191.
- Carver, C. S. (1997). You want to measure coping but your protocol's too long: Consider the Brief COPE. *International Journal of Behavioral Medicine, 4*, 92-100.
- Carver, C. S., & Connor-Smith, J. (2010). Personality and coping. *Annual Review of Psychology, 61*, 679-704.
- Christie, R & Geis, F.L. (1970). *Studies in Machiavellianism*. New York, NY: Academic Press.
- Cima, M., Smeets, T., & Jelicic, M. (2008). Self-reported trauma, cortisol levels, and aggression in psychopathic and non-psychopathic prison inmates. *Biological psychology, 78*, 75-86.
- Cleckley, H. (1941/1976). *The mask of sanity* (5th ed.). St. Louis, MO: Mosby.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. (1990). Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood* (pp. 17-59). New York: Cambridge University Press.
- Craker, N., & March, E. (2016). The dark side of Facebook®: The Dark Tetrad, negative social potency, and trolling behaviours. *Personality and Individual Differences, 102*, 79-84.
- Crysel, L. C., Crosier, B. S., & Webster, G. D. (2013). The Dark Triad and risk behavior. *Personality and Individual Differences, 54*, 35-40.
- Czibor, A., & Bereczkei, T. (2012). Machiavellian people's success results from monitoring their partners. *Personality and Individual Differences, 53*, 202-206.

- Darwin, C (1859). *On the origin of species by means of natural selection, or preservation of favoured races in the struggle for life*. London: John Murray.
- Davis, M. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalogue of Selected Documents in Psychology*, 10, 85-103.
- Davis, M. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Decety, J., & Ickes, W. (Eds.) (2009). *The Social Neuroscience of Empathy*. MIT Press. (デセティ, J., アイクス, W. (編著) 岡田顕宏 (訳) (2016). 共感の社会神経科学 勁草書房)
- Del Giudice, M. (2018). *Evolutionary psychopathology: A unified approach*. Oxford University Press.
- Del Giudice, M., Ellis, B. J., & Shirtcliff, E. A. (2011). The adaptive calibration model of stress responsivity. *Neuroscience & Biobehavioral Reviews*, 35, 1562-1592.
- Deutchman P, Sullivan J (2018) The Dark Triad and framing effects predict selfish behavior in a one-shot Prisoner's Dilemma. *PLoS ONE*, 13, e0203891.
- Dickman, S. J. (1990). Functional and dysfunctional impulsivity: Personality and cognitive correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 95-102.
- Dowgwillo, E. A., & Pincus, A. L. (2017). Differentiating Dark Triad traits within and across interpersonal circumplex surfaces. *Assessment*, 24, 24-44.
- Dutton, K. (2012). *The wisdom of psychopaths: Lessons in life from Saints, spies and serial killers*. London: William Heinemann. (ダットン, K. 小林由香利 (訳) (2013) サイコパス——秘められた能力 NHK 出版)
- Eisenberg, N., & Miller, P. A. (1987). The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, 101, 91-119.

- Ellis, B. J., Figueredo, A. J., Brumbach, B. H., & Schlomer, G. L. (2009). Fundamental dimensions of environmental risk. *Human Nature, 20*, 204-268.
- Fehr, B., Samson, D., & Paulhus, D. L. (1992). The construct of Machiavellianism: Twenty years later. In C. D. Spielberger & J. N. Butcher (Eds.), *Advances in personality assessment*, Vol. 9, pp. 77-116). Hillsdale, NJ, US: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Figueredo, A. J., Vásquez, G., Brumbach, B. H., Schneider, S. M., Sefcek, J. A., Tal, I. R., ... & Jacobs, W. J. (2006). Consilience and life history theory: From genes to brain to reproductive strategy. *Developmental Review, 26*, 243-275.
- Figueredo, A. J., Vásquez, G., Brumbach, B. H., Sefcek, J. A., Kirsner, B. R., & Jacobs, W. J. (2005). The K-factor: Individual differences in life history strategy. *Personality and Individual Differences, 39*, 1349-1360.
- Folkman, S., & Moskowitz, J. T. (2004). Coping: Pitfalls and promise. *Annual Review of Psychology, 55*, 745-774
- Fukushima, O., & Hosoe, T. (2011). Narcissism, variability in self-concept, and well-being. *Journal of Research in Personality, 45*, 568-575.
- Furnham, A., Richards, S. C., & Paulhus, D. L. (2013). The Dark Triad of personality: A 10 year review. *Social and Personality Psychology Compass, 7*, 199-216.
- Furnham, A., Richards, S., Rangel, L., & Jones, D. N. (2014). Measuring malevolence: Quantitative issues surrounding the Dark Triad of personality. *Personality and Individual Differences, 67*, 114-121.
- Giammarco, E. A., & Vernon, P. A. (2014). Vengeance and the Dark Triad: The role of empathy and perspective taking in trait forgivingness. *Personality and Individual Differences, 67*, 23-29.

- Gibb, Z. G., & Devereux, P. G. (2014). Who does that anyway? Predictors and personality correlates of cyberbullying in college. *Computers in Human Behavior, 38*, 8-16.
- Gladden, P. R., Figueredo, A. J., & Jacobs, W. J. (2009). Life history strategy, psychopathic attitudes, personality, and general intelligence. *Personality and Individual Differences, 46*, 270-275.
- Glenn, A. L., Efferson, L. M., Iyer, R., & Graham, J. (2017). Values, goals, and motivations associated with psychopathy. *Journal of social and clinical psychology, 36*, 108-125.
- Glenn, A. L., & Sellbom, M. (2015). Theoretical and empirical concerns regarding the dark triad as a construct. *Journal of personality disorders, 29*, 360-377.
- Gordts, S., Uzieblo, K., Neumann, C., Van den Bussche, E., & Rossi, G. (2017). Validity of the Self-Report Psychopathy Scales (SRP-III full and short versions) in a community sample. *Assessment, 24*, 308-325.
- Gray, J. A. (1987). *The psychology of fear and stress* (2nd ed.). New York: McGraw-Hill.
- Gray, N., Weidacker, K., & Snowden, R. (2019). Psychopathy and Impulsivity: The relationship of psychopathy to different aspects of UPPS-P impulsivity. *Psychiatry Research, 272*. 474-482.
- Hare, R. D. (1980). A research scale for the assessment of psychopathy in criminal populations. *Personality and individual differences, 1*, 111-119.
- Hare, R. D., Harpur, T. J., Hakstian, A. R., Forth, A. E., Hart, S. D., & Newman, J. P. (1990). The revised psychopathy checklist: reliability and factor structure. *Psychological Assessment: A Journal of Consulting and Clinical Psychology, 2*, 338-341.
- Hare, R. D., Neumann, C. S., & Mokros, A. (2018). The PCL-R assessment of psychopathy: Development, properties, debates, and new directions. In C. J.

- Patrick (Ed.), *Handbook of Psychopathy*, 2nd Edition (pp. 39-79). New York, NY: Guilford Press.
- Harpur, T. J., Hare, R. D., & Hakstian, A. R. (1989). Two-factor conceptualization of psychopathy: Construct validity and assessment implications. *Psychological Assessment: A Journal of consulting and clinical Psychology*, *1*, 6-17.
- Harpur, T. J., Hakstian, A. R., & Hare, R. D. (1988). Factor structure of the Psychopathy Checklist. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *56*, 741-747.
- Haslam, N. (2016). Concept creep: Psychology's expanding concepts of harm and pathology. *Psychological Inquiry*, *27*, 1-17.
- 秦 一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, *61*, 227-234.
- Hawes, D. J., Brennan, J., & Dadds, M. R. (2009). Cortisol, callous-unemotional traits, and pathways to antisocial behavior. *Current opinion in psychiatry*, *22*, 357-362.
- Hicks, B. M., & Drislane, L. E. (2018). Variants (“subtypes”) of psychopathy. In C. J. Patrick (Ed.), *Handbook of psychopathy* (pp. 297-332). New York, NY, US: The Guilford Press.
- Hicks, B. M., & Patrick, C. J. (2006). Psychopathy and negative emotionality: analyses of suppressor effects reveal distinct relations with emotional distress, fearfulness, and anger-hostility. *Journal of abnormal psychology*, *115*, 276-287.
- 平石 界 (2010). 生物・進化理論との関係でみた研究法 日本発達心理学会 (編) 岩立 志津夫, 西野 康広 (責任編集) 研究法と尺度——発達科学ハンドブック 2 (pp. 186-196). 新曜社
- Horan, S. M., Guinn, T. D., & Banghart, S. (2015). Understanding relationships among the dark triad personality profile and romantic partners' conflict communication. *Communication Quarterly*, *63*, 156-170.

- Hughes, K. A., Moore, R. A., Morris, P. H., & Corr, P. J. (2012). Throwing light on the dark side of personality: Reinforcement sensitivity theory and primary/secondary psychopathy in a student population. *Personality and Individual Differences, 52*, 532-536.
- 市村 賢士郎・上田 祥行・楠見 孝 (2017). 清音ひらがな 5 文字のアナグラムデータベースの作成 心理学研究, 88, 241-250.
- 磯部 美良・菱沼 悠紀 (2007). 大学生における攻撃性と対人情報処理の関連——印象形成の観点から—— パーソナリティ研究, 15, 290-300.
- 岩崎 健二・大塚 泰正・佐々木 毅・毛利 一平 (2007). 「2006 年度働き方と健康に関するアンケート調査」報告書——蓄積疲労に関する疫学調査 2006 年の概要—— 労働安全衛生総合研究所
- Jakobwitz, S., & Egan, V. (2006). The dark triad and normal personality traits. *Personality and Individual Differences, 40*, 331-339
- Jonason, P. K., Baughman, H. M., Carter, G. L., & Parker, P. (2015). Dorian Gray without his portrait: Psychological, social, and physical health costs associated with the dark triad. *Personality and Individual Differences, 78*, 5-13.
- Jonason, P. K., & Buss, D. M. (2012). Avoiding entangling commitments: Tactics for implementing a short-term mating strategy. *Personality and Individual Differences, 52*, 606-610.
- Jonason, P. K., Icho, A., & Ireland, K. (2016). Resources, harshness, and unpredictability: the socioeconomic conditions associated with the Dark Triad traits. *Evolutionary Psychology, 14*, 1-11.
- Jonason, P. K., Kaufman, S. B., Webster, G. D., & Geher, G. (2013). What Lies Beneath the Dark Triad Dirty Dozen: Varied Relations with the Big Five. *Individual Differences Research, 11*, 81-90.
- Jonason, P. K., & Kavanagh, P. (2010). The dark side of love: Love styles and the Dark Triad. *Personality and Individual Differences, 49*, 606-610.

- Jonason, P. K., Koenig, B. L., & Tost, J. (2010). Living a fast life: The Dark Triad and life history theory. *Human Nature, 21*, 428-442.
- Jonason, P. K., & Kroll, C. H. (2015). A multidimensional view of the relationship between empathy and the dark triad. *Journal of Individual Differences, 36*, 150-156.
- Jonason, P. K., Li, N. P., & Buss, D. M. (2010). The costs and benefits of the Dark Triad: Implications for mate poaching and mate retention tactics. *Personality and Individual Differences, 48*, 373-378.
- Jonason, P. K., Li, N. P., & Czarna, A. Z. (2013). Quick and dirty: The Dark Triad is associated with a volatile socioecology in three countries. *Evolutionary psychology, 11*, 172-185.
- Jonason, P. K., Li, N. P., & Teicher, E. A. (2010). Who is James Bond?: The Dark Triad as an agentic social style. *Individual Differences Research, 8*, 111-120.
- Jonason, P. K., Li, N. P., Webster, G. D., & Schmitt, D. P. (2009). The Dark Triad: Facilitating a short-term mating strategy in men. *European Journal of Personality, 23*, 5-18.
- Jonason, P. K., & Luevano, V. X. (2013). Walking the thin line between efficiency and accuracy: Validity and structure of the Dirty Dozen. *Personality and Individual Differences, 55*, 76-81.
- Jonason, P. K., Luevano, V. X., & Adams, H. M. (2012). How the Dark Triad traits predict relationship choices. *Personality and Individual Differences, 53*, 180-184.
- Jonason, P. K., & McCain, J. (2012). Using the HEXACO model to test the validity of the Dirty Dozen measure of the Dark Triad. *Personality and Individual Differences, 53*, 935-938.
- Jonason, P.K., & Middleton, J.P. (2015). The Dark Triad: Welcome to the “dark side” of personality. In J.D. Wright (Ed.). *International Encyclopedia of*

- Social and Behavioral Sciences* (2nd ed., pp. 671-675). Oxford, England: Elsevier.
- Jonason, P. K., & Schmitt, D. P. (2012). What have you done for me lately?: Friendship-selection in the shadows of Dark Triad traits. *Evolutionary Psychology, 10*, 400-421.
- Jonason, P. K., Slomski, S., & Partyka, J. (2012). The Dark Triad at work: How toxic employees get their way. *Personality and Individual Differences, 52*, 449-453.
- Jonason, P. K., & Tost, J. (2010). I just cannot control myself: The Dark Triad and self-control. *Personality and Individual Differences, 49*, 611-615.
- Jonason, P. K., Valentine, K. A., Li, N. P., & Harbeson, C. L. (2011). Mate-selection and the Dark Triad: Facilitating a short-term mating strategy and creating a volatile environment. *Personality and Individual Differences, 51*, 759-763.
- Jonason, P. K., & Webster, G. D. (2010). The Dirty Dozen: A concise measure of the Dark Triad. *Psychological Assessment, 22*, 420-432.
- Jonason, P. K., Webster, G. D., Schmitt, D. P., Li, N. P., & Crysel, L. (2012). The antihero in popular culture: Life history theory and the dark triad personality traits. *Review of General Psychology, 16*, 192-199.
- Jones, D. N., & Figueredo, A. J. (2013). The core of darkness: Uncovering the heart of the Dark Triad. *European Journal of Personality, 27*, 521-531.
- Jones, D. N., & Neria, A. L. (2015). The Dark Triad and dispositional aggression. *Personality and Individual Differences, 86*, 360-364.
- Jones, D. N., & Olderbak, S. G. (2014). The associations among dark personalities and sexual tactics across different scenarios. *Journal of Interpersonal Violence, 29*, 1050-1070.



- Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2009). Machiavellianism. In M. R. Leary & R. H. Hoyle (Eds.), *Handbook of Individual Differences in Social Behavior* (pp. 93-108). New York: Guilford.
- Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2010a). Differentiating the Dark Triad within the interpersonal circumplex. In L. M. Horowitz & S. Strack (Eds.), *Handbook of Interpersonal Psychology: Theory, Research, Assessment, and Therapeutic Interventions* (pp. 249-268). New York: Wiley.
- Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2010b). Different provocations trigger aggression in narcissists and psychopaths. *Social Psychological and Personality Science*, *1*, 12-18.
- Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2011). The role of impulsivity in the Dark Triad of personality. *Personality and Individual Differences*, *51*, 670-682.
- Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2014). Introducing the short dark triad (SD3) a brief measure of dark personality traits. *Assessment*, *21*, 28-41.
- Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2017). Duplicity among the dark triad: Three faces of deceit. *Journal of Personality and Social Psychology*, *113*, 329-342.
- Kajonius, P. J., Persson, B. N., Rosenberg, P., & Garcia, D. (2016). The (mis) measurement of the Dark Triad Dirty Dozen: exploitation at the core of the scale. *PeerJ*, *4*, e1748.
- Karpman, B. (1941). On the need of separating psychopathy into two distinct clinical types: The symptomatic and the idiopathic. *Journal of Criminology and Psychopathology*, *3*, 112-137.
- Karpman, B. (1948). Conscience in the psychopath: Another version. *American Journal of Orthopsychiatry*, *18*, 455-491.
- 加藤 司 (2003). 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ, 精神的健康との関連について *社会心理学研究*, *18*, 78-88.

- 加藤 司 (2005). ストレスフルな状況に対するコーピングと精神的健康 東洋大学社会学部紀要, 43, 5-21.
- 嘉瀬貴祥・飯村周平・坂内くらら・大石和男 (2016). 青年・成人用ライフスキル尺度 (LSSAA)の作成 心理学研究, 87, 546-555.
- 嘉瀬貴祥・上野雄己・下司忠大 (2019). Dark Triad のライフスキルに対する関連—反社会的な性格特性の適応的, 不適応的側面に関する探索的検討—パーソナリティ研究 27, 266-269.
- Kavanagh, P. S., Signal, T. D., & Taylor, N. (2013). The Dark Triad and animal cruelty: Dark personalities, dark attitudes, and dark behaviors. *Personality and Individual Differences*, 55, 666-670.
- 川崎直樹 (2011). 自己愛の心理学的研究の歴史 小塩真司・川崎直樹 (編) 自己愛の心理学——概念・測定・パーソナリティ・対人関係—— 金子書房 (pp. 2-21)
- Kelley, H. H. (1987) Toward a taxonomy of interpersonal conflict process. In O. Stuart & S. Spacapan (Eds), *Interpersonal process* (pp. 122-147). New York: Sage.
- Kircaburun, K., Jonason, P. K., & Griffiths, M. D. (2018). The Dark Tetrad traits and problematic online gaming: The mediating role of online gaming motives and moderating role of game types. *Personality and Individual Differences*, 135, 298-303.
- Klimstra, T. A., Sijtsema, J. J., Henrichs, J., & Cima, M. (2014). The Dark Triad of personality in adolescence: Psychometric properties of a concise measure and associations with adolescent adjustment from a multi-informant perspective. *Journal of Research in Personality*, 53, 84-92.
- Knight, N. M., Dahlen, E. R., Bullock-Yowell, E., & Madson, M. B. (2018). The HEXACO model of personality and Dark Triad in relational aggression. *Personality and Individual Differences*, 122, 109-114.

- Knoll, N., Rieckmann, N., & Schwarzer, R. (2005). Coping as a mediator between personality and stress outcomes: a longitudinal study with cataract surgery patients. *European Journal of Personality, 19*, 229-247.
- 小西 瑞穂・大川 匡子・橋本 宰 (2006). 自己愛人格傾向尺度 (NPI-35) の作成の試み パーソナリティ研究, *14*, 214-226.
- Krägeloh, C. U. (2011). A systematic review of studies using the Brief COPE: Religious coping in factor analyses. *Religions, 2*, 216-246.
- Krauss, R. M., Freedman, J. L., & Whitcup, M. (1978). Field and laboratory studies of littering. *Journal of Experimental Social Psychology, 14*, 109-122.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company. (ラザルス, R. S., フォルクマン, S. 本明寛, 春木 豊, 織田 正美 (監訳) (1991). ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育 出版)
- Loney, B. R., Butler, M. A., Lima, E. N., Counts, C. A., & Eckel, L. A. (2006). The relation between salivary cortisol, callous-unemotional traits, and conduct problems in an adolescent non-referred sample. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 47*, 30-36.
- Leary, T. (1957). *Interpersonal diagnosis of personality*. New York: Ronald Press
- Leckelt, M., Wetzel, E., Gerlach, T. M., Ackerman, R. A., Miller, J. D., Chopik, W. J., ... & Richter, D. (2018). Validation of the Narcissistic Admiration and Rivalry Questionnaire Short Scale (NARQ-S) in convenience and representative samples. *Psychological assessment, 30*, 86.
- Lee, K., & Ashton, M. C. (2005). Psychopathy, Machiavellianism, and Narcissism in the Five-Factor Model and the HEXACO model of personality structure. *Personality and Individual Differences, 38*, 1571-1582.

- Lee, K., Ashton, M. C., Wiltshire, J., Bourdage, J. S., Visser, B. A., & Gallucci, A. (2013). Sex, power, and money: Prediction from the Dark Triad and Honesty-Humility. *European Journal of Personality, 27*, 169-184.
- Levenson, M. R., Kiehl, K. A., & Fitzpatrick, C. M. (1995). Assessing psychopathic attributes in a noninstitutionalized population. *Journal of personality and social psychology, 68*, 151-158.
- Levy, K. N., Ellison, W. D., & Reynoso, J. S. (2011). A historical review of narcissism and narcissistic personality. In W. K. Campbell & J. D. Miller (Eds.), *The handbook of narcissism and narcissistic personality disorder: Theoretical approaches, empirical findings, and treatments* (pp. 3-13). Hoboken, NJ, US: John Wiley & Sons Inc.
- Lilienfeld, S. O., & Widows, M. (2005). *Psychopathic Personality Inventory-Revised professional manual*. Odessa, FL: PAR.
- Lin, Y., Mutz, J., Clough, P. J., & Papageorgiou, K. A. (2017). Mental toughness and individual differences in learning, educational and work performance, psychological well-being, and personality: A systematic review. *Frontiers in Psychology, 8*, 1345.
- Lopes, B., & Yu, H. (2017). Who do you troll and Why: An investigation into the relationship between the Dark Triad Personalities and online trolling behaviours towards popular and less popular Facebook profiles. *Computers in Human Behavior, 77*, 69-76.
- Lowe-Calverley, E., & Grieve, R. (2017). Web of deceit: Relationships between the dark triad, perceived ability to deceive and cyber loafing. *Cyberpsychology: Journal of Psychosocial Research on Cyberspace, 11*, article 5.
- Lynam, D. R., Hoyle, R. H., & Newman, J. P. (2006). The perils of partialling: Cautionary tales from aggression and psychopathy. *Assessment, 13*, 328-341.

- Lynam, D. R., Miller, J. D., & Derefinko, K. J. (2018). Psychopathy and personality: An articulation of the benefits of a trait-based approach. In C. J. Patrick (Ed.), *Handbook of psychopathy* (pp. 259-280). New York, NY, US: The Guilford Press.
- Lyons, M., & Hughes, S. (2015). Feeling me, feeling you? Links between the Dark Triad and internal body awareness. *Personality and Individual Differences*, *86*, 308-311.
- Machiavelli, N. (1900) *Il principe*, Lisio, G (Ed.). Firenze: Sansoni. (マキヤベリ, N. 池田廉 (訳) (2018). 君主論 中央公論新社)
- Machiavelli, N. (1960) *Il principe e Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio*, Bertelli, S (Ed.), Milano: Feltrinelli. (マキヤベリ, N. 永井三明 (訳) (2015) デイスクルシ——「ローマ史」論 筑摩書房)
- Maples, J. L., Lamkin, J., & Miller, J. D. (2014). A test of two brief measures of the dark triad: The dirty dozen and short dark triad. *Psychological assessment*, *26*, 326-331.
- March, E., & Wagstaff, D. L. (2017). Sending nudes: Sex, self-rated mate value, and trait Machiavellianism predict sending unsolicited explicit images. *Frontiers in psychology*, *8*, 2210.
- March, E., Grieve, R., Marrington, J., & Jonason, P. K. (2017). Trolling on Tinder® (and other dating apps): Examining the role of the Dark Tetrad and impulsivity. *Personality and Individual Differences*, *110*, 139-143.
- Marušić, I., Bratko, D., & Zarevski, P. (1995). Self-reliance and some personality traits: sex differences. *Personality and Individual Differences*, *19*, 941-943.
- Masui, K., Fujiwara, H., & Ura, M. (2013). Social exclusion mediates the relationship between psychopathy and aggressive humor style in noninstitutionalized young adults. *Personality and Individual Differences*, *55*, 180-184.

- McCrae, R. R. (2015). A more nuanced view of reliability: Specificity in the trait hierarchy. *Personality and Social Psychology Review, 19*, 97-112.
- McDonald, M. M., Donnellan, M. B., & Navarrete, C. D. (2012). A life history approach to understanding the Dark Triad. *Personality and Individual Differences, 52*, 601-605.
- McHoskey, J. (1995). Narcissism and Machiavellianism. *Psychological Reports, 77*, 755-759.
- McHoskey, J. W., Worzel, W., & Szyarto, C. (1998). Machiavellianism and psychopathy. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 192-210.
- McIlwain, D. (2003). Bypassing empathy: A Machiavellian theory of mind and sneaky power. In B. Repacholi & V. Slaughter (Eds.), *Macquarie monographs in cognitive science. Individual differences in theory of mind: Implications for typical and atypical development* (pp. 39-66). New York, NY, US: Psychology Press.
- Mealey, L. (1995). The sociobiology of sociopathy: An integrated evolutionary model. *Behavioral and Brain sciences, 18*, 523-541.
- Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (2001). Expanding the dynamic self-regulatory processing model of narcissism: Research directions for the future. *Psychological Inquiry, 12*, 243-251.
- Miller, J. D., Few, L. R., Seibert, L. A., Watts, A., Zeichner, A., & Lynam, D. R. (2012). An examination of the dirty dozen measure of psychopathy: A cautionary tale about the costs of brief measures. *Psychological Assessment, 24*, 1048-1053.
- Monaghan, C., Bizumic, B., & Sellbom, M. (2016). The role of Machiavellian views and tactics in psychopathology. *Personality and Individual Differences, 94*, 72-81.

- Monaghan, C., Bizumic, B., & Sellbom, M. (2018). Nomological network of two-dimensional Machiavellianism. *Personality and Individual Differences, 130*, 161-173.
- Moor, L & Anderson, J. (2019). A systematic literature review of the relationship between dark personality traits and antisocial online behaviours. *Personality and Individual Differences, 144*, 40-55.
- Morgan, C. C., Mc Cartney, A. M., Donoghue, M. T., Loughran, N. B., Spillane, C., Teeling, E. C., & O'Connell, M. J. (2013). Molecular adaptation of telomere associated genes in mammals. *BMC evolutionary biology, 13*, 251.
- Muris, P., Merckelbach, H., Otgaar, H., & Meijer, E. (2017). The malevolent side of human nature: A meta-analysis and critical review of the literature on the Dark Triad (narcissism, Machiavellianism, and psychopathy). *Perspectives on Psychological Science, 12*, 183-204.
- 中島啓之 (1998) 青年期の逸脱行動と自己愛 辻井正次 (編) 現代青年の理解の仕方 ——発達臨床心理学的視点から—— (pp.169-180) ナカニシヤ出版
- 中村 敏健・平石 界・小田 亮・齋藤 慈子・坂口 菊恵・五百部 裕・長谷川 寿一 (2012). マキャベリアニズム尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 20, 233-235.
- 中山 留美 (2008). 肯定的自己評価の諸側面——自尊感情と自己愛に関する研究の概観から—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 55, 105-125.
- Nathanson, C., Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2006). Predictors of a behavioral measure of scholastic cheating: Personality and competence but not demographics. *Contemporary Educational Psychology, 31*, 97-122.

- Nettle, D. (2007). *Personality: What makes you the way you are*. Oxford: Oxford University Press. (ネトル, D. 竹内和世 (訳) (2009) パーソナリティを科学する 白揚社)
- Ng, H, Cheung, R. Y., & Tam, K. (2014). Unraveling the link between narcissism and psychological health: New evidence from coping flexibility. *Personality and Individual Differences, 70*, 7-10.
- O'Boyle, E. H., Jr., Forsyth, D. R., Banks, G. C., & McDaniel, M. A. (2012). A meta-analysis of the Dark Triad and work behavior: A social exchange perspective. *Journal of Applied Psychology, 97*, 557-579.
- O'Boyle, E. H., Forsyth, D. R., Banks, G. C., Story, P. A., & White, C. D. (2015). A meta-analytic test of redundancy and relative importance of the Dark Triad and Five-Factor Model of personality. *Journal of Personality, 83*, 644-664.
- 小塩 真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, *46*, 280-290.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み——対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴—— 教育心理学研究, *50*, 261-270.
- 岡本 安晴 (2014). 心理学データ分析と測定——データの見方と心の測り方—— 勁草書房
- 大隅 尚広・金山 範明・杉浦 義典・大平 英樹 (2007). 日本語版一次性二次性サイコパシー尺度の信頼性と妥当性の検討 パーソナリティ研究, *16*, 117-120.
- 大塚 泰 (2008). 理論的作成方法によるコーピング尺度——COPE—— 広島大学心理学研究, *8*, 121-128.
- Organ, D. W. (1988). *Organizational citizenship behavior: The good soldier syndrome*. Lexington, MA: Lexington Books.



- Otsuka, Y., Sasaki, T., Iwasaki, K., & Mori, I. (2009). Working hours, coping skills, and psychological health in Japanese daytime workers. *Industrial Health, 47*, 22-32.
- Otsuka, Y., Takada, M., Suzuki, A., Tomotake, S., & Nakata, A. (2008). The Japanese version of the Coping Orientation to Problems Experienced: A study of Japanese schoolteachers. *Psychological Reports, 103*, 395-405.
- Pabian, S., De Backer, C. J., & Vandebosch, H. (2015). Dark Triad personality traits and adolescent cyber-aggression. *Personality and Individual Differences, 75*, 41-46.
- Pailing, A., Boon, J., & Egan, V. (2014). Personality, the Dark Triad and violence. *Personality and Individual Differences, 67*, 81-86.
- Patrick, C. J. (2018). Psychopathy as masked pathology. In C. J. Patrick (Ed.), *Handbook of psychopathy* (2nd ed., pp. 3-21). New York, NY: Guilford.
- Paulhus, D. L. (2014). Toward a taxonomy of dark personalities. *Current Directions in Psychological Science, 23*, 421-426.
- Paulhus, D. L., & John, O. P. (1998). Egoistic and moralistic biases in self-perception: The interplay of self-deceptive styles with basic traits and motives. *Journal of personality, 66*, 1025-1060.
- Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002). The Dark Triad of personality: Narcissism, Machiavellianism, and psychopathy. *Journal of research in personality, 36*, 556-563.
- Penke, L., Denissen, J. J., & Miller, G. F. (2007). The evolutionary genetics of personality. *European Journal of Personality, 21*, 549-587.
- Penner, L. A., Dovidio, J. F., Piliavin, J. A., & Schroeder, D. A. (2005). Prosocial behavior: multilevel perspectives. *Annual review of psychology, 56*, 365-392.
- Persson, B. N., Kajonius, P. J., & Garcia, D. (2019). Revisiting the structure of the Short Dark Triad. *Assessment, 26*, 3-16.

- Piff, P. K., Kraus, M. W., Côté, S., Cheng, B. H., & Keltner, D. (2010). Having less, giving more: The influence of social class on prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology, 99*, 771-784.
- Pilch, I., & Górnik-Durose, M. E. (2016). Do we need “dark” traits to explain materialism? The incremental validity of the Dark Triad over the HEXACO domains in predicting materialistic orientation. *Personality and Individual Differences, 102*, 102-106.
- Rahim, M. A. & Bonoma, T. V. (1979). Managing organizational conflict: A model for diagnosis and intervention. *Psychological Reports, 55*, 439- 445.
- Rushton, J.P. (1985). Differential K theory: The sociobiology of individual and group differences. *Personality and Individual Differences, 6*, 441-452.
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports, 45*, 590.
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology, 54*, 890-902.
- Rauthmann, J. F., & Kolar, G. P. (2012). How “dark” are the Dark Triad traits? Examining the perceived darkness of narcissism, Machiavellianism, and psychopathy. *Personality and Individual Differences, 53*, 884-889.
- Rauthmann, J. F., & Kolar, G. P. (2013). Positioning the Dark Triad in the interpersonal circumplex: The friendly-dominant narcissist, hostile-submissive Machiavellian, and hostile-dominant psychopath?. *Personality and Individual Differences, 54*, 622-627.
- Rauthmann, J. F., & Will, T. (2011). Proposing a multidimensional Machiavellianism conceptualization. *Social Behavior and Personality: an international journal, 39*, 391-403.

- Rauthmann, J. F. (2013). Investigating the MACH-IV with item response theory and proposing the trimmed MACH. *Journal of personality assessment, 95*, 388-397.
- Rilling, J. K., Glenn, A. L., Jairam, M. R., Pagnoni, G., Goldsmith, D. R., Elfenbein, H. A., & Lilienfeld, S. O. (2007). Neural correlates of social cooperation and non-cooperation as a function of psychopathy. *Biological psychiatry, 61*, 1260-1271.
- Rose, A. J., Swenson, L. P., & Waller, E. M. (2004). Overt and relational aggression and perceived popularity: developmental differences in concurrent and prospective relations. *Developmental psychology, 40*, 378.
- Ross, S. R., Moltó, J., Poy, R., Segarra, P., Pastor, M. C., & Montanés, S. (2007). Gray's model and psychopathy: BIS but not BAS differentiates primary from secondary psychopathy in noninstitutionalized young adults. *Personality and Individual Differences, 43*, 1644-1655.
- Sakalaki, M., Richardson, C., & Thépaut, Y. (2007). Machiavellianism and economic opportunism. *Journal of Applied Social Psychology, 37*, 1181-1190.
- 櫻井良子 (2002). 中学生における関係性攻撃尺度作成の試み 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 898.
- Seigfried-Spellar, K. C., & Lankford, C. M. (2018). Personality and online environment factors differ for posters, trolls, lurkers, and confessors on Yik Yak. *Personality and Individual Differences, 124*, 54-56.
- 島本 好平・石井 源信 (2006). 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究 54, 211-221.
- 下司忠大・小塩真司 (2017). 日本語版 Short Dark Triad の作成 パーソナリティ研究 26, 12-22.
- 下司忠大・小塩真司 (2019). Dark Triad と他者操作方略との関連 パーソナリティ研究 28, 119-127.

- 下司忠大・吉野伸哉・小塩真司 (2019). Dark Triad の高い者はゴミのポイ捨てをしやすいのか パーソナリティ研究 28, 84-86.
- 孫武 (1961) 宋本十一家注孫子 中国 中華書局 (孫武, 金谷治 (訳) (2012). 新訂 孫子 岩波書店)
- Southard, A. C., Noser, A. E., Pollock, N. C., Mercer, S. H., & Zeigler-Hill, V. (2015). The interpersonal nature of dark personality features. *Journal of Social and Clinical Psychology, 34*, 555-586.
- Stout, M. (2005). *The sociopath next door: The ruthless versus the rest of us*. New York: Broadway Books
- 杉浦義典・佐藤 徳 (2005). 日本語版 Primary and Secondary Psychopathy Scale の妥当性 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, 407.
- Szabó, Z. P., Czibor, A., Restás, P., & Bereczkei, T. (2018). “The Darkest of all” The relationship between the Dark Triad traits and organizational citizenship behavior. *Personality and Individual Differences, 134*, 352-356.
- 田村 紋女・小塩 真司・田中 圭介・増井 啓太 (2015). 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 24, 26-37.
- 寺島 瞳・小玉 正博 (2004). 他者操作方略尺度作成の試み 筑波大学心理学研究, 28, 89-95.
- Tooby, J., & Cosmides, L. (1990). The past explains the present: Emotional adaptations and the structure of ancestral environments. *Ethology and sociobiology, 11*, 375-424.
- Turner, I. N., Foster, J. D., & Webster, G. D. (2019). The Dark Triad's inverse relations with cognitive and emotional empathy: High-powered tests with multiple measures. *Personality and Individual Differences, 139*, 1-6.
- Vaidyanathan, U., Hall, J. R., Patrick, C. J., & Bernat, E. M. (2011). Clarifying the role of defensive reactivity deficits in psychopathy and antisocial personality

- using startle reflex methodology. *Journal of Abnormal Psychology*, *120*, 253-258.
- van Geel, M., Goemans, A., Toprak, F., & Vedder, P. (2017). Which personality traits are related to traditional bullying and cyberbullying? A study with the Big Five, Dark Triad and sadism. *Personality and Individual Differences*, *106*, 231-235.
- Vaughan, R., Carter, G. L., Cockroft, D., & Maggiorini, L. (2018). Harder, better, faster, stronger? Mental toughness, the dark triad and physical activity. *Personality and Individual Differences*, *131*, 206-211.
- Vernon, P. A., Villani, V. C., Vickers, L. C., & Harris, J. A. (2008). A behavioral genetic investigation of the Dark Triad and the Big 5. *Personality and Individual Differences*, *44*, 445-452.
- Veselka, L., Schermer, J. A., & Vernon, P. A. (2011). Beyond the big five: The dark triad and the supernumerary personality inventory. *Twin Research and Human Genetics*, *14*, 158-168.
- Vize, C. E., Collison, K. L., Miller, J. D., & Lynam, D. R. (2018). Examining the effects of controlling for shared variance among the dark triad using meta-analytic structural equation modelling. *European Journal of Personality*, *32*, 46-61.
- Vize, C. E., Lynam, D. R., Collison, K. L., & Miller, J. D. (2018). Differences among dark triad components: A meta-analytic investigation. *Personality Disorders: Theory, Research, and Treatment*, *9*, 101-111.
- Wai, M., & Tiliopoulos, N. (2012). The affective and cognitive empathic nature of the dark triad of personality. *Personality and Individual Differences*, *52*, 794-799.

- Watson, D., David, J. P., & Suls, J. (1999). Personality, affectivity, and coping. In C. R. Snyder (Ed.), *Coping: The psychology of what works* (pp. 119-140). New York: Oxford University Press.
- Watson, P. J., & Morris, R. J. (1991). Narcissism, empathy and social desirability. *Personality and Individual Differences, 12*, 575-579.
- Watson, P. J., & Morris, R. J. (1994). Communal orientation and individualism: Factors and correlations with values, social adjustment, and self-esteem. *The Journal of Psychology, 128*, 289-297.
- Webster, G. D., & Jonason, P. K. (2013). Putting the “IRT” in “Dirty”: Item Response Theory analyses of the Dark Triad Dirty Dozen—An efficient measure of narcissism, psychopathy, and Machiavellianism. *Personality and Individual Differences, 54*, 302-306.
- Williams, K. M., Paulhus, D. L., & Hare, R. D. (2007). Capturing the four-factor structure of psychopathy in college students via self-report. *Journal of personality assessment, 88*, 205-219.
- Williams, K. M., Nathanson, C., & Paulhus, D. L. (2010). Identifying and profiling scholastic cheaters: Their personality, cognitive ability, and motivation. *Journal of Experimental Psychology: Applied, 16*, 293-307.
- World Health Organization (1994). Life skills education for children and adolescents in schools. World Health Organization. Retrieved from <http://apps.who.int/iris/handle/10665/63552> (July 16, 2019) (世界保健機関, 川畑 徹朗・高石 昌弘・西岡 伸紀・石川 哲也・JKYB 研究会 (訳)(1997). WHO・ライフスキル教育プログラム 大修館書店)
- 柳田 宗孝・荒井 崇史・藤 桂 (2018). サイコパシー特性と非道徳的行動の関係に対するサポートの調整効果 心理学研究, 89, 1-11.
- Zhang, J., Paulhus, D. L., & Ziegler, M. (2019). Personality predictors of scholastic cheating in a Chinese sample. *Educational Psychology, 39*, 572-590.

Zimmer-Gembeck, M. J., Geiger, T. C., & Crick, N. R. (2005). Relational and physical aggression, prosocial behavior, and peer relations: Gender moderation and bidirectional associations. *The Journal of Early Adolescence, 25*, 421-452.